



Title	音声的特徴から見た日本語感動詞の機能
Author(s)	須藤, 潤
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/873">https://hdl.handle.net/11094/873</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 博士論文

題目：音声的特徴から見た

日本語感動詞の機能

提出年月 2008年6月

言語社会研究科 言語社会専攻

氏名 須藤 潤

## 要旨

日本語の感動詞は国語学・文法論からの位置づけがなされてきた一方で、応答表現、あいつち、談話標識、言いよどみ・フィラーといった談話研究からの位置づけも盛んに行われている。しかしながら、感動詞は音声コミュニケーションにおいて典型的に現れるにもかかわらず、音声的な位置づけはほとんど行われていない。アクセント型の記述やモーラ単位による区切りなど音韻的に解決しなければならない問題があるにもかかわらず、従来の研究の多くは、感動詞の音声的特徴には全く触れない、あるいは、部分的な記述のみに終始していた。よって、感動詞を音声の側面から記述し、音声的な枠組みを整備することは、日本語教育にとって有益であることのみならず、文法論や談話研究において感動詞の機能を考える上で、多くの示唆を与えるであろう。

そこで、本研究では次の2つを目標に据えた。1つは、日本語感動詞の音声について全体的な記述を行うこと、そしてもう1つは、感動詞の持つ機能を音声の側面から解明することである。

具体的な議論に入る前に、2章では感動詞の意味・機能に関する先行研究と、音声会話における音声と情報伝達に関する先行研究を概観し、本研究の方向性をより明確にした。感動詞の意味・機能に関する先行研究から指摘できることは、従来の多くの論考において、感動詞の音声的特徴を記述することの重要性を指摘しているにもかかわらず、音声の枠組みに沿った記述がなされていないことが多いということである。そのため、分析対象である感動詞の音の高さの変動を観察することに終始し、感動詞全体の音声的な枠組みを踏まえた議論になかなか進んでいかないのである。一方で、音声と情報伝達に関する先行研究からは、音声と言語的な情報のみならず、会話参加者や発話環境といった情報と関係があるということが示唆された。

このような問題点や示唆を踏まえ、具体的に本研究では、まず、内省や先行研究、データの観察などをもとに、様々な感動詞の音調（音の高さの変化）を日本語のアクセント・イントネーション体系に位置づけ、音調とそれを規定する要因の整理を行った。次に、個々の感動詞について調査協力者から得られた音声データの分析を行い、音声的特徴と要因との対応関係をさらにきめ細かく作り上げていった。そして、感動詞の言語的な意味・機能、会話参加者間の対人関係など、これまで指摘されてきた音声的特徴に多様性を持たせる要因を総合的に再検討し、最後に、音韻的な観点から日本語の語彙における感動詞の位置づ

けについてまとめた。これにより、従来の先行研究の問題点を解決できると考えた。

総論となる3章では、感動詞の音調をアクセント・イントネーションの枠組みで記述し、意味・機能など音調を規定する要因を整理した。

3章では、まず、感動詞の音調を記述するための枠組みとなる、アクセント・イントネーションについて検討した。特に感動詞は単独で文となりうることから、文末音調に準じた、その感動詞固有の音調としての「語末音調」を枠組みとして取り入れた。この枠組みにより、ほぼすべての感動詞の音調が記述可能となると考え、原則的にアクセント型と語末音調との組み合わせでの記述をめざした。

次に、音調を記述する上での分類基準として、モーラと音節に触れた。特に下降の音調以外にモーラを数える手がかりに乏しい1音節の感動詞は、持続時間を頼りにモーラを数えることが多い。そのため、そのようなモーラ単位による分類がどこまで意味あるものなのか判断しがたい。しかし、その一方で、音節単位の分類とすると、様々な音調や長さを一元的に扱え、かつ、音節構造が似ている感動詞同士で音声的特徴の比較もしやすくなるという利点がある。このことから、感動詞を1音節感動詞と2音節感動詞に分類し、音調を記述することとした。

記述の結果、1音節感動詞については、音調のタイプ別に分類すると、1種類のアクセント型と1種類の語末音調（平調）で説明できる第一のタイプ、有核と無核という2つのアクセント型と1種類の語末音調（平調）で説明できる第二のタイプ、そして、有核と無核の2つのアクセント型とそれに伴う複数の語末音調によって説明できる第三のタイプが見られた。また、有核と無核の2つのアクセント型を持つ第二・第三のタイプには、入力情報の処理過程に関わる意味・機能があり、語末音調が平調の場合は、有核と無核で意味・機能の使い分けが見られた。2音節感動詞については、上で触れた第一のタイプと第三のタイプに加え、1種類のアクセント型と複数の語末音調で説明できる第四のタイプが見られた。第三・第四のタイプとも入力情報の処理過程に関わる意味・機能があった。

このように感動詞は、音調のタイプ別に4つに分類できることがわかった。また、このような音調のタイプは入力情報の処理過程の表示とも関係があり、1種類のアクセント型＋平調のみで音調が説明できる、音調のバリエーションがない第一のタイプの感動詞は、基本的には入力情報の処理過程を表示しない「非処理」であったが、そのほかのタイプの感動詞は「入力情報の処理開始表示」「入力情報の処理結果表示」「入力情報の処理前表示」という入力情報の処理過程を表示するものであった。したがって、入力情報の処理過程を

表示する感動詞は、話し手の様々な態度表示や認識の変化の表示に対応できるように、2つのアクセント型、あるいは、複数の語末音調、もしくは両方の組み合わせによる音調のバリエーションが必然的に備わっていなければならない、という結論に至った。

次の4章では、個々の感動詞についての議論として、音声的特徴と意味・機能のバリエーションが豊富な「うん系」感動詞の音声的特徴と意味・機能に焦点を当てた。具体的にはまず、先行研究やテレビドラマの会話資料の採集データ(82例の「うん」)に即した、「うん系」感動詞の意味・機能の分類と音声的特徴の観察を行った。その結果、採集データの「うん」についても、3章の入力情報の処理過程に沿った「入力情報の処理結果表示系」「入力情報の処理開始表示系」「入力情報の処理前表示系」「非処理系」という4種類に分類が可能であった。また、採集データのうち90%以上の「うん」が「入力情報の処理結果表示系」に分類されていた。さらに、採集データを見ると、4種類の分類の中にも様々な意味・機能のタイプがあり、その微妙な違いも音声的特徴を左右するという可能性も指摘できた。

次に、そのような微妙な意味・機能の違いと音声的特徴との関係について、「入力情報の処理結果表示系」の意味・機能のうち、情報の入力に対する肯定的な結果表示の「受け入れ」に焦点を当てた。具体的には、まず、実験用に作成した会話の中の相手の意見に対し、同意の場合と非同意の場合を「うん」を含む発話で調査協力者に会話文を読み上げてもらう実験を行った。そして、実験によって得られた発話データについて音響分析を行い、同意・非同意という受け入れの度合いの違いが「うん」の韻律的特徴にどのような変化をもたらすかを観察した。その結果、同意・非同意の「うん」には持続時間と $F_0$ の下降の傾きについて有意な差が見られた。そして、この要因として「非同意の際の相手への配慮」と「肯定的な要素の強さ」を指摘した。

さらに4章では、否定的な結果表示の「うん(ううん)」と「いや」についても、会話文の読み上げ実験により得られた発話データの音響分析による $F_0$ 曲線の観察を行い、アクセント・イントネーションの枠組みに位置づけた説明を試みた。その結果、語末音調に共通して、問いかけとは異なる特有の疑問型上昇調が現れたものの、アクセントの枠組みで考えると、互いに異なるアクセント型となり、意味・機能が共通するからといって、音調が共通するとは必ずしも言えなかった。

それから、5章では、応答発話に現れる「あ」の音声的特徴と会話参加者間の対人関係に焦点を当てた。先行して行った会話文読み上げ実験における発話データの分析結果をもとに、様々な持続時間・ $F_0$ 曲線に合成した「あ、持って来てました」を刺激音とした聴取

実験を行った。その刺激音を応答発話として発する話し手と相手との対人関係について、親疎（「親しい」と「初対面」）と「上下」（「相手が上」「相手と同等」）という二つの軸で回答を求めた。その結果、①持続時間が 150ms 以下、高めの  $F_0$ 、そして「持って来てました」の高めの「て」が「相手が上」「初対面」と判断される傾向、② $F_0$  下降型が「親しい」と判断される傾向、③持続時間が 250ms 以上の「あ」が「相手と同等」と判断される傾向が見られ、これらについては、発話の際の、話し手の生理的側面と意図的側面（話し手の緊張、相手のフェイスに対する配慮の手段としての「私的な」情報の表示）により説明が可能であった。しかし、 $F_0$  が 320Hz 平板・持続時間が 250ms 以上の「あ」が「親しい」と判断された傾向については、発話機能などといったほかの側面から考えるべきものと判断された。

そして、6 章では、3 章から 5 章までの議論をまとめ、それをもとに、音声的な側面から「感動詞の機能」に関する知見を指摘した。第一に、感動詞の音調はアクセント・イントネーションの枠組みで記述可能であるが、語によって同一語に有核・無核の 2 つのアクセント型、そして、様々な種類の語末音調（語に帰属する文末音調に準じた音調）が見られた。第二に、音調の側面から感動詞を類型化すると、アクセント型が一つで、語末音調として平調以外が伴うことがないタイプと、アクセント型が有核・無核の二つで、様々な語末音調が伴うタイプとに大きく分けられた。そして、前者のタイプは「非処理」の感動詞、後者は情報処理過程の表示にかかわる感動詞、と話し手の情報の処理過程の表示を担うかどうかと対応関係を持っていることがわかった。そして、第三に、感動詞の音声的特徴を規定する要因として、語彙的な要因、意図的な要因、生理的な要因があることを指摘した。

最後に、7 章では、以上の議論を総括し、今後の課題として、音調と要因間の見取り図の精度をより上げるため、入力情報の処理過程による感動詞の機能が説明可能かどうか検証すること、個々の感動詞について自然発話データや実験的手法により得られた発話データの分析による検証を行うことなどを指摘した。そして、そのための出発点として「うん系」感動詞の分析範囲を広げ、他の感動詞を検討する際の基礎となる見取り図を作るべきであると述べた。

## SUMMARY

In recent times, interjection in Japanese is being studied as part of Japanese philology, particularly in grammar and discourse. However, they have rarely been studied in phonetics, although they are typically used in oral communication. Most of the traditional researches have completely overlooked the phonetic features of interjections. Although a few studies have considered aspects such as the pitch contour of each interjection they have not studied the description of accent or mora segmentation. In other words, no previous study has described the phonetic features of Japanese interjections based on the Japanese phonetic system. However, such a systematic description is needed in the field of language education, especially for teaching oral communication. In addition, such a description can be extremely useful for examining the usage, meanings, and functions of interjections in the field of grammatical and discourse studies.

This dissertation has the following two research goals: (1) to provide a description of the phonetic features of Japanese interjections and (2) to approach the function of the interjection from the viewpoint of phonetics.

In order to specify the direction of this research, in Chapter 2, I cited some problems with earlier researches on interjections and some suggestions offered by recent researches on the relationship between phonetics and information transmission. In this dissertation, I first classified the tones of interjections based on the factors for defining the tones in the accent and intonation system in Japanese (Chapter 3). Second, I conducted an acoustic analysis of the phonetic data on each interjection obtained from the informants in this study in order to understand the relationship between the phonetic features and factors in detail (Chapter 4 and 5). Then, I reexamine the factors such as the meanings and functions of interjections and the relationship between interlocutors. Finally, I clarified the homogeneity and heterogeneity of the usage of the interjection as a word in the Japanese lexicon from a phonetic viewpoint (Chapter 6). In this manner, I aimed to provide a phonetic description of Japanese interjections.

In Chapter 3, I constructed a framework for describing the tone. The tone comprised not only the accent pattern but also the “word-final tone” pattern, which are

inherent features of an interjection. Moreover, I classified interjections into two categories for convenience of description: single-syllable and double-syllable interjections.

Single-syllable interjections were divided into three categories based on the types of tone: (1) interjections whose tones could be defined by both one accent pattern and one word-final tone pattern; (2) interjections whose tones could be defined by both two accent patterns, depending on whether or not the pattern contains the accent nucleus, and one word-final tone pattern; and (3) interjections whose tones could be defined by both two accent patterns, as in Category 2, and several word-final tone patterns. Further, the interjections in Categories 2 and 3 had meanings and functions that reflected the speaker's information processing.

Double-syllable interjections were divided into Categories 1 and 3 as mentioned above and Category 4—an interjection whose tone could be defined by both one accent pattern and several word-final tone patterns. Interjections in Category 4, too, reflected the speaker's information processing.

In Chapter 4, I focused on the interjection *un* as an instance of an interjection that has various phonetic features as well as various meanings and functions. First, I examined its phonetic features and categorized its meanings and functions, utilizing the phonetic data obtained from a television drama and earlier researches. Second, I presented the observations of an experiment that I conducted on the interjection's function of expressing acceptance. This experiment examined the relationship between subtle differences in the levels of acceptance and their phonetic features. Significant differences in the duration and the  $F_0$  falling slope were found between the two levels of acceptance: complete and partial. I identified “consideration for the other interlocutor” and the “degree of affirmative element” as the factors that led to such significant differences.

In addition, I conducted an experiment on the interjections *un* and *iya*, both of which express negation. The question-style rising tone, which does not have a questioning function, was found to be a word-final tone in both interjections. However, the accent patterns of these two interjections were found to be different,

although both have the same function.

In Chapter 5, I focused on the phonetic features of the interjection *a* in uttering the answer and on the social relationships between interlocutors. I also conducted a listening comprehension experiment, wherein the informants listened to sound stimulations synthesized in various durations and  $F_0$  contours and chose a suitable social relationship (closeness and social standing) between the speaker who utters the interjection and the hearer. The results of the experiment revealed that the subjects felt that the hearer was superior to and “less familiar” with the speaker due to the shorter duration and higher  $F_0$ . On the other hand, they felt that the hearer is “closely familiar” with the speaker due to the falling  $F_0$  contour. The results could be generally explained from the physiological and intentional aspects: speaker’s tension and display of private information in order to prevent a loss of face for the hearer.

In Chapter 6, I considered the functions of interjections from a phonetic point of view, summarizing the issues mentioned above. Three characteristics of interjections were identified. First, although the tone of interjections could be described on basis of the accent and intonation system in Japanese, there are interjections that have two accent patterns and various types of word-final tones. Second, there are interjections that have only one accent pattern and only one word-final tone. There are also interjections that have two accent patterns and several word-final tones. It was found that such a difference in tone corresponded to whether or not an interjection displayed information processing. Third, I indicated that an examination of the lexical, intentional, and physiological factors is necessary for identifying the phonetic features of interjections.

I also highlighted some tasks for the future: (1) determining whether the practical functions of interjections in any discourse can be explained by the speaker’s information processing and (2) examining the functions and phonetic features of each interjection by analyzing spontaneous speech data and experimental speech data. In order to resolve these issues, I proposed that a thorough analysis of the interjection *un* could serve as a basis for the examination of other interjections.

# 目次

日本語要旨	i
英語要旨	v
<b>第1章 はじめに</b>	<b>1</b>
<b>第2章 先行研究概観</b>	<b>6</b>
2.1 感動詞に関する研究	6
2.1.1 全般的に感動詞を扱った研究	6
2.1.2 談話における感動詞の研究—あいづち, フィラー, 応答詞, 談話標識など	11
2.1.3 感動詞の音声を扱う研究—感性情報, 一語性	15
2.1.4 まとめ	16
2.2 音声的特徴と情報伝達に関する研究	17
2.2.1 音声と情報伝達・音調の規定要因	17
2.2.2 対人関係・丁寧さに関する論考	19
2.2.3 まとめ	21
2.3 おわりに—本研究の方向性	22
<b>第3章 日本語感動詞の音調記述の試み</b>	<b>25</b>
3.1 はじめに—日本語感動詞の音調・アクセント	25
3.2 感動詞の音調記述のための枠組み	26
3.2.1 アクセント・イントネーション・文末音調	26
3.2.2 仮説—感動詞の音調をどう位置づけるか	28
3.2.3 モーラと音節	30
3.2.4 対象とする感動詞	31
3.3 内省に基づく1音節感動詞の音調の記述	33
3.3.1 1音節感動詞①	33
3.3.2 1音節感動詞②	41

3. 3. 3	1音節感動詞の音調と意味・機能のまとめ	45
3. 4	内省に基づく2音節感動詞の音調の記述	47
3. 4. 1	2音節感動詞①—「あら」「おや」	47
3. 4. 2	2音節感動詞②—「いいえ」「いや」	51
3. 4. 3	2音節感動詞③—「こら」「ほら」	59
3. 4. 4	2音節感動詞④—「ええと」「うんと」「おっと」	60
3. 4. 5	2音節感動詞の音調と意味・機能のまとめ	63
3. 5	考察のまとめ	65
3. 5. 1	アクセント・イントネーションの枠組みへの位置づけ	66
3. 5. 2	感動詞の音調と意味・機能	66
3. 6	おわりに	68

#### 第4章 感動詞の音声的特徴と意味・機能—「うん」の分析

4. 1	はじめに	69
4. 1. 1	なぜ「うん」か?	69
4. 1. 2	本章の構成	70
4. 2	「うん」の韻律的特徴の観察—ドラマ音声の分析から	71
4. 2. 1	談話資料について	71
4. 2. 2	「うん」の音声的特徴に関する記述について	73
4. 2. 3	分類	75
4. 2. 4	考察	85
4. 2. 5	まとめ	87
4. 3	「うん」と肯定的な結果表示	87
4. 3. 1	問題の所在—受け入れの度合いと「うん」の韻律的特徴	87
4. 3. 2	実験	89
4. 3. 3	分析	91
4. 3. 4	結果と考察	92
4. 3. 5	まとめ	94
4. 4	「うん」と否定的な結果表示	95
4. 4. 1	問題の所在	95

4. 4. 2	実験	97
4. 4. 3	分析	98
4. 4. 4	結果と考察	100
4. 4. 5	まとめ	101
4. 5	おわりに	102

## 第5章 感動詞の音声的特徴と対人関係—「あ」の分析

5. 1	はじめに	104
5. 2	問題提起	105
5. 3	会話文読み上げ実験	106
5. 3. 1	実験の概要	106
5. 3. 2	実験の結果	107
5. 3. 3	まとめ	109
5. 4	聴取実験	109
5. 4. 1	概要	109
5. 4. 2	刺激音	110
5. 4. 3	調査協力者	113
5. 4. 4	回答の方法	113
5. 4. 5	結果	113
5. 5	聴取実験結果のまとめ	119
5. 5. 1	上下関係	119
5. 5. 2	親疎関係	120
5. 6	考察	120
5. 6. 1	話し手の生理的要因—緊張	121
5. 6. 2	話し手の意図的要因—相手のフェイスに対する配慮と、その手段としての「私的な」情報の表示	121
5. 6. 3	対人関係と音声的特徴	122
5. 7	おわりに	124

## 第6章 まとめ～音声的特徴から見た感動詞の機能とは

6. 1	感動詞の音声的特徴を規定する要因	126
6. 1. 1	言語的な意味・機能	126
6. 1. 2	対人関係	127
6. 2	規定された結果としての感動詞の音声的特徴	128
6. 2. 1	アクセント・イントネーションの枠組みに位置づけられた感動詞の音調 .....	128
6. 2. 2	肯定と否定の音声的特徴	129
6. 2. 3	対人関係と音声的特徴	130
6. 3	音声的特徴を規定する要因の再検討—語彙的な要因・意図的な要因・生理的な 要因.....	131
6. 4	感動詞は日本語の語彙の中でどのように位置づけられるか	134

**第7章 おわりに** ..... 137

謝辞	140
資料	141
参考文献	148

# 第1章

## はじめに

日本語<sup>1</sup>の感動詞と言え、例えば、何かに驚いたり感動したり、話し手の感情の動きに即して発せられる「あっ」「えっ」「わあ」「へえ」「おや」「まあ」「あーあ」などといった語群や、相手の問いかけに答えるときに発せられる「ええ」「はい」「いいえ」といった語群、さらには、「おい」「こら」などといった呼びかけ、「よいしょ」「せーの」などの掛け声、「やあ」「こんにちは」「おはようございます」といったあいさつなど、ざっと挙げただけでも、感動詞のカテゴリは広く、そして雑多なものに思える。高橋他（2005）によれば、「感動詞は、はなし手のきもちをあらわし、それ自身で、よびかけ・うけこたえ・あいさつ・さけび・かけごえ・おとなどをあらわす独立語文となったり、あるいは、文のなかでそうした意味を表す独立語となったりする単語の種類である」とされている。

そもそも「感動詞」という用語は100年以上前にさかのぼる。山田（1908）の『日本文法論』によると、「国語学の歴史を按ずるに所謂感動詞といふ名目を設くることは西洋文典の模倣によりて設けられしを始めとす」とあるように、西洋文典の *interjection* を国語学に位置づけようとしてできた用語のようである。山口（1984）によると、「大槻文彦『言海』（明治二四年刊）付録の「語法指南」、『広日本文典』（明治三〇年刊）の使用例が早く、そこではいわゆる間投助詞・終助詞などの類もふくめての用語であった」ということで、当時は「かな」「や」「な」などといった助詞も含まれることもあったが、文頭や文末や文節と文節の間に出現できるという間投性の有無でそれら助詞を除外するという山田孝雄などによる批判を経て、概ね現代の感動詞の範疇に定着してきたようである。また、感動詞と似たことばに「間投詞」があるが、これについても山田が『日本文法論』で西洋文典の *interjection* の訳語として妥当であると述べている<sup>2</sup>。もっとも現代では、山口（1984）によれば、間投詞は単に感動詞の別称として用いられているということで、両者はほぼ同じように使われている。なお、本研究では、いわゆる学校文法や一般的な文法書における品詞分類で慣用的に用いられている「感動詞」という用語を用いることにする。

このように、感動詞とは国語学・文法論の側面からの位置づけである。その位置づけ方、

---

<sup>1</sup> 本研究における論考は東京方言を対象とし、特に断りがない限り、本文中の「日本語」は東京方言を指す。だが、これは他の方言も同等に日本語であるという立場を否定する意図ではない。

<sup>2</sup> ただ、山田は間投詞は副詞の中に一括されると述べ、間投詞または感動詞を1つの品詞としては認めていない。

つまり、国語学・文法論から見た感動詞の特徴は、研究者によりやや違いがあるものの、鈴木（1973）をもとにまとめると、おおむね以下のような特徴を持っていると言える。

①文としては独立した成分で、一語のみで一文が形成できる。

②一般的な文では、事柄の表現と事柄に対する話し手の立場の表現が区別できるが、感動詞はそれが区別できない。つまり、主体と客体が分化していない表現<sup>3</sup>である。そのため、後続などに文を伴うなど、適当な文脈がなければ解釈できないこともある<sup>4</sup>。

③用法として、大きく分けると、感情の表現と意志の表現とに分けられる。さらに意志の表現は呼びかけや応答などに分かれる<sup>5</sup>。

特に②のような、主体と客体が未分化である点は、感動詞が一般的な語とは大きく性質が異なる点である。つまり、「あっ！」のように感動詞単独で文が形成できるとはいえ、話し手がどんな事柄について、何を意図しているかということは文脈に即さなければ解釈できないということである。

また、一方で感動詞は、応答表現<sup>6</sup>、あいづち<sup>7</sup>、談話標識<sup>8</sup>、言いよどみ・フィラー<sup>9</sup>などといった談話の側面からも位置づけがなされており、談話、特に音声を媒介とした会話において感動詞は不可欠であり、談話研究にとって重要な要素であるといえる。

それでは、音声の側面からはどのような位置づけがなされているであろうか。管見の限り、感動詞全体を体系的に音声の枠組みに位置づけた研究は見当たらないが、以下に述べるように、感動詞は他の品詞とは異なる音声的特徴を多く兼ね備えていると言える。

まず、アクセント・イントネーションに関しては、日本語の一般的な語はアクセントを持ち、それぞれの語固有の音の高さの変動はアクセント型（平板型・起伏型）で説明可能であるとされているが、感動詞の場合、例えば否定の応答に用いられる「ううん」は語頭から下降して、語末で急激に上昇する、あるいは、やや上昇することが多く（須藤 2007b）、

<sup>3</sup> 時枝（1950）では、「主客合一、主客未割の表現」と述べられている。

<sup>4</sup> 山田（1908）は本研究における感動詞が含まれる「感応副詞」について、「皆文即一思想の前行体をなすものなるが、其の観念頗る広漠にして、之に予示せられ喚起せられたる文の発生によりて始めて価値を認めらるゝ場合往々あり」と述べている。

<sup>5</sup> 橋本（1959）では、「自らいふ〔感動〕と「人に対していふ〔応答〕〔呼掛〕」の二種三類に分けている。また、宮地（1979）では、「感動詞」「応答詞」という区別を支持している。

<sup>6</sup> 例えば、北川（1977）、奥津（1989）、沖（1993）、青柳（2001）、中島（2001）、山根（2003）、富樫（2006）など。

<sup>7</sup> 例えば、堀口（1988, 1997）、水谷（1988）、Maynard（1989）、ザトラウスキー（1993）、メイナード（1993）、中島（2000）など。

<sup>8</sup> 例えば、日本語では熊取谷（1992）、富樫（2002a）など。英語ではSchiffrin（1988）、Schourup（2002）、西川（2002, 2003）など。

<sup>9</sup> 例えば、塩沢（1979）、Howell and Yamaguchi（1979）、田中（1981, 1982, 1993, 1995）、Maynard（1989）、山根（2002）など。

この場合、アクセント型のみでこの音の高さの変動を説明することは不可能である。

また、「ああ」「ええ」「はい」「うん」といった感動詞の音の高さが語頭から顕著に下降している場合、それぞれ用法が異なるものの、共通して同意や相手の話を聞いているといった話し手<sup>10</sup>の態度を示すことが可能である。日本語の語で頭高型アクセントが共通の意味を持つということは通常ないわけで、この点からも、感動詞は一般的な語アクセント体系とは幾分異質である。このような現象を踏まえると、感動詞の音の高さの変化は語アクセントによるものなのか、イントネーションによるものなのかという問題が生じる。

さらに、モーラ性について言えば、例えば名詞のキ（木）とキー（鍵の意味）は、どちらもアクセント核があり、同じ分節音で構成された語であるが、モーラ数で異なっており、意味の弁別要素となっている。ところが、感動詞についてはモーラ数や長さの制約が緩やかである。例えば、言いよどみなどで用いられる「うーん」は実際の発話に現れる長さに基づいて記述しようとする、「うん」のように短いことも、「うーん」「うーーん」のように長いこともあり、モーラ数にかなりの違いがあるものの、「うーん」本来の意味が大きく変わることはない。

このように、感動詞は音声的特徴において一般的な語とは異なる様相を呈していると言える。言い換えれば、感動詞に対する研究は、アクセント・イントネーション、モーラで説明可能である他の品詞に対する研究の方法と同じでは通用しない可能性があるということである。したがって、音声的特徴に着目することで、今まで以上に詳細な分析が可能となるだけでなく、文字表記からは見えなかったことが新たに発見できる可能性があるのである。

しかしながら、これまで感動詞を扱った研究の多くは、感動詞の音声的特徴には全く触れない、あるいは、部分的な記述のみに終始していた。特に、あいづちや言いよどみ・フィラーといった会話を対象にした談話研究では、これまで、文字化した資料を分析対象として検討する研究は広く行われているものの、会話の音声を分析対象として検討する研究は少数派である。もちろん、音声を文字化することによって、談話構造が顕在化できるなど、わかることが非常に多く有益であるのは確かであり、文字化に関して筆者が否定する意図は全くない。しかしながら、少なくとも感動詞に関しては、文字化によって捨てられ

---

<sup>10</sup> 本研究では特に断りがなければ、「話し手」と書いた場合、便宜的に感動詞の発話者を指すものとし、この話し手に対する聞き手を「相手」または「聞き手」とする。なお、この用語の使い方は感動詞があいづちとして用いられる場合、感動詞を発する人が談話上の役割として聞き手となるということを否定するものではない。

てしまう部分も非常に大きかったのではないだろうか。

これらを踏まえ、本研究は、日本語感動詞の音声的特徴について理論的な考察と具体的な記述を行うものである。具体的には次の2つを目標に据える。1つは、感動詞の音声について全体的な記述を行うことである。日本語の一般的な音声的な枠組みで説明できるのか、説明できなければ、どう説明していけばいいかについて考察する。そして、もう1つは、感動詞の持つ機能を音声の側面から解明することである。感動詞にはどのような機能が見られるのか、そして、機能と音声的特徴にどのような関係が見られるのか、ということ具体的な感動詞について、聴取実験や音響分析の結果をもとに考察する。

本研究は、このような考察を通して、応答詞やあいづち、フィラーといった側面も含む感動詞研究に対し、音声的な枠組みを提供することを目指す。さらに、この枠組みを用いたさまざまな考察を経て、将来的には、音声的な枠組みに基づいた、精度の高い感動詞の機能の見取り図を描くことを最終的な目標とする。

このような音声的特徴を踏まえた感動詞研究の成果としての見取り図は、日本語教育における会話表現の教育に有益であるにとどまらず、文法論や談話研究における感動詞の分析に対しても多くの示唆を与えるであろう。特に、それまで、文字化によって多くの音声情報を捨てざるを得なかった会話分析に対しては、こういった見取り図は多くの手がかりを提供するものであると考える。さらに音声会話に対する分析のみならず、文字コミュニケーションにおける感動詞と、メールに特有な顔文字・絵文字といった非言語の記号が持つ機能を考える手がかりともなり得よう。

本研究は分析の対象を広く感動詞とし、その音声的特徴がどのようなものであり、そして、どのような機能を持っているか解明することを目的としている。用語としてなぜ「感動詞」を用いたかという点、上で述べたように、応答詞やあいづちやフィラーといったカテゴリは談話上の機能を踏まえた用語であるが、それらのカテゴリを広く包含する、より広いカテゴリのほうが音声的特徴を体系的に示しやすいと判断したためである。事実、「うん」といった感動詞は応答詞にもあいづちにもフィラーにも現れており、言語的な意味・機能<sup>11</sup>が音声的特徴にどう反映しているかという点についても本研究において議論したいと考える。しかし、本研究では上に挙げた感動詞のすべての用法を扱うことはできず、特に、あいさつや掛け声といった用法にまで触れることができなかった。将来的には、あい

---

<sup>11</sup> 「言語的な意味・機能」という用語にも、本研究の対象を「感動詞」という広いカテゴリで扱おうとする立場を示している。つまり、「意味」という用語には語の一種としての側面、「機能」という用語には「あいづち」「フィラー」といった談話上の現象としての側面が反映されている。

さつや掛け声なども含めたあらゆる用法を網羅したいと考えている。

本研究の構成は、まず、本章と2章を序論とし、本章では、本研究の背景と概略に触れ、2章では「先行研究概観」として、最近の感動詞に関する論考、および、音声と丁寧さ・感情に関する論考を概観し、その問題点について指摘した上で、本研究の方向性をより明確に示す。次の、3章から5章までは本論である。3章では、総論として、感動詞の音調を日本語の韻律の枠組みに位置づけ、感動詞の音調の全体的な特徴をまとめる。それを踏まえ、各論として4章では、「うん」の音声的特徴と言語的な意味・機能の結びつき、そして、5章では、「あ」の音声的特徴と対人関係というように、感動詞の音声的特徴が持つ機能について具体的な感動詞に絞り、実験や音響分析を行い、その結果をもとに考察を行う。最後に、6章と7章が結論で、6章では、各論のまとめと全体的な考察を行い、感動詞の音声的特徴がどういった機能を持って会話に現れているかをまとめる。7章では、本研究で導き出された結果の評価を行い、今後の課題や可能性について言及する。

## 第2章 先行研究概観

1章では、主に国語学における感動詞の位置づけに触れたが、感動詞の先行研究はあいづち、フィラー、応答詞、談話標識などを含めると膨大な数にのぼる。そこで、本章では音声的特徴との接点を軸に、まず、全般的に感動詞を扱った各研究者の論考について概略を述べる。次に、あいづち、フィラー、応答詞といった主に談話の側面における感動詞を扱った論考については数も多いことから、代表的な論考に絞って触れることにする。そして、数は少ないものの、特定の感動詞の音声を扱った研究についても取り上げる。

一方で、音声的特徴が何らかの情報を伝達するという立場の研究についても触れておく必要がある。特に近年は、感情についての論考が多くなってきているが、ここでは、主に本研究の議論に関わる、丁寧さと対人関係についての論考に触れることにする。

### 2. 1 感動詞に関する研究

#### 2. 1. 1 全般的に感動詞を扱った研究

ここではまず、近年の感動詞の主要な研究として、広範囲を分析対象としている、田窪氏らの論考、森山氏の論考、土屋氏の論考、そして、富樫氏の論考の論点・問題点を述べることにする。

##### 2. 1. 1. 1 田窪氏らの論考—話し手の心的処理状態のモニター標識

田窪 (1992, 1994, 2005)、田窪・金水 (1997)、定延・田窪 (1995) など、田窪氏らの一連の論考によると、感動詞は話し手の心的処理状態のモニター標識として位置づけられる。

それによると、感動詞は「外部からの言語的・非言語的入力があったときの話し手の内部の情報処理状態の現れ」であると考えられ、話し手は知識ベースへの書き込み操作や、そこからの推論操作、表現やデータの検索操作等をする際に自分の操作を制御しモニターし、また、これらを音声にして相手に自分の内部処理状態を知らせることで、感動詞に、いわばヒューマン=ヒューマン・インターフェイスの役目を果たさせているということである。聞き手からすれば、これらを聞くことにより、話し手からどのような反応がかえってくるか、その大体の方向性を具体的な内容を持つ発話がなされる前に察知することができ、また、感動詞だけである程度次に続く文の表現類型が決定できるという。さらに、感

動詞が検索とか推論といった言語運用に関わる心的過程の反映物であるとする、心的過程の解明に迫ることができる、と述べている。

つまり、感動詞によって話し手の心的な情報処理過程を聞き手あるいは話し手自身に表示させることで、後続の発話内容をある程度予測できるようになり、対話における実時間的な発話のやりとりに貢献できるわけである。

田窪（1994, 2005）、田窪・金水（1997）ではこのような特徴を持つ感動詞を情報処理のしかたから、感動詞を「入出力制御系」と「いいよどみ系」<sup>1</sup>に分類し、心的処理状態を想定した上で、主要な感動詞の用法について述べている。また、田窪（2005）、田窪・金水（1997）では、音声的な側面にも指摘があり、特に、語彙的な要素から転用したものではなく、「ああ」「ええ」「うう」などの言いよどみ的な発声からきた非語彙的な感動詞類について、「ある種の子音、母音の組み合わせからなるメタ形態として存在し、音調、特殊拍の使い方などが組み合わさって具体的な単位となり、特定の心的処理状態に対応していると見ることができる」として、「え、えっ、ええ、えええ、へ、へっ、へえ、へええ」は基本的には1つの感動詞の形を変えた別の現れとして扱うことも可能である、としている。

それまでの国語学の研究では、文中での感動詞の機能を考えることが多かったのに対し、田窪氏らの論考では、発話の実時間的なやりとりに貢献できるというように、言語運用モデルの中に感動詞が位置づけられていることが特筆すべきことである。また、それぞれの感動詞の用法について、心的な情報処理がどのように行われるかというモデルから説明されていることも妥当性が高く、後に述べる富樫氏の論考にも影響を与えているものと思われる。また、各々の感動詞について分析されたものではないものの、基本的な分節音に韻律的特徴が加わることによって特定の心的処理状態に対応するという指摘も、1章で触れた感動詞独特の音声的特徴と機能との関係を説明できるものであると考える。この点は、それぞれの感動詞について実験などで検証していく必要があるだろう。

ただ、この一連の論考では何らかの心的な情報処理結果が表示される感動詞に限っているということで、「こら」「やあ」といった、どちらかという話し手の自発的な意図によって発せられる感動詞については触れられていないようである。

## 2. 1. 1. 2 森山氏の論考—応答感動詞と情動的感動詞

感動詞を全般的に扱った森山氏の論考は、大きく応答感動詞の分析（森山 1989b）と、

<sup>1</sup> 田窪・金水（1997）では「言い淀み系」。

情動的感動詞の分析（森山 1996）に分けられよう。

応答感動詞の分析は、応答とその周辺に関わる感動詞を「態度表明系統」と「展開制御系統」に分類している。相手の発話に対するいわゆる「受け取り方」の表示である態度表明系統の応答は、談話の促進・伝達の停止などを表示する「伝達自体に対する応答」、先行文が命令文や意志文である「策動文に対する応答」、そして、先行文が情報伝達文である「認識的文に対する応答」に分けられている。一方、展開制御系統とは、応答をより広い意味でとらえたもので、会話の順番とりや、新たな談話展開の手段として使われることになり、談話における情報伝達の関係・内容などの展開を制限するものだとして、大きく「話し手聞き手関係を設定・確認するもの」と「内容展開の積極的な方向づけをするもの」に分けられている。この内容展開の積極的な方向づけをするものに分類される、動作発動の感動詞「さあ」については後に森山・張（2002）で、同様の感動詞や接続詞との比較、そして中国語との対照を行っている。

もう一方の情動的感動詞の分析については、感動と情動のありようを、大きく、「泉」にたとえるというモデルを考え、内部からの「沸き上がる」、あるいは、外部からものが飛び込んで「心に波紋を広げる」といったメタフォリカルなとらえ方をしている。前者のように、内的な情意がいわば「湧いて出る」タイプを「内発系」、後者のように、何かの状況に遭遇してそれが直接的なきっかけとなって急激な上位的変動がおこるものを「遭遇系」と呼んでいる。遭遇系のなかはさらに、「未知遭遇」といった一次系と、「情動変動そのものの表示」といった二次系に分けられる。

また、応答感動詞と情動的感動詞は相互に交渉するとされており、応答感動詞が情動的に用いられることや、情動的な感動詞が応答的に使われることもありうるとしている。

森山氏の一連の論考は、応答感動詞という談話標識としての談話管理の側面、そして、感動詞の情動のおこり方、といった、田窪氏らの論考とは違った側面に着目しており、感動詞研究の重要な側面を扱っていると言える。また、内発系の感動詞では二モーラ以上の拍数をもつ、であるとか、未知遭遇の感動詞は遭遇した事態ないし情報を疑うというスタンスでも使え、文脈さえ合えば上昇イントネーションで使うことができる、などといった、音声的特徴との関わりを指摘している。

しかし、上で述べた「上昇イントネーション」についてはどの程度の上昇であるか明確

ではない<sup>2</sup>。感動詞一語文の文末の上昇イントネーションについて扱った森山（1997）においても、それぞれの例文における上昇の程度が明確でないことや、「？」がつくつかつかないかを判断基準にすることは、「？＝疑問」という先入観も入り込むおそれがあり、実態を反映した音調、そして、それと結びついている意味・機能を記述するには不十分である。

したがって、音調など音声的な特徴を精密に記述し、音声的な枠組みを作った上で、改めて情動的感動詞の分類を整理すると、情動のおこり方と感動詞の音声的特徴のつながりが浮かび上がる可能性もあろう。

### 2. 1. 1. 3 土屋氏の論考—コーパスによる分類

土屋（1997, 1999）は10編の対話コーパスをもとに、「ふうん・へえ・ほう」「はい・ええ・うん」「いいえ・いえ・いや」「あ・ああ」と取り上げる感動詞を大きく4つに分類し、この分類ごとに、感動詞に続く発話、先行する発話に着目しながら観察、考察を行っている。特に「そうですか」「そうですね」といった「そう」を含む「ソウ形コメント」が共起している例を全データから取り出し、各感動詞がどのようなソウ形コメントと共起できるかを観察することによって、感動詞の機能を探ろうとしている点が特筆すべきである。例えば、「そうですか」のような「確認コメント」や、「そうだ」のような「肯定コメント」といったものを手がかりに、感動詞の基本的機能や感動詞を発する際に相手が必要かどうかという対他性について検討している。

これによると、ふうん系の基本的機能は「先行文の受け止め」、はい系は「先行文の対他的受け止め」、いいえ系は「先行文の受け止め＋応答者からの情報発信の予告」、そして、あ系は「一語の中にさまざまな事態を含む」、ということ、そして、対他性については、はい系と、いいえ系の「いいえ」「いえ」において必須であるということである。また、先行文については、ふうん系が「応答者への行動、発話を要求しないものに限る」という制限がつけられる、ということである。

このように、土屋氏の論考では、感動詞の前後の発話の観察、特に後続するソウ形コメントによる分類で、ある程度の機能を見出すことに成功している。しかしながら、これにも限界はあり、あ系の感動詞のように「一語の中にさまざまな事態を含む」というように、

<sup>2</sup> ただし、森山（1997）において、「ふうん、ほう、なるほど」という語群の例を挙げ、「これらも、「？」をつけることがないように、上昇イントネーションにならない（語末の急上昇はできない。ただし、全体的に上昇的なイントネーションの傾向—上昇傾向のイントネーションというべきもの—をもつことはある）」と述べているように、氏も上昇に程度差があるということ認識してはいるようである。

明確な機能を提示できないものも見られた。他の感動詞も含め、より明確な機能が示せるようになるためには、感動詞の音声的な側面に着目し、そして、それを体系的に説明することが必要であると考えられる。

#### 2. 1. 1. 4 富樫氏の論考—感動詞の本質的機能と活性情報・半活性情報

富樫氏の論考（2002a, 2002b, 2005a, 2005b, 2005c, 2006）は、田窪氏や森山氏のような総合的な見地というよりは、「はい」と「うん」、「あっ」と「わっ」といった、具体的な感動詞について、さまざまな用例を検討した上で、本質的な機能の記述を行っている。その記述については田窪・金水（1997）で示された心的処理状態を示す「データベース」「バッファ」を組み合わせたモデルと分析の基盤は同じである。先行文脈等で得られた情報が、バッファに格納される「活性情報<sup>3</sup>」と、データベースに格納される「半活性情報<sup>4</sup>」にどのように関連付けられるかによって、機能としてそれぞれの感動詞が話し手のどのような心的処理状態を表示するかを説明している。

このモデルによって記述された感動詞とその本質的な機能を挙げると、以下のようになる。

「ふーん」の本質的機能：提示された情報がデータベースに格納されたことを示す。

あるいはその情報が活性化していないことを示す（2002a）

「はい」の機能：提示された情報に対し、それに連関した半活性情報が多数呼び出されたことを示す（2002b）

「うん」の機能：提示された情報に対し、それに連関した半活性情報が少数しか呼び出されなかったことを示す（2002b）

「あっ」の機能：変化点の認識を示す（2005a）

「わっ」の機能：心内で活性・半活性状態にある情報群とは関与しない情報が取り込まれたことを示す（2005a）

「ええ」の機能：まとまった情報を獲得した上での、データベースへのアクセスを標示する（2005b）

「いいえ」の本質的機能：提示された情報そのものの整合性計算の結果、不整合となったことの標示（2006）

<sup>3</sup> 「当該談話において話題となっている情報、あるいは前提となっている情報」（2002a:103）

<sup>4</sup> 「バッファにある活性化した情報に関連・関係のある情報」（同上）

「いや」の本質的機能：提示された情報の整合性計算の結果、情報そのもの、あるいは情報提示行為に対して不整合となったことの標示（2006）

「いえ」の本質的機能：提示された情報そのものの整合性計算の結果、不整合となったことの標示。ただし提示行為の不整合性標示にも用いることができる（2006）

このモデルは、活性情報と半活性情報という概念がキーであると思われるが、この二つの区分が氏の論考を通じて必ずしも明示的ではなく、これから多く検討される必要がある。また、心的処理状態を表すとされる感動詞がすべてこのモデルによって精密に記述できるかということも議論の余地があると思われる。たとえば、「はい」と「うん」については、「はい」「うん」という互いに音韻的にも非連続的で、独立した別語であると見られるものの、その本質的機能の違いが半活性情報の呼び出される程度の違いという、相対的な差に還元されるとしている点を見ると、このような半活性情報の呼び出しというのは機能の一側面であるといえ、より本質的な違いがあると推測できよう。

しかしながら、モデルを用いて記述すること自体は感動詞の意味・機能を記述する上で利便性が高いと思われ、感動詞の音声を記述する上でもメリットとなると推測する。氏は部分的ではあるものの音声的特徴にも触れており、「ええ」のように、本質的な機能を記述した上で、イントネーションによって処理過程が異なることを指摘していることから、音声的特徴が重要な側面を担っていることを意味していると言えよう。

## 2. 1. 2 談話における感動詞の研究—あいづち、フィラー、応答詞、談話標識など

前節で述べた感動詞全般の研究に対し、談話の側面から行われている感動詞の機能の研究、いわゆるあいづちやフィラー、応答詞、談話標識に関する研究は数多く存在する。ここでは、やはり音声的特徴との接点を軸に、それぞれの研究の概要を述べることにする。

### 2. 1. 2. 1 あいづち

まず、聞き手としての発話とされる、時には日本語の会話の特徴ともされるあいづちについて、堀口（1997）では多くの論考を考慮に入れた上で「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」とであるとまとめている。この条件に当てはまれば、感動詞ではなくともあいづちと呼ぶことができるので

ある<sup>5</sup>。そして、あいづちの機能については、研究者によってばらつきはあるものの、おおむね、聞いていることを示すもの<sup>6</sup>、理解していることを示すもの<sup>7</sup>、同意したことを示すもの<sup>8</sup>、否定を示すもの<sup>9</sup>、感情を示すもの<sup>10</sup>に分けられる。

あいづちと音声についての分析として、ナガノ・マドセン・杉藤（1999）の東京と大阪の談話におけるあいづちの分析が挙げられる。この中で、あいづちには「ンーン」などといった基本形を反復したものが多いということ、そして、ピッチ曲線の抽出により基本形も反復形もゆるやかに下降するイントネーションで発話されており、このような「反復形を持つあいづち」のイントネーションに関わる特徴は、東京、大阪ともに基本的には同じであるということが観察されている。しかし、この下降とあいづちの機能がどう関係しているかということについては述べられてはいない。

## 2. 1. 2. 2 フィラー

次に、いわゆるフィラーと呼ばれるものについてであるが、この場合も、フィラーの一角を一部の感動詞が占める形となっている。研究者あるいは研究の立場によって、呼び名にも、機能にもばらつきがあるようで、Lallge and Cook（1969）、Howell and Yamaguchi（1979）、田中（1981, 1982, 1993, 1995）など主に心理学の立場では「有声休止 (filled pause)」と呼ばれることが多い。また、言いよどみ (hesitation) という呼び方もしばしば見られるが、田中（1981）では特徴的な言いよどみのタイプとして、有声休止以外にも、「ヒヒトワオドロイタ」といった1音節から数音節が無意味にくり返されるような反復や、言い直し、無声休止などが挙げられている。このことから考えると、言いよどみはフィラーよりもさらに広い概念ということになりそうである。フィラーの機能については、田中（1982）によれば、「発話の進行を時間的に遅らせ、発話における困難な情報処理に寄与する」という認知的機能と「他者に向けられたなんらかの信号」である対人的機能という2重機能を持

<sup>5</sup> 堀口（1988, 1997）では、あいづちの表現形式として「あいづち詞」「繰り返し」「言い換え」といったものが挙げられている。あいづち詞とは「ハイ」「エエ」「ナルホド」「ソウデスネ」といった「いわゆる相づち」と呼ばれるものとされている。つまり、繰り返し・言い換えのカテゴリ以外の、あいづちを目的として使用される語や句の類型を指していると考えられ、感動詞の一部はその一角を占めている。

<sup>6</sup> 堀口（1997）の「聞いているという信号」、ザトラウスキー（1993）の「継続の注目表示」、メイナード（1993）の「続けてというシグナル」

<sup>7</sup> 堀口（1997）の「理解しているという信号」、ザトラウスキー（1993）の「承認の注目表示」「確認の注目表示」、メイナード（1993）の「内容理解を示す表現」。

<sup>8</sup> 堀口（1997）の「同意の信号」、ザトラウスキー（1993）の「共感の注目表示」「同意の注目表示」、メイナード（1993）の「話し手の判断を支持する表現」「相手の意見、考え方に賛成の意志表示をする表現」。

<sup>9</sup> 堀口（1997）の「否定の信号」、ザトラウスキー（1993）の「否定の注目表示」。

<sup>10</sup> 堀口（1997）の「感情の表出」、ザトラウスキー（1993）の「興味の注目表示」「感情の注目表示」。

つとしている。山根（2002）ではこれらに類似した機能に、談話標識的なもう1つの機能を加え、「テキスト構成に関わる機能」、「話し手の情報処理能力を表出する機能」、「対人関係に関わる機能」の3つに集約できる、としている。

フィラーと音声との接点では、山根（2002）で、分析対象とした複数の種類の談話に現れるフィラーの音声面を観察した結果が比較的詳しく述べられている。それによると、すべての談話に共通する点として、①フィラーの種類によってアクセント・イントネーションが平板になるものとそうでないものがあること、②母音や鼻音から始まるフィラー、長音を持つフィラー、2拍相当の長さを持つフィラーが多いこと、③母音型のフィラーは前母音の制約を受けやすいことが挙げられる、としている。また、相違点として、①対話や電話の談話には平板に発音されないフィラーが目立ち、講演の談話には1拍相当のフィラー、前母音と結びつく割合の高いフィラーが目立つこと、②講演の談話と対話に鼻音、無声子音から始まるフィラー、留守番電話の談話に長音を持つフィラーの出現率が高いということが挙げられる、としている。しかしながら、フィラーを「1拍」「2拍」相当というのは、持続時間に基づいたものなのか、文字化の際の分析者の判断なのか明瞭ではない。分析者の判断であれば、語彙的なステレオタイプ、つまり（あいさつや掛け声など句的類型以外の）感動詞の表記として1文字・2文字の表記が一般的に多いということに引きずられる可能性や、皆川他（2002）が指摘している、音の高さの変動が拍数の認識に関わる可能性もあり得る。しかし、談話の種類によって、音調や長さの異なるフィラーが出現しているという結果は非常に興味深いといえ、音声的にさらに追究する価値があるものと考えられる。

### 2. 1. 2. 3 応答詞

1章でも述べたとおり、感動詞には大きく分けて応答や感動といった用法があり、前者は応答詞と呼ばれることもある。応答詞の研究について、奥津（1989）、沖（1993）、中島（2001）などでは応答詞の体系が主に肯定的な応答に用いられる「はい」系と、主に否定的な応答に用いられる「いいえ」系という分類で示されており、応答詞の研究はこのような分類を前提としたものが大半であると言える。奥津（1989）では、先行する発話との関連で、応答詞が9つのカテゴリ、16種類の機能に分類されている<sup>11</sup>。また中島（2001）では、「はい」と「うん」、「いいえ」と「ううん」について、肯定と否定、場の改まり度、対

<sup>11</sup> ただし、この中には「はい」系、「いいえ」系の非応答詞としての機能も含まれている。

人関係による使用頻度の違いが分析の対象となっている。

また、「はい」系の応答詞を分析の対象としたものには、北川（1977）、青柳（2001）、富樫（2002b）などが挙げられる。北川と青柳は「はい」と「ええ」、富樫は「はい」と「うん」の意味・機能の違いについて述べている。青柳は音声についての観察も行っており、「はい」の語頭や語末が声門閉鎖化する（咽頭閉鎖音が伴う）現象について、「改まった印象を与える」ということを指摘するなど、長さ・音色・イントネーションと「はい」「ええ」の、談話的、パラ言語的な機能を結びつけて述べている。

また、「いいえ」系は山根（2003）や富樫（2006）などが挙げられる。山根は「いや」を中心に、富樫は「いいえ」「いえ」「いや」の3種類を分析の対象としている。

応答詞については、例えば、沖（1993）では「ああ」「はあ」も「はい」系の肯定応答詞とされているように、どこまでが応答詞なのかが明確ではない。なぜなら、これらは下降の音調を持たなければ応答の機能と解釈されるのは難しく、さらに、たとえ下降の音調であっても、「はい」「ええ」「うん」などとはかなりのレベル差がある肯定であると言える。このように、肯定であれ否定であれ、応答詞としての機能を持つための音声的特徴、そして、同じ肯定（あるいは否定）の機能を持つ感動詞同士で、それぞれどのような違いを持っているかということを観察する必要がある。

#### 2. 1. 2. 4 談話標識

さらに、感動詞は談話標識（discourse markers）として研究の対象となることもある。Schiffirin（1988）によれば、談話標識は実用的には「話の単位（units of talk）を括る、連続性に依存した（sequentially dependent）要素」と定義できるもの<sup>12</sup>で、指標機能（indexical function）や文脈の統一性（contextual coordinates）や談話の結束性（discourse coherence）に関わるものであるとしている。Schiffirinは英語の oh, well, and, but, or, so, because, now, then, y'know, I mean を分析対象にしている。

一方で、日本語における談話標識、あるいは、広く談話レベルで感動詞を分析対象とした研究として、例えば、熊取谷（1992）の電話会話における「はい」「もしもし」、そして、串田（2005）の「いいえ」が挙げられる。

談話標識については、管見の限り音声との接点についての論考はないが、談話標識とし

---

<sup>12</sup> ここでの「連続性に依存」とは、標識が談話レベルで作用するという意図したものであるということである。

て用いられる感動詞の音声的特徴と意味・機能との対応関係が十分整理されれば、談話の結束性の関連について音声的特徴を根拠に指摘できる可能性もあり得よう。

### 2. 1. 3 感動詞の音声を扱う研究—感性情報, 一語性

これまでの感動詞研究には、感動詞の音声的な側面を中心に扱う研究が全くないというわけではない。ここでは Campbell and Erickson (2004) と坊農 (2002) の論考に触れる<sup>13</sup>。Campbell and Erickson (2004) では、コーパスの会話の文脈によりさまざまな意味で用いられる「え」(「えっ」, 「ええ」) の音声を刺激音として、日本語、韓国語、アメリカ英語母語話者に対して、聴覚印象に基づいてそれぞれの刺激音を分類し、自由にラベリングするタスクを行った。ラベリングで全員が一致することはなかったものの、肯定的な反応(幸せ, 驚き, 興奮), 否定的な反応(疲れ, 怒り, 悲しみ), そして, 消極的な反応(無関心, 合意, 安心), 積極的な反応(興奮, 怒り, 熱中)といった反応に大きく分けることができた。しかしながら, 結果としての感性情報が非常に広範であり, 人々が何に対する反応を優先させるのか, そして, どのような音響的な特徴に反応していくのかによって, 反応は様々となる, と述べられている。

同様に感動詞の音声を扱う研究として, 坊農 (2002) の応答詞「うん」と「そう」の一語性に関する研究も見られる。これは, それぞれの応答詞が疑問の上昇イントネーションで発せられた場合に, 「そう」では高低アクセント(頭高型のアクセント)が保持されるのに対し, 「うん」ではそれが消失すること, そして, 「そう」の持つ指示性から, 「そう」が音声の面だけではなく, 意味の面からも一語性が高いということを述べている。

いずれの研究も, 特定の感動詞の音声についての部分的な記述ではあるが, 感動詞の音声が感性情報や一語性と結びついていることを指摘する先駆的な研究であると言える。Campbell and Erickson (2004) では, 感性情報が非常に広範であり, 何に対する反応を優先させるのかという問題がある。確かに, 感動詞が感情を伝える側面は否定できないものの, 感情をどう分類するか, 限定するかが難しい。一方で, 発話や談話における感動詞の意味・機能は, 発話や談話によってある程度分類や限定が可能であり, 音声と結びつけて一定の成果を挙げることができそうである。また, 坊農 (2002) は, 感動詞が語と捉えられるべきか, イントネーションのようなパラ言語的な要素と捉えられるべきか, という重要な問

<sup>13</sup> 他に, 日本語教育学の立場から, 感動詞・間投助詞・終助詞の「ね・ねえ」のイントネーションを扱った伊豆原 (1994) や, 音響分析の立場から, 林 (1998) の「ええ」のピッチ曲線と感性認知に関する論考などが見られる。

題があることを指摘している。疑問の上昇イントネーションに限らず他のイントネーションを観察すること、そして、他の品詞から転化された感動詞のみならず、他の感動詞とのカテゴリ化を進めていくことで、体系的にこの重要な問題に答えることができよう。

#### 2.1.4 まとめ

ここまで、感動詞に関する論考を、音声的特徴との接点を軸に概観した。感動詞と音声的特徴に関して、先行研究から以下の3点を指摘することができる。

まず、多くの論考において、感動詞を音声的特徴の側面から記述することの重要性が指摘されているということが挙げられる。談話に現れるフィラーを分析対象とし、音声的特徴を観察の対象としている山根（2002）や、感動詞の音声のバリエーションの可能性を指摘した田窪・金水（1997）など、論考における扱いの大小はあるものの、感動詞の音声を記述すべきであるという立場の論考が多いと言える。これは、富樫（2005b）の「ええ」の機能の記述を見れば明らかであるが、感動詞の音声的特徴は意味・機能とある程度結びつきを持っているなど、感動詞において一定の役割を担っているということを意味していると言えよう。

しかしながら、第2点として、音声の枠組みに沿った記述がなされていないことが多いことも指摘できる。特に音調の記述について、単に「上昇イントネーション」と言っても、文末音調については吉沢（1960）や郡（1997, 2003）などを見ても、少なくとも2種類の上昇調が認められており、その点で記述が不足していると言える。また、そもそも感動詞の音調がアクセントによるものなのか、イントネーションによるものなのか、といった議論を踏まえずに、音の高さの変動を観察することに終始しているのが大方であり、坊農（2002）のような、一語性を前提としたアクセントとイントネーションに関する議論はごく少数派である。

そして、第3点は、たとえ感動詞の音声的特徴に触れている研究であっても、分析対象である感動詞の音の高さの変動を観察することに終始していることから、感動詞全体を踏まえた議論になかなか進んでいかないということである。つまり、感動詞の音声的特徴として体系的なものが見出せていない、ということである。例えば、共通する音調について感動詞を横断的に観察してみると、共通する性質を見出すことも十分可能であろう。つまり、音声的特徴を体系的に整理することによって明らかになる感動詞の意味・機能も十分あると考える。

## 2. 2 音声的特徴と情報伝達に関する研究

前節では主に感動詞に関わる先行研究に触れたが、本節では、音声的特徴に着目することにする。これは、感動詞が音声によってどのようなことを伝えうるかを探る上で、踏まえておく必要があるためである。感動詞の音声は、ハイ、イイエというように、分節音で構成され、離散的な記号の組み合わせで意味と恣意的に結びつくといった一般的な語レベルの情報伝達に関わる一方で、例えば、音調を見ると、語アクセントというにはバリエーションが多く、ハの後で下降するハ<sup>14</sup>と、下降しないハ<sup>1</sup>イ、下降しないイ<sup>1</sup>イエと、エで下降するイ<sup>1</sup>イエ<sup>1</sup>、というように個々の語レベルとは異なる情報伝達に関わっている可能性も十分あると思われる。音声コミュニケーションに頻出する感動詞は、前節でも触れたように談話上でさまざまな振る舞いをすることから、その機能を探る上で、感動詞の音声がどのような情報伝達に関わっているかを、語レベルのみならず、様々なレベルで検討する必要がある。

本節ではまず、音声と情報伝達、あるいは、音調の規定要因といった視点から、音声的特徴が音声コミュニケーションにおいてどういった機能を持つかに触れる。そのあとで、ここでは、感動詞との接点として、音声と対人関係・丁寧さに関する論考を取り上げる。感動詞の音声が果たす役割は、前節で触れたような感性情報や、言語的な意味・機能とも関係があると言えるが、それ以外にも、須藤（2001, 2002）で指摘されているように、会話参加者間の社会的関係（対人関係）が感動詞の音声的特徴に影響を与える可能性は否定できないと言える。そこで、音声と対人関係・丁寧さに関する論考を概観し、感動詞の音声的特徴と会話参加者同士の対人関係を考察する上での参考としたい。

### 2. 2. 1 音声と情報伝達・音調の規定要因

ここでは、音声がもつ機能について、Fujisaki（1997）と郡（2006b）の記述に基づいて概略を述べることにする。

Fujisaki（1997）によると、プロソディーというのは、さまざまな言語単位を発話や発話のまとまりへ系統的に組織化しているものであり、その組織化は分節的要素・超分節的要素がかかわり、言語的情報だけではなく、パラ言語的・非言語的情報を伝達する役目を果

---

<sup>14</sup> 「<sup>1</sup>」と「<sup>1</sup>」は、それぞれ、アクセントによる下降・上昇に相当する音の高さの変動を音声学的に表記したもので、音調変化の開始点に記したものである。本研究で用いる「音調（音の高さの変動）を示す記号」について、詳しくは【資料1】を参照されたい。

たしている、ということである<sup>15</sup>。Fujisakiによると、言語的信息とは記号によって示される情報、つまり、離散的な記号の組み合わせによって示されるものであり、離散的でカテゴリーカルな情報である。パラ言語的信息は、書きことばからは推測できないが、言語的信息を変更、補足するために話し手によって意図的に付加される情報である。つまり、書いてある文が、話し手の意識的なコントロールのもと異なる意図や態度やスタイルで発せられる場合に、言語的信息に付加される「異なる意図や態度やスタイル」といった情報がパラ言語的信息である。パラ言語的信息は離散的でありかつ連続的でもある。そして、非言語的信息は、話し手によって通常はコントロールできない年齢、性別、癖、話し手の身体的・精神的状態といった要因にかかわるものである。非言語的信息もパラ言語的信息と同様、離散的であり連続的である、ということである。

また、郡(2006b)は、発話の音調という上述のFujisakiとはやや異なる視点から、音調規定要因を5つ挙げている。1つ目は、「発話の構造・意味と談話内での役割」で、語アクセント・声調、発話の構成要素間の意味的な限定関係や統語的なまとまり・くぎり、発話の形式的内容を補完する表現意図、モダリティ、情報構造、談話内での位置づけという、異なるレベルの役割があるとしている。2つ目は「話し手の心理的状态、身体的状態、社会的属性」であり、感情、緊張度などといった短期的ないし中期的な要因と、声帯の形状や、性別、年齢、性格、階層・教養といった長期的ないし恒久的な要因、というように要因の存続する期間の長短で2つに区分している。3つ目は「話し手と聞き手の社会的・心理的關係」であり、これも要因の存続する期間によって、上下・親疎の關係といった長期的ないし恒久的な対人關係、話し相手への好悪の気持ちなどといった中・長期的な対人感情、丁寧さ・ぞんざいさなどといった主に短期的・臨時的な対人態度とに分けられている。4つ目は、聞き手との物理的距離や聞き手の数などといった「発話環境」、そして、5つ目は「選手宣誓調」「朗読調」などと言われるような話し方の型、話者個人の癖、特定の時代に固有な話し方といった「特定場面に定まった話し方の型、個人性、時代性」という要因である。

このように、Fujisakiの言語的信息・パラ言語的信息・非言語情報、そして郡の音調規定要因と、やや異なる視点から概略に触れたのみではあるが、音声が会話において持つ機能

---

<sup>15</sup> Prosody is the systematic organization of various linguistic units into an utterance or a coherent group of utterances in the process of speech production. Its realization involves both segmental and suprasegmental features of speech, and serves to convey not only linguistic information, but also paralinguistic and non-linguistic information. (Fujisaki 1997:28)

の広がり、つまり、音声的特徴が言語自体とその周辺のみならず、会話参加者とその周辺、さらには時代性といった要因とまで結びつきを持っているということを知ることができよう。感動詞の音声的特徴についても、このような特性の多くが当てはまると考えられるが、その中で感動詞に特有の音声的特徴を突き止めることが、本研究の目的である。

## 2. 2. 2 対人関係・丁寧さに関する論考

次に、日本語の音声と対人関係・丁寧さに関する論考として、Loveday (1981), Yuasa (1999), Ito (2002), 郡 (2006a) を取り上げることとする。「丁寧さ」あるいは politeness は定義が難しい。発話の丁寧さの語彙的要因と韻律的要因について議論した前川・吉岡 (1997) でも、「一言に丁寧さと言ってもその内容は多種多様ではないか」と述べられているように、何をもって丁寧かということが問題である。例えば、Brown and Levinson (1987) の positive politeness と negative politeness のように、相手へ近づきたい欲求を満たす丁寧さもあれば、相手から脅かされたくない欲求を満たす丁寧さもある。さらに、Matsumoto (1988) が指摘するように、相対的な社会的関係を維持する丁寧さというのもあり得よう。

以下で各々の論考の概略を述べる前に、それぞれの論考における丁寧さのとらえ方について触れておく。Loveday (1981) は politeness を誠実さ、興味の表出、温かさ、敬意、社会認識といった広範な概念を含むものとして用いている。Yuasa (1999) は親しさや年齢、地位、力関係といった側面を中心にしており、Ito (2002) は地位 (status) の上下と改まり度 (formality) に注目している。そして、郡 (2006a) では、対人関係として目上に対する話し方を扱っている<sup>16</sup>。よって、以下で触れるものは、おおむね対人関係という枠で考えた社会的関係のレベルでの「丁寧さ」であると言える。

### 2. 2. 2. 1 Loveday(1981)

まず、日本語とイギリス英語のあいさつ表現におけるピッチ変動幅と丁寧さ、性差の結びつきについて論じた Loveday (1981) は、日本語母語話者とイギリス英語母語話者それぞれ 5 名に、それぞれの音域を調べた上で、丁寧さを示すあいさつ表現 oh hello (ああ、こんにちは)、bye (さようなら)、そして、thank you (ありがとうございます) を含む日本語・英語の会話文を読ませ (日本語母語話者には英語の会話文も読ませ)、そのあと、これらあ

<sup>16</sup> 郡 (2006a) では、丁寧さは対人態度の一種となっているため、丁寧さと対人関係を等しい概念として直接結びつけてはいない。

いさつ表現のピッチ変動幅を分析した。その結果、日本語母語話者の男性はイギリス英語母語話者の男性と音域がほぼ同じであるのに、ピッチ変動の最大値はずっと低いということ、そして、イギリス英語母語話者は時折男性と女性のピッチ変動の最大値が一致することがあるのに対し、日本語母語話者ではこのようなことはおこらず、女性が極めて高いピッチであった。このことから、高いピッチレベルは日本語では女性の役割のステレオタイプとして、そして、イギリス英語では男性・女性とも丁寧さを表現する手段として用いられている、と結論付けている。

#### 2. 2. 2. 2 Yuasa(1999)

次に、親しさや年齢、地位、力関係といった側面からピッチ変動幅に着目した Yuasa (1999) の論考について述べる。Yuasa は日本人男性を対象にして、彼らが通うビジネススクールの副校長（男性）が会話の相手になった場合と、主任講師（女性）が相手になった場合、そして、日本人男性同士の場合の、それぞれの会話のイントネーション・グループにおけるピッチ変動幅を測定した。その結果、親しくない相手である男性の副校長の場合も女性の主任講師の場合も、性別に関係なくピッチ変動幅が小さかった。

そして、副校長や主任講師のようなソトとの関係には「遠慮」という感情の抑制が働くことと述べ、Uldall (1964) や Crystal (1969) が変動幅の小さいピッチは感情の強調がないことを指摘していることから、遠慮が働く場合はピッチ変動幅が小さくなる、ということを書いて述べている。

#### 2. 2. 2. 3 Ito(2002)

そして、地位 (status) の上下と改まり度 (formality) <sup>17</sup>に注目した Ito (2002) は、被験者に、情報提供者、情報受容者という役割で、提供者が地図上のランドマークを参考にしながら道を教え、受容者がそれに従って自分の地図にその道を描くという地図課題を与え、その際に発せられる発話データを採集した。その上で、まず、提供者と受容者の相対的な地位について、聞き手が上か下かの違いが、発話の  $F_0$  平均値と話速の平均にどう現れるか観察した。その結果、聞き手との関係の違いが  $F_0$  や話速に現れる被験者と現れない被験者が見られた。そこで、今度は採集した発話データの中の「わかりました」という発話につ

---

<sup>17</sup> Ito の formality は相手の status の上下によって変化するものとされているが、一般的に改まり度と言えば、通常会話参加者同士の関係というよりは、場の状況（公的な国際会議か、会社内でのミーティングか）や会話の目的（会議か、おしゃべりか）といった要素が大きいと考えられる。

いて、読み上げの「わかりました」を基準にどの程度 formal かを数値で示すマグニチュード推定法で知覚実験を行った。その結果、最も formal と判断された刺激音は  $F_0$  平均値が低く、 $F_1$  の帯域が広いということがわかったと述べている。

#### 2. 2. 2. 4 郡(2006a)

郡(2006a)では、目上に対する音声の韻律的特徴について、合成音声による聴取実験による分析を行っている。「ちょっとお話をうかがってみましょう」という東京育ちの男性アナウンサーが読んだ文の声の高さ(音域)と長さ(テンポ)を操作した音声を作成した。テンポについて7種類、音域について6種類、計42種類の合成音を作成し、それを京阪式アクセント地域の近畿地方出身の大学生28名に聴取させ、「目上の人と話している感じがするか」どうかを、回答用紙上の「全然しない」(1)から「非常にする」(5)までの5段階から選ぶように求めた。その結果、特に遅くも速くもせず、現音声より高めの少し広い音域の音声は、目上の人に話しかけているように聞こえるという結果になった。

#### 2. 2. 3 まとめ

以上、音声的特徴と情報伝達に関する研究を概観した。まず、音声はどのような機能を持つかについては、Fujisaki(1997)の言語的・パラ言語的・非言語的というように、音声は情報伝達に関わると仮定すると、伝達される情報には、言語にかかわる要因から話し手の身体・精神にかかわる要因にかけて、3つの階層があるということであった。そして、郡(2006b)においても音調を規定する要因として、「発話の構造・意味と談話内での役割」「話し手の心理的状態、身体的状態、社会的属性」「話し手と聞き手の社会的・心理的関係」「発話環境」「特定場面に定まった話し方の型、個人性、時代性」の5つが挙げられている。場面・個人・時代に固有な話し方の型が音調を規定する要因として挙げられていることは特徴的であるが、概ね、言語的な要因、会話参加者に関わる要因、発話環境に関わる要因についてはFujisaki(1997)と共通する点が多い。感動詞の音声的特徴を分析する場合についても、このような様々な要因を踏まえたうえで、感動詞に特有の音声的特徴を突き止めることが重要である。

その一方で、音声と対人関係・丁寧さに関しては、まず、一言で「丁寧さ」と言っても、様々なとらえ方があることを指摘し、その上で、ここでは親しさや上下関係といった対人関係に着目した先行研究に触れた。これらの研究の共通点として、まず、ピッチ( $F_0$ )変

動に着目したことが挙げられる。そのうち、Yuasa (1999) は変動幅に、Loveday (1981), Ito (2002), 郡 (2006a) は高さに着目している。また、Ito (2002) と郡 (2006a) は話速 (テンポ) に着目している。このように、対人関係がピッチ変動や話速に大きな影響を及ぼしていることを、これら先行研究は示唆していると言える。Loveday (1981) 以外は、複数の語で構成された文以上の単位を対象としているが、これが感動詞となった場合、対人関係は感動詞の音声的特徴にどう影響しているのであろうか。これら先行研究の結果とは異なるのであろうか。感動詞におけるピッチや持続時間をはじめとした音声的特徴を観察していく必要がある。

## 2. 3 おわりに一本研究の方向性

本章では、感動詞の意味・機能に関する先行研究と、音声的特徴と情報伝達に関する先行研究を概観した。ここでは、これらをまとめ、先行研究から考えられる問題点と本研究における方向性を探る。

まず、感動詞の音声的特徴に関する現状の問題点として、2.1.4 でまとめているように、以下の2点が挙げられる。

1. 感動詞の言語的な意味・機能の記述について、音声的特徴の側面から記述することの重要性を指摘しているにもかかわらず、音声的特徴は概ね当該の感動詞限りの部分的な記述に終始している。つまり、感動詞の音声的特徴として体系的なものが見出せていない。
2. ピッチ変動や長さといった観察可能な要素の記述に終始し、その結果から、アクセントやモーラといった音声の枠組みに沿った考察がなされていないことが多い。

そして、これらの問題点を解決するために、音声的特徴と情報伝達の視点から、取り組むべき課題として、以下の2点を挙げ、それぞれが問題解決にどう寄与するか述べる。

1. 感動詞の音声的特徴はどのような要因によって規定されるか。言語的な意味・機能や対人関係などに関わる、音声的特徴に多様性を持たせる要因とは何か。
2. 感動詞の音声的特徴はそれぞれの要因によってどのように規定されるか。どのような音声的特徴 (音調や長さなど) で実現しているのか。そして、それは日本語の音韻体系にどう位置づけられるか。

1 の課題については、これまで先行研究で指摘されてきている言語的な意味・機能のみならず、対人関係なども含め、音声的特徴を規定する要因としての見方から再検討する。2 の課題は、従来の研究では指摘されていない部分である。まず、マクロの視点から、内省や先行研究、データの観察などをもとに、様々な感動詞の音声的特徴を日本語の音韻体系に位置づけ、音声的特徴とそれを規定する要因の整理を行う。これにより、音声的特徴を規定する要因との対応関係を体系的に見出すことが可能となる。そして、それと同時に、ミクロの視点から、個々の感動詞について、調査協力者から得られた音声データの分析を行うことも重要である。これにより、音声的特徴とそれを規定する要因との対応関係をさらにきめ細かく描くことが可能となる。

本研究では、これらの課題に取り組み、上に挙げたこれまでの感動詞研究の問題点を解決していくことを目標とする。そして、次章以降の3つの章では以下の内容について述べることにする。

まず、3章では総論として、感動詞の音声的特徴を記述するための基盤を整備すべく、先行研究や筆者の内省やデータ観察に基づき、「あ」「え」「はい」「いいえ」などといった典型的に感動詞と呼ばれる語群の音調（音の高さの変化）について、日本語のアクセント・イントネーションの枠組みを踏まえた上で整理する。ここではまた、感動詞の音調が、言語的な意味・機能といった要因により、どのように規定されうるかを検討する。これにより、日本語の音韻体系に沿った、そして、感動詞の言語的な意味・機能によって規定された感動詞の音調の全体像を提示し、個々の感動詞を詳細に分析する4章と5章の考察の基盤とする。

次に、4章と5章では各論として、実験の結果の考察をとりいれつつ議論する。4章では、談話において感動詞が持つ言語的な意味・機能が感動詞の音声的特徴をどのように規定するかを、「うん系」感動詞の音調の分析を通して検討する。「うん」「ううん」「うーん」など単音レベルで共通性をもつ感動詞をうん系の感動詞としてまとめると、その音調のバリエーションは他の感動詞と比べ比較的多いと言える。ここでは、まず、テレビドラマの会話をもとに「うん」の全体的な観察を行い、次に、特に肯定と否定で用いられる「うん」の韻律的特徴に着目し、言語的な意味・機能と韻律的特徴の関係を詳細に検討する。

5章では、会話参加者間の対人関係が感動詞の音声的特徴をどのように規定するかを、応答発話に出現する「あ系」感動詞について、聴取実験により得られたデータをもとに検討する。ここでは、親疎・上下の関係を変数として、会話参加者間の対人関係が「あ」系

感動詞の音声的特徴にどのように影響するかを観察し、感動詞が対人関係や丁寧さといった要因をどのように反映しているかを検討する。

## 第3章

### 日本語感動詞の音調記述の試み

#### 3. 1 はじめに—日本語感動詞の音調・アクセント

通常、日本語（東京方言）の語には、その語固有の社会習慣的な音の高さの変化の型であるアクセントがあり、同一の語であればそのアクセントが様々な型に不規則に変化することはない。また、語としての音調は、平板型・起伏型（頭高型・中高型・尾高型）というアクセント型によって決定される。しかし実際の文（発話）の音調はアクセントによってのみ決定されるわけではなく、通常はイントネーションもその決定に関与している。イントネーションは、問いかげや、文の統語関係、対人関係、感情などさまざまな要因を反映したものとされている。

ところが、感動詞の音調について、これまでの研究では、概して断片的な分析に終始しているようである。感動詞のアクセントに関する解説がある『新明解日本語アクセント辞典』（金田一春彦（監修）・秋永一枝（編）2001）には、感情の表出を表す典型的な感動詞、呼びかけや応答を表す感動詞は頭高型（ただし、前者についてはイントネーションに影響されやすいと説明）、これらが疑問の意味を含んだ場合は尾高型のように発音される傾向がある、という説明が見られる。しかし、感動詞は語としての音調の多様性をアクセントとして記述することの難しさがある。例えば、否定の「うん<sup>1</sup>系」感動詞<sup>2</sup>（一般的には「ううん」などと表記される）は、須藤（2007b）の分析では  $F_0$  パターンとして「下降→（顕著な）上昇」あるいは「下降→微変動（微上昇）」が見られたが、『新明解日本語アクセント辞典』および『NHK 日本語発音アクセント辞典』（日本放送協会放送文化研究所（編）1998）には項目としての記述が見当たらない。また、イントネーションの側面からは、定延（2002）で「うん」の用法とともに、その用法における「うん」のイントネーションを記述している。その他の先行研究においても、個々の感動詞の言語的な意味・機能や用法

<sup>1</sup> 「うん」という表記は、ウとンの音素から構成されるということを意図した表記ではない。「うん」はあくまで[m]や[n]といった鼻子音、[ŋ]といった鼻母音を分節音として持つ感動詞であり、一般的に感動詞として認識されやすいラベリングを意図したものである。音声的特徴の説明には、これらの分節音を持つ音素として、カタカナの「ン」を用いる。

<sup>2</sup> 以下では感動詞の表記について、例えば、促音が挿入されたアッ、長音が挿入されたアー、下降音調を示すアーなど、個別具体的な音声的特徴に言及する場合はカタカナで表記し、必須要素としてアの分節音を持つ感動詞を総称する場合は「あ系」感動詞もしくは「あ」とひらがなで表記する。また、一般的な表記に言及する場合も「ううん」のようにひらがなでの表記とする。ただし、他の文献に言及した部分においてはこの限りではない。

を記述する際に音調に触れることがあっても、その多くは、イントネーションと記述していることが多い。しかしながら、そもそも感動詞が語であるならば、アクセントの議論なしに感動詞の音調をイントネーションであると言い切ることはできないであろう。

さらに、既に個々の感動詞レベルでは、須藤（2005b, 2006, 2007b, 2007c）などにおいて音調と意味・機能の対応が指摘されている。感動詞全体のレベルでも、いくつかの感動詞に共通する音調が特定の用法や意味・機能と結びついている可能性も十分考えられるが、感動詞全体を視野に入れた音調や意味・機能の分析は管見の限り行われていない。

そこで本章では、まず、日本語の音声の枠組み、つまり、アクセント・イントネーションの枠組みで日本語の感動詞全般に対応できる音調記述を試み、そして、その音調が感動詞の言語的な意味・機能とどのように対応しているかを検討し、その結果を提示することを目的とする。本章では、先行研究や、北海道出身で30歳代前半である筆者の内省、さらには会話データの観察による知見を用いて分析を行うため、実証的な検証を経た最終的な結果を提示するものではない。将来的には会話データのさらなる観察はもちろん、シミュレーションによる会話文読み上げ実験や合成音声の聴取実験、そして、意味・機能の体系的な整理により、改めて検討されなければならない。しかし、本章でひとまず提示される感動詞の音調の基礎的枠組み、および、対応する意味・機能が今後の感動詞研究の基礎となること、さらには教育的に応用されうることを考慮に入れると、本章での分析・考察は意義があり、重要性が高いと考える。

本章ではまず、3.2節で方法論として音調記述のための枠組みについて述べる。アクセント・イントネーション、モーラ・音節について、それらを感動詞の音調の記述にどのように適用すべきかという視点から考える。次に3.3節ではその枠組みをもとに感動詞の音調を記述し、それに対応する意味・機能を整理する。

## 3.2 感動詞の音調記述のための枠組み

ここでは、日本語のアクセント・イントネーションと語末音調、モーラ・音節の性質について触れ、感動詞の音調をどのように位置づけるべきかを述べる。

### 3.2.1 アクセント・イントネーション・文末音調

アクセントとは、服部（1951）によると、強め段落、つまり、自立語あるいは自立語と付属語との連結に該当する音声連続の強さあるいは高さに関する一定した社会習慣的型で

あるとされている。日本語については高さに関する一定の社会習慣的型があり「高さアクセント」と呼ばれている。そして、その高さの変動については、下がり目が重要であり、その下がり目をもたらす弁別的特徴は「アクセント核」と呼ばれ、おおむね共通認識となっている。その中で、川上夔氏や上野善道氏はこの下がり目こそがアクセントとして重要だとした上で、語頭にある上昇については、アクセントではなく「句」の特徴だとしている。それに対し、服部氏は語頭の上昇もアクセントの一部（アクセント素の非弁別的特徴）であると見ている（上野 2003）。

日本語の語頭にある上昇の解釈については、上述のように意見が分かれているが、感動詞については、仮に語頭にある上昇が句の特徴であるとしても、感動詞は用法上、句頭に來ることがほとんどであるため、結局は語の特徴に還元できる。ゆえにここでは便宜的に、感動詞の語頭の上昇も語の特徴とし、アクセントの一部と見ることとする。

一方で、やはり声の高さの変動を示すとされるイントネーションは、西洋語のようにアクセントを含め高低変化全般をイントネーションととらえることもできるが、日本語については「アクセントの特徴の上に加えて表現される声の高さの変化（杉藤 1983）」というとらえ方が一般的であろう。この場合、イントネーションは、文の統語構造や隣接語間の意味的關係に関する機能（窪菌 1997, 郡 1997, 2003 など）や、文末音調に着目した表現意図・モダリティに関する機能（吉沢 1960, 上村 1989, 郡 1997, 2003 など）、さらには感情や対人関係に関わる機能（Ito 2002, Campbell and Erickson 2004, 郡 2006a, 田川 2006 など）を持つとされている。

アクセントとイントネーションの違いをまとめると、郡（1997）にもあるように、アクセントは「単語ごとに定まっているものであるから単語の一部分」であるのに対し、イントネーションは末尾を上げると「雨」でも「飴」でも疑問調になるように「どの単語についても言えること」である。

感動詞については、文として独立した成分であること、そして、単独で用いられうることも考慮に入れると、感動詞の音調の整理には、文末音調による説明の可能性も考えなければならない。文末音調については、郡（1997, 2003）の5種類の音調（疑問型上昇調<sup>3</sup>・強調型上昇調<sup>4</sup>・顕著な下降調・上昇下降調・平調）が、文末詞が付かないときの文末拍（長呼される場合を含む）に限定した上で整理されている。それぞれの音調について簡単に説

---

<sup>3</sup> 郡（1997）では「疑問上昇調」である。

<sup>4</sup> 郡（1997）では「強調上昇調」である。

明すると、「疑問型上昇調」は疑問文の文末に典型的に現れるような直線的な上昇であり、音を長く伸ばせば、概ねその分だけ高くなる音調である。「強調型上昇調」は、テ'レ↑ビ<sup>5</sup>のように子供がだだをこねて要求するときなどに典型的に現れる上昇調で、上昇のしかたはアクセントに伴う上昇と同じものであり、音を伸ばしてもそのままほぼ同じ高さを保つ点が疑問型上昇調とは異なる。そして、上昇自体はさほど大きくないことが多い。「顕著な下降調」は意外な情報に接したときに間投詞的に言うホント↓ー（本当）などの文末の下降で、音の動きはアクセントによる下降と同じものである。文末語のアクセントが平板型あるいは尾高型で、文末拍がもともと高い場合のみに現れる。「上昇下降調」は強調型上昇の直後に顕著な下降が続くものである。「平調」は平叙文の文末拍に典型的に見られるもので、顕著な高低変化はなく、機能としても特別なものを持たない。なお、平叙文の文末において見られる、文末にかけての緩やかな下降については、文末拍自体に格別な動きがないことから、平調とされる。

### 3. 2. 2 仮説—感動詞の音調をどう位置づけるか

音調を記述するための枠組みを見た上で検討すべきことは、感動詞の音調を上述のような一般的な音声の枠組みに位置づけ、アクセント+イントネーションにより説明すべきか、それとも、従来の感動詞の用法分析で用いられてきたイントネーションのみにより説明したほうが都合がよいか、ということである。以下ではそれぞれの可能性について述べることにする。

#### ①アクセント・イントネーションによる解釈

これは、アクセントで説明できる限りアクセントで説明し、できないところはイントネーションによるものとする方法であり、従来の日本語の音声の枠組みに沿った解釈である。アクセントとイントネーションの関わり方は複雑であり様々であるが、一例として Abe (1998)、定延 (2005b) では「並列的 (copulative)」「足し算的 (cumulative)」「競合的 (conflictive)」な関係が指摘されている。

並列的な関係は、アクセントによる音調とイントネーションによる音調が互いに影響せず並列的に伴うことである。例えば、文末語のアクセントと文末拍の音調の関係で、文末語の核による下降がそのまま残り、文末拍で特定の文末音調が現れる場合である。感動詞については、感動詞自体が文になることができ、文中でも独立性が高いといえるので、語

<sup>5</sup> 音調を表す記号については、【資料1】を参照。

末を文末とみなし、有核または無核のアクセントによる音調の後に、文末音調に準じた「語末音調」が伴っていると考える。したがって、この語末音調もアクセントによる音調に伴う形で感動詞固有の音調とみなすことができ、否定の応答に用いられる「うん系」感動詞「うん」のような複雑な音調の説明も可能となる。

一方で、足し算的な関係は、アクセントによる音調にイントネーションの影響を「足す」関係であり、アクセントによる下降音調のところをイントネーションで下降させようとする場合、結果としてアクセントによる下降よりもさらに急激な下降となる。また、競合的な関係は、アクセントが音調に与える影響よりもイントネーションが与える影響が勝る（あるいはその逆の）場合である。例えば、スポーツ実況で、アクセントに関わらず高く平坦な音調が現れるような場合である。

## ②イントネーションによる解釈

①はアクセントを見いだすことで可能な解釈であるが、それが困難な場合はイントネーションのみによる解釈とならざるを得ない。感動詞の音調をイントネーションによるものとして説明する場合、全体の音調をカテゴリカルに、かつ連続的に意味・機能と結びつけて記述することができる。例えば、「あ」でも「はい」でも、下降の音調であれば共通して肯定的な意味・機能を持ち、また下降の緩急によって意味・機能も微妙に異なる、といった具合に、音調が意味・機能を担うという説明ができる。川上（1992）にも、「はい」「ええ」「うん」などの語音が音調の乗り物に過ぎない、つまり音調を捨象すればこれらの語が意味を失い、そのため、語ではなくなってしまうということ、そして、その結果音調は、ある場合、単語の意味と同様の意味を表すという指摘がある。しかし、この場合、感動詞の音調は日本語のアクセント体系には位置づけられないことから、感動詞は日本語の一般的な語とは異質で、パラ言語的な性質を持った語であると考えられることとなる。

以上、感動詞の音調をどう位置づけるか、2つの可能性について述べた。

感動詞の音調は、上で指摘した通り、多様性があり一般的な語のアクセントのように一定の音調の型としてとらえにくい側面がある。筆者の推測ではあるが、従来の感動詞の分析で音調がイントネーションとされがちだったのにはそのような理由もあると思われる。しかしながら、この音調の多様性を整理していくことにより、アクセント型を見いだし、それでカバーしきれない部分をイントネーションで説明することは可能であると考えられる。

そこで、ここでは、感動詞の音調は、他の一般的な語と同様、アクセントとイントネーションによって説明可能であるという仮説を立てる。この仮説をもとに、3.3節では、感動

詞のそれぞれの音調をアクセントとイントネーションで記述することを試みる。その際、アクセントによる記述の妥当性を検討し、アクセントによる記述が困難、あるいは極めて不自然な場合には、イントネーションのみによる記述を検討するという手順を取る。

### 3. 2. 3 モーラと音節

周知の通り、モーラあるいは音節はアクセントの高低が付与される単位である。また、モーラは音の長さについての音韻上の単位でもある。一方で、感動詞はモーラ数あるいは音節数の多寡により、音調のバリエーションが異なると考えられる。そのため、音調の記述を緻密に行うには、モーラ数あるいは音節数をもとに感動詞を整理することが効率的であろう。ここでは、その妥当性について検討する。

何をもって1モーラとするかについて、『言語学大辞典』（第6巻・術語編；亀井孝他（編著）1995）によると、1) ゆっくり区切って発音した場合の一つ一つに相当、2) 仮名1字（拗音は除く）に相当、3) 等時間に区切った最小の韻律単位（等時性）、などが挙げられるが、客観的かつ満足すべきものはない、とされている。客観的と思われる等時性についても、すべてのモーラが物理的に等時間であるということではなく、話し手あるいは聞き手が主観的に区切った結果を「等時間」と見なしていることから、客観的な定義とは言えない。

このようにモーラの等時性は、厳密に等時間で区切れるような性質は持ち合わせてはいない。とはいうものの、1モーラより2モーラのほうが長いといった相対的な性質は当然ながら持ち合わせており、原則的には、感動詞の音声的特徴としての絶対的な長さはもちろん、相対的な長さを記述する上においても有効な概念であると言える。

しかし一方で、皆川他（2002）でも述べられているように、アクセントによる下降が実現されるためには最低2モーラが必要という音韻的現象があるために、日本語話者にとってはピッチの下降がモーラを数える手がかりになっているという側面がある<sup>6</sup>。例えば、「あ」と「ああ」というモーラ数を反映させた表記について、語頭から語末にかけて下降が見られる場合に好まれるのは、持続時間が短くても下降が認識できる限り、「ああ」という表記ではないだろうか。逆に同じ持続時間であっても、下降も上昇も見られないものであれば、1モーラ表記の「あ」が好まれるのではないだろうか。このことは下降の音調が

<sup>6</sup> 皆川他（2002）では上昇についても2モーラが必要だと述べられているが、頭高型アクセントの語の句頭の上昇が1モーラの中で行われているように、筆者は上昇については必ずしも2モーラ必要であるとは考えていない。

モーラの数え方に影響を与える可能性が大きいということを示唆している。

さらに、1音節感動詞については、母音が二重母音でなければ下降の音調以外にモーラを数える手がかりに乏しいという側面もある。「あ系」感動詞であれば、持続時間を頼りに「あ」「ああ」「あああ」「ああああ」などと表記せざるをえない。しかし、これらのバリエーションは無限であり、音調の分類にとってどこまで意味があるのか判断しがたい。

したがって、モーラ数による分類は、下降の音調がモーラの数え方に影響する場合、必ずしも長さを基準とした分類となるとは限らず、また、感動詞の長さをモーラで数えること自体がどこまで意味があるかが判断しがたい。そこで、ここでは音節単位で分類し音調を検討することにする。これにより、様々な音調や長さを一元的に扱え、かつ、音節構造が似ている感動詞同士で音声的特徴の比較もしやすくなる。例えば、1音節のア、アー、アアーといった類似のものを一括して「あ系」感動詞とし、音調や長さの多様性を一元的に提示できることは、意味・機能の弁別的要素の分析にも都合がよいであろうし、同じ1音節の「え系」「うん系」「はい系」といった感動詞間の比較も容易であろう。

このように感動詞の音調の記述は1音節と2音節に分けて行うこととする。

#### 3.2.4 対象とする感動詞

本章での分析の対象は感動詞となっているが、国語学における「感動詞」は非常に範囲が広く、感動・応答・呼びかけ・あいさつなどといった用法を持ち、文中において、「独立成分」となり「一語で一文(＝一語文)を形成」(森岡 1973)することができるものと大きく捉えることができる。

しかし、このような広範でバラエティーに富む語群を一括して対象とするのは、記述の精度を落としかねない。したがって、ある程度、語の形式やなりたち、意味・機能といった点で共通性を持つものをまとめながら進めていくことが効率的であろう。その上で、まずは「あ」「お」「はい」「いいえ」「おい」などといった、感動詞特有で、シンプルな形式であるものをここで取り上げる。これらは、他の概念語からの転化ではなく、感動詞として以外では日本語の音調の枠組みに位置づけて記述されることがないので、言わば「生粋の感動詞」と言えよう。このような感動詞をひとまず日本語の音調の枠組みに位置づけることは、これ以外の感動詞も含む感動詞全体の音声的特徴の記述に寄与するものとする。例えば、もとの品詞から感動詞へ転化するとアクセントが変わってしまう現象は、生粋の感動詞の音声的特徴を利用して説明できる可能性もある。このように、「生粋の感動詞」の

音声的特徴の記述は、それを基盤に他の感動詞の音声的特徴の記述を目指すという点で、極めて重要かつ基礎的であり、優先的に分析が行われるべきであると考えられる。このような観点から、本章における議論で対象外とするのは以下の感動詞である<sup>7</sup>。

1. 概念語、つまり他品詞（「そう」「それ」「どれ」など）や、句的類型（「しまった」「でかした」「こんばんは」など）と同じ表記であり、転化がなされている可能性が極めて高い感動詞
2. 畳語形式（「そうそう」「うんうん」など）をとる感動詞
3. 掛け声・はやしことば（「よいしょ」「どっこいしょ」など）の感動詞
4. 現代日本語の口頭表現では用いられない、または非常に頻度が低い感動詞（「あわれ」「すわ」など）

この4点を踏まえ、既に述べたとおり音節単位で分類すると、分析対象となる感動詞は以下のとおりとなる。実際は様々な音声的特徴を帯びて出現し、それを意図して様々な表記（ハ行音／脱ハ行音化<sup>8</sup>、促音の挿入／削除、長音の挿入／削除など）が可能である。しかし、本章では音調の記述という観点から、これらの音声的特徴については最低限の説明にとどめることとする。

・「うん」「あ」「え」「お」「わ」「ま」<sup>9</sup>「さ」「や」「よ」「な」「ね」

…1音節感動詞①

・「はい」「おい」「やい」…1音節感動詞②

・「あら」「おや」…2音節感動詞①

・「いいえ」「いや」…2音節感動詞②

・「こら」「ほら」…2音節感動詞③

---

<sup>7</sup> そのほか、ケツ、キー、ウーといった非言語的な叫び・うめきなどに近い感動詞、「あちゃ」のように、辞書に収録されることが少ない感動詞についても除外している。また、「あら」と「ありや」のように、表記が類似しているものは、同一の感動詞として音調記述を行っている。

<sup>8</sup> ハ行音／脱ハ行音化は、ア、エ、オといった母音のみの感動詞が、ハ、ヘ、ホといったハ行音の音素を持った感動詞に転化した可能性、あるいは、その逆の可能性を前提としている。しかし、各々の感動詞についてこれらの可能性を検討することは本章の議論の趣旨とは異なる。そこで、ひとまず、ハ行音化した音素を持つ感動詞（ハイ、ヘー、ホーなど）と、対応する、脱ハ行音化した感動詞（アイ、エー、オーなど）は音声面および意味・機能面において類似性が高いことから、同一のカテゴリの（「はい系」「え系」「お系」のように総称的に表記される）感動詞として音調記述を行う。なお、この総称的表記には、そのカテゴリにおいて一般的に用いられる代表的な音素を反映させている。

<sup>9</sup> 「ま」については、「マ」これぐらいでいいか」といった副詞として用いられることもあるが、ここでは感動詞としての「マ、きれい」のような用法のみを扱う。

・「ええと」「うんと」「おっと」・・・2音節感動詞④

1音節感動詞①と②は語末の特殊モーラの自立性に基づいて分類している。上野(1984)は諸方言のモーラ音素がアクセント核を担うる序列という観点から、窪菌(1999)は日本語の歌謡において特殊モーラに音符が付与されるかどうかという観点から、二重母音の第二要素/IJが分節単位として最も自立しやすいとそれぞれ述べている。1音節感動詞は、アー、エツ、ハイ、オイッなどのように語末が特殊モーラとなることがあり、その自立性によりアクセント体系への位置づけ方も異なると考えられる。そこで、語末に常に自立性が高いIJが含まれる「はい」「おい」「やい」を1音節感動詞②とし、それ以外の、IJが含まれることがない1音節感動詞を①とした。2音節感動詞については、語末にトが伴わないタイプ(①～③)と、トが伴うタイプ(④)に二分した。①～③内部はおおむね意味・機能によって分類しており、①は想定外の事態、②は否定の応答、③は促しである。

次節では、まず、主に筆者の内省に基づき、感動詞がとりうる音調を挙げ、音調ごとに特徴を説明し、感動詞がそれぞれの音調が伴う場合の代表的な意味・機能を挙げる。そして、それらの音調をアクセント・イントネーションの枠組みで記述し、同時に、意味・機能についても整理する。

### 3.3 内省に基づく1音節感動詞の音調の記述

#### 3.3.1 1音節感動詞①

##### 3.3.1.1 とりうる音調と意味・機能

このカテゴリの感動詞「うん」「あ」「え」「お」「わ」「ま」「さ」「や」「よ」「な」「ね」は、音調や長さのバリエーションが豊富である。そこで、まずは感動詞の音調で下降をと

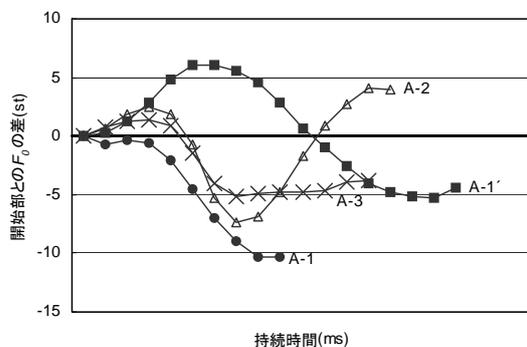


図 3-1 A-1～A-3の音調を意図して発せられた「うん」のF<sub>0</sub>曲線

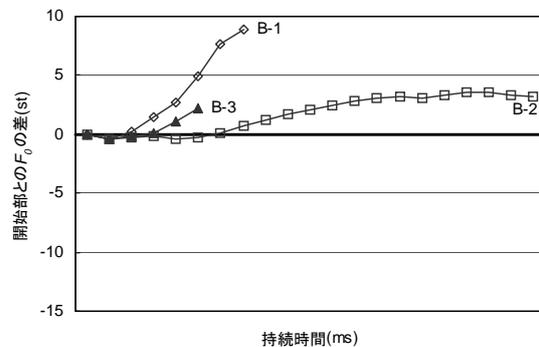


図 3-2 B-1～B-3の音調を意図して発せられた「うん」のF<sub>0</sub>曲線

表 3-1 1 音節感動詞①ととりうる音調(下降をとる場合)

A. 下降をとるもの	うん	あ	え	お	わ	ま	さ	や	よ	な	ね
A-1 下降のみ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
A-1' 上昇→下降	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
A-2 下降→顕著な上昇	○										
A-3 下降→微上昇	○	○									

表 3-2 1 音節感動詞①ととりうる音調(下降をとらない場合)

B. 下降をとらないもの	うん	あ	え	お	わ	ま	さ	や	よ	な	ね
B-1 顕著な上昇	○	○	○	○							
B-2 平坦→微上昇	○		○	○							
B-3 微上昇	○	○	○	○	○	○					

るもの<sup>10</sup> (A) とそうでないもの (B) の 2 つに分類し、さらに、どのような音調が (下降に伴う形で、あるいは単独で) 現れているかで下位 (A-1~B-3) に分類した。図 3-1・図 3-2 は A-1~B-3 の音調を意図して発した「うん」の  $F_0$  曲線を示したものである<sup>11</sup>。曲線の形状が比較しやすいよう開始部を基準とした  $F_0$  値 (半音単位) を 50ms 単位で計測し、グラフにプロットしている。そのため、絶対的な音の高さはグラフには現れていないが、変動幅については互いに比較可能である。

そして、それぞれの感動詞についてこれらの音調をとりうるかどうか整理したものが、表 3-1・表 3-2 である。○はその感動詞が当該の音調をとるという意味である。

以下では、まず A-1 から B-3 までの音調に関する説明と、この音調を伴う感動詞の代表的な意味・機能を述べることにする。

#### A-1 下降のみ

この音調は、開始部でやや上昇することがあるものの、全体的に下降するものである。また、特に開始部で顕著に上昇が見られ、はっきりとした山型の変動となるものを A-1' とする。

- (1) A: きこのうの資料、ありますか? / B: アー/エー、ありますよ。
- (2) A: 今晚すし食べに行かない? / B: ンー、いいね。
- (3) (友達がかいた絵を見て) オー、すごい。
- (4) (母親が息子の部屋を見て) マー、きたない。

この音調は 1 音節感動詞①すべてに現れるが、この音調を伴う感動詞の意味・機能は大

<sup>10</sup> 以下、「下降」とは顕著な下降を指す。ここでは、発話の開始部に特有なわずかに上昇しその後大きく下降する音調も含む。

<sup>11</sup> ここでは筆者 (30 歳代前半男性、北海道出身) の音声データを用いた。

大きく2つに分類できよう。第一は、「入力情報の処理結果」を表示する意味・機能である。何らかの情報入力により、まず、話し手には認識の変化が生じる。しかし、その変化自体を表示する<sup>12</sup>のではなく、認識の変化によってもたらされる、対象への評価や意思表示といった話し手の態度を表示する意味・機能である。これは森山（1996）の情動的感動詞の「遭遇系」の感動詞のうち、一次的な遭遇の反応ではなく、二次的に情動的な変動を表示するものに近い。

その入力情報の処理結果を具体的に見ていくと、この音調を伴う感動詞には2つのタイプが見られる。一つは「肯定的な結果表示」である。主に下降のみの「うん」「あ」「え」「お」については、(1)のような相手からの応答要求発話に対する肯定の応答、(2)のような相手の提案や意見などに対する同意・納得、さらには相手の発話を聞いているときにも用いられる。これらはそれぞれ認識の変化のしかたにより細かい意味・機能は異なる。例えば、(1)のアーは思いついたようなニュアンスがある点で、エーとは異なる。しかし、情報入力の際に話し手の知識と照らし合わせて容認可能な情報が入力された際の結果表示という点で共通している。もう一つは「驚き」である。驚きと言っても多様で、例えば、「アラ、ドアが開かない」「オヤ、もう6時だ」など、こうであるはずだという話し手の想定を裏切る事態に対する話し手の態度も驚きと言えよう。しかし、ここでの「驚き」は主に「お」「わ」「ま」について用いられ、(3)(4)のように、話し手の想定を前提としない、程度がはなはだしい事態に対する話し手の態度である。

(5) ヤー、元気？

(6) ネー、今度の日曜日、すし食べに行かない？

そして、第二の意味・機能は、このような情報の入力や処理を必要としないもので、「非処理」というカテゴリを設定する。ここでは、「親しい関係である相手の注意を引く」意味・機能が挙げられる。「や」「よ」については(5)のように、出会いの際の呼びかけに、「な」「ね」は、(6)のように、話し手の発話を聞いてもらうように促す場合に用いられる。

以上、大きく2つに分けて意味・機能について述べたが、「さ」については、この両方の区分にまたがる。「サー、ちょっとわかりませんね」のような応答不能の場合は「入力情報の処理結果」に関わる意味・機能となるが、「サー、寝るか」といった話し手自身の決意や、「サー、飲みに行こう」といった相手への何らかの行為を促す場合は「非処理」と

<sup>12</sup> 認識の変化自体を表示する意味・機能を持つ感動詞については、B-3で述べる。

いうことになる。

#### A-1' 上昇→下降

上昇→下降は開始部で顕著に上昇する以外は、A-1 と同じで、はっきりとした山型の変動となる。

(7) (消費税が引き上げられる噂が広まり、主婦たちがスーパーで不満そうにおしゃべりしている)

A: 消費税がまた上がるって本当ですか。

B: 「エー。そうになったら、お金がいくらあっても足りないですよね。

意味・機能の面では、A-1 と共通する部分が多いが、肯定的な結果表示や驚きの意味・機能が強調され、場合によっては、特別な意図が含まれる。(7)のように肯定の応答で上昇→下降の「え」を用いたとすると、肯定であるのは当然だといったニュアンス、あるいは、そこから文脈に応じて、皮肉や不満を意図しているとも解釈可能である。

#### A-2 下降→顕著な上昇

前半部の下降の後、後半で急激に上昇するものである。

(8) A: カメラ持ってる? / B: ンー、ないよ。

「うん」に見られ、(8)のように相手からの応答要求発話に対する、入力情報の結果表示としての否定的な結果表示に用いられる。後半部は顕著に上昇しているが、疑問や理解不能のニュアンスを含むものではない。

#### A-3 下降→微上昇

前半部の下降の後、後半でわずかに上昇するものである。後半の上昇は、ほぼ平坦のように聞こえる場合も多い。

(9) アー、負けちゃった。

(10) アー、これからどうしよう。

(11) A: カメラ持ってる? / B: ンー、ないよ。

意味・機能に関しては、「あ」の場合はいずれも入力情報の結果表示として、(9)のような「落胆」、(10)のような「不安・不満」で用いられる。「うん」の場合は、A-2 と同様、(11)のような否定的な結果表示に用いられる。

## B-1 顕著な上昇

下降の音調を伴わず、開始部から急激に上昇するものである。この音調を伴う感動詞は「うん」「あ」「え」「お」であり、いずれも、相手の発話など、話し手が理解しようとする対象について、入力情報の結果表示としての理解不能である話し手の態度を示す<sup>13</sup>。

- (12) エー、結婚したの？
- (13) オー、すごいぞ。
- (14) ンー、なに？
- (15) アー、100万円返せって言ってるんだよ。

例えば、友人 A について話し手は結婚しないと信じて疑わなかったが、相手から A が結婚したという事実を聞き、話し手の知識と矛盾、しかも、そのギャップが理解できない程度である(12)のような発話や、想像できないほどの金を発見したときの(13)のような発話に現れる。その他には、(14)のような相手の話が聞き取れない場合の問い返しも含まれる。さらに、(15)のように、相手にあえて理解不能の状態を示し、相手の論理を排除することで、話し手の論理に強引に導こうとする効果もある。特に、顕著な上昇のアーは声門を狭めて力ませたような音色を伴うと、ヤクザ風な極めて強引な印象となることが多い。

## B-2 平坦→微上昇

開始部からしばらくは同じ高さを維持し、そして緩やかに上昇する音調である。そのため、感動詞としては比較的長めである。この音調は「うん」「え」「お」に見られるが、ハ行音化することも多く、一般的に「ふうん」「へえ」「ほう」などと表記される。

- (16) 01A: 佐藤って、
- 02B: ンー。 /??? フーン。
- 03A: 一浪で東大の法学部に入ったんだって。
- 04B: フーン。すごいね。 /フーン。それで？
- 04B': ホー。すごいね。 /? ホー。それで？

この音調を伴うこれらの感動詞には、共通して「未知の情報の格納」という入力情報の結果表示としての意味・機能が見られる。富樫 (2002a) では「ふうん」を「情報をデータベースに格納したことの標示」と述べており、さらに富樫 (2005c) では他の「へえ」

<sup>13</sup> 森山 (1997) では、上昇イントネーションの意味を「情報としての非充足性」と述べている。

「ほう」についても「ふーん」と同様であるが、話し手の既存知識と格納された情報の位置づけ方が違うと述べられている。つまり、この音調が伴う「うん」「え」「お」は、話し手が今まで知らなかった情報を知り、それを知識としてそのまま取り入れた（未知の情報の格納）という意味・機能においては共通しており、それぞれの間で異なるのは、話し手が未知の情報に対してどのような態度を取るかの違いである。例えば、(16)の 04B のように、フーんは未知の情報（佐藤が一浪で東大の法学部に入ったこと）について関心を持つ場合（「フーん。すごいね。」）も、逆に関心を持たない場合（「フーん。それで？」）も使える。ところが、ホーは 04B' のように、関心を持つ場合（「ホー。すごいね。」）には問題ないが、関心を持たずに「ホー。それで？」と言おうとすると、やや違和感がある。

また、すばらしい絵画を見つけた瞬間に感動のあまり、ホーとは言えるものの、ホーとは言にくい。これは、ホーが対象のありのままを知識として完全に取り入れたというニュアンスが伴うためであると考えられ、絵画をある程度鑑賞してからでなければ用いられにくいであろう。このような現象は(16)の 02B であいづちとしてフーんという発話が難しいことと関連が深い。この場合、フーんが難しいのは、01A の情報のみでは話者 B が取り入れる知識として不完全であるからである<sup>14</sup>。

### B-3 微上昇

開始部からわずかに上昇するものであるが、B-2 と比べ短く、アッ、エッ、オッなどのように語末に声門閉鎖を伴う場合もある。長さによっては上昇がほとんど認識されないものもある。表 3-2 の「あ」から「ま」までの感動詞に用いられる。

(17) オーッ、いいね。

(18) A: きのうの資料、ありますか？ / B: 「アッ、ありますよ。」

(19) 「エ、結婚したの。」

この音調を伴うこれらの感動詞に共通して見られる意味・機能の特徴は、入力情報の処理開始点、つまり、話し手の認識の突発的・瞬間的な変化<sup>15</sup>の表示である。「オー、いいね」のオーは A-1（下降のみ）で述べたように、対象の程度のはなはだしさを認識した後の話

<sup>14</sup> 話し手の取り入れる情報が知識として完全かどうかと、あいづちとしてのフーんの使用との関係については富樫（2002a）にも同様の指摘が見られる。

<sup>15</sup> 富樫（2005a）では「あっ」の機能について「変化点の認識を示す」と述べているが、本研究では、話し手の心的状態の変化点を示すものとして「あ／あっ」に限らず、様々な感動詞に適用できる心的状態であるとする。森山（1996）の一次的な遭遇の反応という考え方に近い。

し手の態度を示している。ここでは「いいね」という後続発話から、対象に対する好意的な態度であると推測できる。それに対し、(17)の微上昇のオーツは、そのような認識の変化が瞬間的に生じたことを主として示している。また、(18)は「資料がある」ことに気づいた瞬間、(19)は相手からの情報と話し手の知識の矛盾が明らかになった瞬間を主に示すという点で、それぞれ、A-1の(1)、および、B-1の(12)とは異なっている。

### 3.3.1.2 アクセント・イントネーションの枠組みによる整理・記述

それでは、前節で見られた1音節感動詞①の様々な音調を日本語のアクセント・イントネーションの体系に位置づけ、その上でアクセントによる記述の妥当性を検討していくことにする。その際、表3-1・表3-2の二重線の左側の感動詞（「うん」「あ」「え」「お」「わ」「ま」）はとりうる音調の種類としてA（下降をとるもの）とB（下降をとらないもの）にまたがっているのに対し、右側の感動詞（「さ」「や」「よ」「な」「ね」）はAの一部の音調に限られている。このように、前者と後者で音調のバリエーションに大きな差が見られることから、それぞれの感動詞のグループごとに考えることとする。

「うん」「あ」「え」「お」「わ」「ま」

表3-1・表3-2の「うん」から「ま」までの感動詞はA（下降をとるもの）とB（下降をとらないもの）両方の音調が見られた。まず、Aは共通して下降をとることから、これをアクセント核による下降と見ると、A-1（下降のみ）はアクセントによる下降に語末音調として平調が伴ったもの、A-1'（上昇→下降）はイントネーションにより開始部の上昇が大きくなったものの、下降はアクセント+平調によるもの、A-2（下降→顕著な上昇）はアクセントによる下降に語末音調として疑問型上昇調が伴ったもの、そして、A-3（下降→微上昇）は語末音調として強調型上昇調が伴ったものと考えることができる。このようにAの音調は下降をアクセント核と見、それ以外の音の動きは語末音調とすることで説明可能である。

一方、Bについては下降が見られないことから、これをもともとのアクセント核がイントネーションによって打ち消されたと見ることも可能である。しかし、語が本来的に持つアクセントの最も重要な特徴、つまり、弁別の特徴であるアクセント核による下降までが消去・破壊されることは一般の語を通常に発音する場合には生じず、それは特別なスタイルや大きな感情が加わるなど特別な場合に生じることであるので、ここではアクセントの枠組みも取り入れて検討することにする。

語頭から上昇する音調を無核のアクセント型による音調であると考え、B-1（顕著な上昇）はアクセントによる語頭の上昇に語末音調として疑問型上昇調が伴ったもの、B-2（平坦→微上昇）と B-3（微上昇）はアクセントによる語頭の上昇に語末音調として平調が伴ったものか、強調型上昇調が伴ったものであると考えることができる。

このように考えると、このグループの感動詞にはアクセントが有核と無核の2種類あるということになる。このように同じ形態で異なるアクセント型を持ち、それぞれが異なる意味・機能を持つ場合、語の認定のしかたについて2つの可能性が考えられる。一つは、有核のア'メ（雨）と無核のアメ（飴）のように全く別の語とする可能性、もう一つは、同一の語における意味による使い分けの可能性である。上野（1984）には、ナ'ガシ（タクシー、唄、風呂等）とナガシ'（台所、流すこと）、キョ'ジン（野球）とキョジン（大男）といった使い分けの例が挙げられている。このグループの感動詞の場合、「うん系」「あ系」「え系」「お系」「わ系」「ま系」はそれぞれ系統内には認識の変化のしかたに共通性があり、他の系統とは異なっている。一方で（語末音調が平調の場合は）二つのアクセント型により、「情報入力処理結果表示」と「情報入力処理開始表示」のように、意味・機能として表示すべき処理過程を使い分けられていると考えられる。例えば、「お系」感動詞のオー'とオーは、認識の変化が生じた後の話し手の態度を示すか、それとも、認識の変化そのものを示すかという点では異なるものの、程度のはなはだしさを認識するという点で共通しており、他の「あ系」や「え系」などとは異なる。このような観点から、「うん」「あ」「え」「お」「わ」「ま」における有核と無核の2種類のアクセント型は全く別の語とはせず、同一の語の意味による使い分けと考える。

「さ」「や」「よ」「な」「ね」

表 3-1・表 3-2 を見ると「さ」「や」「よ」「な」「ね」の音調は A のみ、しかも、A-1 と A-1' のみであった。つまり、語頭の上昇が大きくなることはあるものの、共通して下降をとる。そこで、これらの感動詞の下降をアクセント核によるものと考え、これらの音調はおおむね説明可能となる。したがって、これらの感動詞は有核であり、語末は特に変動のない平調ということになる。

以上の考察を踏まえ、それぞれの音調が伴う 1 音節感動詞①と意味・機能、さらに、音調をアクセント・イントネーションの体系に位置づけた場合のアクセント+語末音調の型を表 3-3・表 3-4 に示す。説明の便宜上、表 3-3 と表 3-4 で感動詞「あ」と「うん」の並ぶ順序を変えている。グレーで塗りつぶされた部分は当該の音調が伴う感動詞が存在し

表 3-3 1 音節感動詞①のとらうる音調, 意味・機能, アクセント+語末音調(下降をとる場合)

音調	うん	あ	え	お	わ	ま	さ	や	よ	な	ね	アクセント+語末音調	
A-1 下降のみ A-1' 上昇→下降	入力情報の処理結果表示 (肯定的/驚き)						(応答 不能)	(決意 ・促し)	非処理(相手の 注意を引く)			有核+平調	
A-2 下降→顕著な上昇	(否定的)												有核+疑問型上昇調
A-3 下降→微上昇		(落胆・不安・ 不満)											有核+強調型上昇調

表 3-4 1 音節感動詞①のとらうる音調, 意味・機能, アクセント+語末音調(下降をとらない場合)

音調	あ	うん	え	お	わ	ま	さ	や	よ	な	ね	アクセント+語末音調
B-1 顕著な上昇	入力情報の処理結果表示(理解不能)											無核+疑問型上昇調
B-2 長音化+微上昇		(未知の情報の格納)										無核+平調 or 強調型 上昇調
B-3 微上昇	入力情報の処理開始表示											

ないことを示している。また、太線枠にゴシック体のラベリングは、意味・機能の上位区分を示し、太線枠内の破線は隣り合う部分が意味・機能の下位区分同士（明朝体のラベリング）であることを示している。

表 3-3・表 3-4 から、意味・機能の上位区分として「入力情報の処理結果表示」「入力情報の処理開始表示」「非処理」の 3 つを挙げることができる。特に「入力情報の処理結果表示」は A と B の様々な音調にまたがり、処理結果として表れる話し手の態度も「肯定的」「驚き」「否定的」「落胆・不安・不満」「理解不能」「未知の情報の格納」「応答不能」と豊富である。一方で、同じ処理過程に関わる「入力情報の処理開始表示」は B-3 に、そして、「非処理」は A-1・A-1'に限られていた。一方、音調記述については、有核と無核という 2 種類のアクセント型が認められる感動詞（「うん」「あ」「え」「お」「わ」「ま」）が見られ、そのうち、「うん」「あ」「え」「お」については平調以外の語末音調も伴う。

### 3. 3. 2 1 音節感動詞②

次に、1 音節感動詞②の「はい」「おい」「やい」について述べる。いずれも自立性の高い特殊モーラ/J/（二重母音の第二要素）が語末に含まれている。

#### 3. 3. 2. 1 とらうる音調と意味・機能

「はい」「おい」「やい」についても、表 3-1・表 3-2 と同様にとらうる音調をまとめた（表 3-5）。音調のラベリングについても表 3-1・表 3-2 で用いたものをそのまま採用した。表 3-5 を見ると、1 音節感動詞②については、音調の種類が非常に限られていることがわかる。

表 3-5 1 音節感動詞②のとらうる音調

	はい	おい	やい
A-1 下降のみ	○	○	○
B-1 顕著な上昇	○		
B-3 微上昇	○		

以下では、前節と同様に音調に関して説明し、その音調が伴う感動詞の意味・機能について述べることにする。

#### A-1 下降のみ

この音調は1音節感動詞②のすべての感動詞に見られた。下降の様子を見ると、ハ`イ、オ`イ、ヤ`イのように、イの直前に下がり目が見られる。さらにハを長音化させて詳しく見ると、ハ―`イ、オ―`イ、ヤ―`イとなり、ハ―、オ―、ヤ―の区間は下降が見られず、イの直前に下がり目が見られる。イを長音化させても下がり目はイの直前のままで、ハ`イー、オ`イー、ヤ`イーとなる。

- (20) 教師: 宿題をしましたか。 / 生徒: ハ―`イ。
- (21) A: これ、コピーしといて。 / B: ハ`イ。
- (22) (プレゼントを渡すとき) ハ`イ、どうぞ。
- (23) (生徒が騒がしいので、自分の発話に注目させる) ハ`イ、ちょっと聞いて。
- (24) オ`イ/ヤ`イ、何しているんだ。

この音調が伴う感動詞の代表的な意味・機能を見てみると、まず「はい」については、(20)のような相手の応答要求発話に対する肯定的な応答、(21)のような行為要求発話に対する承認、あいづちによる相手の発話内容の受け入れ、あるいは名前を呼びかけられたときの返事など、入力情報の処理結果としての「肯定的な結果表示」についての話し手の態度がある。また、ここから派生した意味・機能として、話し手や話し手以外の直前の発話内容や行為などについて話し手が完全に肯定的に受け入れたという態度を示し、これ以上の発話や行為の継続はあり得ない、完了したという態度を示すことも可能である。例えば、(22)であれば、物の受け渡しが必ず伴うことから、プレゼントを渡す行為を完了させる意図がある。また、語学の授業中に学生同士がおしゃべりしているのを教師が終わらせ、自分の発話に注目させたい場合に、(23)のような発話がよく現れる。これは、ハ`イで学生のおしゃべりをあえて肯定的に受け入れることで、これ以上おしゃべりは認めないと示せ、次の話題に移ることができるためである。

それから、「おい」については、主に男性が相手に対する呼びかけや、(24)のような警告など、どちらも話し手が相手の注意を引くという「非処理」としての意味・機能を持つ。そして、「やい」は口論やけんか場面に特化する点を除けば「おい」と同様の用法で、やはり男性である話し手が相手の注意を引くという「非処理」としての意味・機能を持つ。

### B-1 顕著な上昇

この音調は「はい」のみに見られる。上がり目はハ<sup>ハ</sup>イ、ハ<sup>ハ</sup>イー<sup>16</sup>のように、イの開始部から顕著に上昇する。

- (25) 01A: あの一、APUの須藤と申しますが。  
02B: ハ<sup>ハ</sup>イー  
03A: 立命館アジア太平洋大学の須藤ですが。
- (26) A: お母さん、ニンテンドーDSがほしい。  
B: ハ<sup>ハ</sup>イ、うちのどこにそんなお金があるの。

この場合の「はい」の意味・機能は入力情報の処理結果としての「理解不能」であり、(25)のような相手の発話が聞き取れなかったときの問い返しや、(26)のように高価なものがほしいと言う息子(A)に対する母親(B)の発話のように、相手の発話内容が話し手の理解を越える発話であることを表示する場合に用いられる。

### B-3 微上昇

この音調も「はい」のみに現れる。原則、ハからイにかけての上昇(ハ<sup>ハ</sup>イ)である<sup>17</sup>が、上昇幅は上のB-1と比べ非常に小さい。無核の名詞のハイ(灰・肺)と同様の上昇パターンである。

- (27) (Aはケーブルテレビを解約しようと電話をかけている。Bはケーブルテレビの従業員)
- 01A: 今、ケーブルテレビを契約しているんですが、  
02B: ハ<sup>ハ</sup>イ。 / ハ<sup>ハ</sup>イ。  
03A: 来月北海道へ引越すことになりました、  
04B: ハ<sup>ハ</sup>イ。 / ハ<sup>ハ</sup>イ。
- (28) (Aが夫の浮気についての悩みをB(カウンセラー)に打ちあけている)
- 01A: 最近主人の帰りが遅くて、  
02B: ハ<sup>ハ</sup>イ。 / ? ハ<sup>ハ</sup>イ。

<sup>16</sup> この場合、イの前の母音が長音化するパターンはない。

<sup>17</sup> これ以外にも、語頭で上昇し、ハからイにかけてはほとんど上昇しないもの(ハ<sup>ハ</sup>イに近いもの)も含まれる。ここでは便宜的にハ<sup>ハ</sup>イという表記に統一している。

03A: はじめは仕事が大変なんだ、って思っていたんですけど、

04B: ハイ。 /? ハイ。

この「はい」には、入力情報の処理開始点として、話し手の認識の突発的・瞬間的な変化を表示する意味・機能がある。つまり、何らかの情報が入力されて、話し手の認識が変化し、処理結果として話し手は何らかの態度を表明するが、ひとまず話し手の認識が変化したことまでを中心に表示するのがこの機能である。したがって、A-1の「はい」で述べた肯定的な結果表示の意味・機能を示すというよりは、情報の入力があって認識が変化したこと自体を強く表示する。

(27)のように事務的な電話の受け答えであれば、ハイも自然であるが、(28)のように、話者Aの話を肯定的に深く受け止めるという態度の表明が話者Bに求められる場面では、ハイはやや違和感がある。これは、ハイが、相手の発話により話し手の認識が瞬間的に変化したこと、つまり、相手の発話に即座に反応したことを専ら示すため、その後続くべき話し手の態度が捨象されているためである。逆に、即座に反応することが求められる場面ではハイのほうが用いられやすく、返事の「はい」はハイやハーイのほうが自然な場合が多い。

### 3.3.2.2 アクセント・イントネーションの枠組みによる整理

まず、「はい」については、表3-6のようにA-1、B-1、B-3の音調をとる。A-1については、頭高型の形容詞ナ

表 3-6 1音節感動詞②のとりうる音調, 意味・機能, アクセント+語末音調

音調	はい	おい	やい	アクセント+語末音調
A-1 下降のみ	入力情報の処理結果表示 (肯定)	非処理 (相手の注意を引く)		有核+平調
B-1 顕著な上昇	(理解不能)			無核+疑問型上昇調
B-3 微上昇	入力情報の処理開始表示			無核+平調 or 強調型 上昇調

イ(無い)の音調と共通する部分が多い。例えば、ナを長音化したナーイ、イを長音化したナイーはそれぞれ、イの開始部で下降する点でハーイ、ハイーと一致する。したがって、ハイの下降については、アクセント核によるものと判断できる。

次にB-1とB-3については、下降が見られなかった。これもももとのアクセント核がイントネーションによって打ち消されたと見ることも可能であるが、アクセント核による下降が消去・破壊されることは特別なスタイルや大きな感情が加わるなどの場合に限られることから、ここでもアクセントの枠組みを取り入れて検討することにする。これらの音

調については無核の名詞ハイ（灰・肺）と共通する部分が多い。B-3 については既に上で述べたとおりであるし、B-1 のハイについても、「灰ですか」という意味の「灰？」と同様の音調となる。したがって、無核の名詞ハイの音調と同様であるこれらの「はい」は無核と判断できよう<sup>18</sup>。B-1 については無核の「はい」の語末に疑問型上昇調が伴ったもの、B-3 については無核の「はい」の語末に平調か強調型上昇調が伴ったものであると判断できる。このように「はい」についても有核と無核のものが現れたが、1 音節感動詞①と同様に「はい系」感動詞に由来する認識の変化のしかたの点で意味的な共通性を排除できないことから、別語であると考えるのは難しく、同一語の異なるアクセント型による意味の使い分けと考えられよう。

一方で、「おい」「やい」の音調については表 3-6 のように A-1 のみである。「はい」の A-1 と同じように、ナ'イ（無い）の音調とも共通する部分が多いことから、この下降はアクセント核によるものであると判断できる。したがって、「おい」「やい」については有核（頭高型）であると説明できる。

1 音節感動詞②の音調と意味・機能、そして、アクセント+語末音調の関係を示したのが表 3-6 である。これを見ると、3 種類の音調が見られた「はい」については有核と無核という 2 つのアクセント型を持ち、入力情報の処理に関わる意味・機能を持つのに対し、1 種類の音調しか持たない「おい」「やい」については、アクセント型が有核のみで、「相手の注意を引く」という処理に関わらない意味・機能であった。

### 3. 3. 3 1 音節感動詞の音調と意味・機能のまとめ

ここまで、感動詞の音調はアクセントとイントネーションによって説明可能であるという仮説に立ち、1 音節感動詞の音調をアクセント+語末音調の枠組みで記述した。同時に、当該の音調を持つ感動詞の意味・機能についても記述を行った。これらの分析により、感動詞の音調と意味・機能に関し指摘できる点をいくつか挙げる。ここでは、「音調から見た感動詞の類型」と「感動詞の音調と意味・機能」について述べることにする。

#### 3. 3. 3. 1 音調から見た感動詞の類型

まず、1 音節感動詞のとりうる音調にはさまざまなバリエーションが存在する。そこで、

---

<sup>18</sup> この場合、尾高型、つまり、イに核があるという見方も可能である。しかし、感動詞をアクセント体系に当てはめる場合、平板型と尾高型の判断、つまり有核か無核かという判断については、感動詞の独立性の高さから判断が付きにくい。この点については今後の課題としたい。

音調のタイプ別に感動詞を分類し、1音節感動詞の音調の全体像を描くことを試みる。今回の分析の対象であった1音節感動詞には音調を基準に考えると大きく3つのタイプが見られた。**第一のタイプ**（「さ」「や」「よ」「な」「ね」「おい」「やい」）は、音調を一種類のアクセント（有核）と一種類の語末音調（平調）で説明できる、一般的な語の性質に近いタイプである。**第二のタイプ**（「わ」「ま」）は、音調を有核と無核という2つのアクセント型（有核と無核）と語末音調の平調で説明できるタイプである。そして、**第三のタイプ**（「うん」「あ」「え」「お」「はい」）は、音調を2つのアクセント型（有核と無核）とそれに伴う複数の語末音調によって説明するタイプである。1語に1アクセント型という一般的な語の性質から判断すると、第二・第三のタイプとも語としては異質である。さらに、第三のタイプは語末音調が感動詞の意味・機能を判断する上での必須要素となっている。それが文末音調に準じていることを考えると、一般的な語からは相当異質であり、むしろ部分的に文に近い性質を持っていると言えよう。

### 3.3.3.2 感動詞の音調と意味・機能

次に、前節の3つの感動詞のタイプと意味・機能との結びつきについて考える。本章では意味・機能について、「入力情報の処理結果表示」などといった話し手の入力情報の処理過程を想定した上で考察を行っている。まず、2つのアクセント型を持つ第二・第三のタイプの感動詞についてはアクセント型による意味・機能の使い分けが見られた。語末音調が平調の場合、有核の場合は「入力情報の処理結果表示」（特に肯定・驚き）、無核の場合は「入力情報の処理開始表示」という使い分けである。しかし、第三のタイプで平調以外の語末音調が伴うとこのような意味の使い分けは崩れ、有核でも無核でも語末音調のパターンに応じ、「入力情報の処理結果」としての様々な意味・機能を持つようになる。

一方で、第一のタイプの感動詞については、今回の分析ではすべて有核の感動詞であったが、意味・機能については「さ」の一部を除き、処理に関わらない「非処理」で、主に相手の注目を引く、相手に何かを促すといった意味・機能を持っていた。

このように、音調と意味・機能の対応を見ると、その感動詞の意味・機能が入力情報の処理に関わるかどうか、音調の多様性と大きく関係していることがわかる。このことから、入力情報の処理に関わる意味・機能を持つ場合は、様々な処理結果が反映できるような音調のバリエーションが必要であり、逆に処理過程に関わらなければ、一般的な語と同様に1つのアクセント型+平調による音調パターンで済むとひとまず結論付けられよう。

### 3. 4 内省に基づく2音節感動詞の音調の記述

#### 3. 4. 1 2音節感動詞①—「あら」「おや」

ここでは、2音節感動詞で語末にトが伴わないタイプのうち、「想定外の事態」の意味・機能を持つ「あら」「おや」を2音節感動詞①として取り上げる。「想定外の事態」とは、話し手がある事態を想定していながら、その想定とは異なる事態が眼前で生じたことを示す意味・機能である。

##### 3. 4. 1. 1 とりうる音調と意味・機能

2音節感動詞の音調については、語末モーラにおける音調（語末の音調<sup>19</sup>）と、それより前の部分における音調（主要部音調）とに分けて説明を試みる。

表 3-7 2音節感動詞①ととりうる音調

主要部音調	語末の音調	あら	おや
下降	なし	○	○
微上昇	なし	○	○
	顕著な上昇	○	○
	下降	○	

2音節感動詞①の音調については、表 3-7 のように、アからラ、あるいは、オからヤにかけての主要部音調については、（顕著な）下降と微上昇が見られる。一方で、語末の音調について見ると、主要部が下降する場合は、語末では特に目立った音の高さの変動が見られない<sup>20</sup>のに対し、主要部が微上昇の場合は、最大で3種類の音調をとりうる。以下ではそれぞれの音調ごとに、音調の特徴と、その音調が伴う感動詞の意味・機能について説明する。音調のラベリングについては[下降]→[なし]、[微上昇]→[下降]のように[主要部音調]→[語末の音調]と示す。

[下降]→[なし]

アからラ、オからヤにかけて顕著に下降し、語末までそのまま下降を維持するタイプである。

- (29) (パンクしたタイヤを見て、ため息交じりに) ア'ラ/オ'ヤ、ひどいな。
- (30) (話者 A は海外旅行のとき自分の名前の綴りがパスポートとチケットとで違い、空港でチェックインができず、飛行機に乗れなかったという話をしている。)

<sup>19</sup> ここでの「語末の音調」は語末における音の高さの変動を音声的に記述したものを指すのであり、音韻体系に位置づけた型の記述である「語末音調」とは異なる。

<sup>20</sup> これは、主要部音調において見られる下降が語末まで続いているという意味、つまり、主要部から続く音調を変えるような特別な語末の音調がないという意味である。表 3-7 および以下の音調を示す表の「語末の音調」の欄に「なし」と記載されているのは、このような音調の現象を指す。

A: パスポートとチケットの名前のローマ字が違ってて、結局飛行機に乗れなかったんです。

B: ア`ラー，ローマ字ぐらいなんとかならないんですかね。

(31) (女性の話し手が久しぶりに再会した知人に対して) ア`ラ，久しぶり。

(32) (再会した孫に対して) オ`ヤ，大きくなったね。

この音調が伴う「あら」「おや」は、入力情報の処理結果表示としての意味・機能を持つ。話し手が状況を把握し、それが想定外の事態であるという認識の変化を経た後における、評価といった話し手の態度を表示する。例えば、(29)のような発話は、自転車の走行中にパンクしたことに気づき、自転車を降りてタイヤを調べその原因を突き止めたときに発せられる。この時のア`ラ，オ`ヤから推測できるのは、パンクした状況を把握・理解した上での、「ひどい」「どうしよう」「これから歩かなければいけない」「修理が面倒だ」などといった話し手の態度であろう。

また、ア`ラ，オ`ヤは対話でも現れる。この場合、相手の発話内容が想定外の事態であり、話し手はその事態により認識が変化すると同時に、その事態を理解し、受け入れ、共感するといった態度を示す。(30)の話者 B は話者 A の発話内容について、「空港まで行けば普通は飛行機に乗れるはずなのに、ローマ字のミスのせいで飛行機に乗れなかった」という想定外の事態であるとみなしたと考えられる。ア`ラーの後には「ローマ字ぐらいなんとかならないんですかね」といった A に共感するタイプの発話が続きやすく、「本当ですか？」などのようにその事態の真偽を尋ねる応答要求発話は続きにくい。このことから、ア`ラーが想定外の事態を理解し、受け入れ、共感するといった態度を示していることがうかがえよう。

さらに、ア`ラについては、(31)のように、特に女性の話し手が久しぶりに知人に再会したときにア`ラを用いてあいさつ表現等を交わすことがある。オ`ヤについても、比較的高齢である話し手が孫に再会したときに(32)のような発話が見られる。このような用法は、女性や高齢者といった話し手の属性が制限されるようであるが、これらはいずれも、ア`ラ，オ`ヤを発した話し手が知人との再会や孫の成長を「想定外の事態」ととらえている。そして、再会の場面であるということ考慮に入れると、一般的には、思いがけず知人に再会できたこと、あるいは孫の予想以上の成長が喜ばしい、うれしいなどといった話し手の態度を表示していると考えられる。

[微上昇] → [なし]

アからラ、オからヤにかけてわずかに上昇し、語末までそのままの音調を続ける。

(33) (自転車に乗っているとき、急に乗り心地が悪くなる) ア<sup>ラ</sup>/オ<sup>ヤ</sup>, パンク?

この音調が伴う「あら」「おや」は入力情報の処理開始表示としての意味・機能を持つ。話し手が眼前の状況を把握し、それが想定外の事態であるという認識の変化が瞬間的・突発的に起きたこと自体を表示するものである。もう一度、自転車のパンクの例で、今度は、通常の自転車走行中の想定としてはあり得ないパンクのせいで、急に乗り心地が悪くなった、(33)の発話を考えてみる。まず、上述の(29)の[下降] → [なし]のア<sup>ラ</sup>, オ<sup>ヤ</sup>が現れる場合、パンクという異常事態による認識の変化は比較的緩やかであると推測できる。つまり、この認識の変化にある程度時間をかけて対処していると考えられるため、そのような認識の変化に話し手がどのように対処しているかという話し手の態度が表示されやすい。一方で、(33)の[微上昇] → [なし]のア<sup>ラ</sup>, オ<sup>ヤ</sup>が現れる場合は、異常事態による認識の変化が瞬間的に生じたと推測できるため、たった今異常事態が発生したということが表示可能である。

[微上昇] → [顕著な上昇]

これは、アからラ、オからヤにかけてわずかに上昇し、語末で急激に上昇する音調である。この場合、ア<sup>ラー</sup>、オ<sup>ヤー</sup>のように語末が長呼することが多い。

(34) (地図で何度も確認しても目的地にたどり着けず) ア<sup>ラー</sup>、おかしいなー。

この音調が伴う「あら」「おや」も入力情報の処理結果を表示するタイプの意味・機能を持つ。話し手が想定に対して特に確信や期待の度合いが強い、思い込みが強いところで、想定外の事態に遭遇する。それにより認識の変化が起き、その結果、その事態について信じられない、考えられないなどといった理解不能の態度を示す。例えば、(34)のア<sup>ラー</sup>は話し手に地図の説明が正しいという確信があるにもかかわらず、そのとおりにならないことから、信じられないという話し手の態度が表出したと考えることができる。

[微上昇] → [下降]

これは「あら」に見られる音調で、アからラにかけてわずかに上昇し、その後、ラ区間で顕著に下降するもので、ア<sup>ラー</sup>のように長呼することが多い。

(35) (= (30)) B': ア'ラ'ー, ローマ字ぐらいなんとかならないんですかね.

(36) (久しぶりに再会した知人に対して) ア'ラ'ー, 久しぶり.

この音調をとる「あら」もまた, 入力情報の処理結果表示としての意味・機能を持ち, 想定外の事態により話し手の認識が変化し, その後話し手の態度が表示されるものである.

[下降] → [なし] のア'ラと同様の意味・機能である. 例えば, (35)は上で述べた(30)と同じ状況であるが, 飛行機に乗り損ねたという話者 A に対し, (35) B' のア'ラ'ーで応答することも可能である. しかも, 話者 A の発話内容を想定外の事態だとして受け入れ, 理解し, 共感を示していると言え, [下降] → [なし] と同様の意味・機能であると言える. 一方で相違点といえば, ア'ラはあいさつ場面をはじめ, 一般的に女性の話者に用いられやすい傾向が見られるのに対し, ア'ラ'ーについては, 男女共それほど違和感なく用いることができると思われる. また程度差についても, 再会のあいさつ場面の発話である(31)と(36)を比べると, (36)のア'ラ'ーのほうが想定外である度合いが高いという印象がある.

### 3. 4. 1. 2 アクセント・イントネーションの枠組みによる整理

まず, 語アクセントであるが, 主要部音調を見てみると「あら」「おや」とも微上昇と下降が見られる.

下降については, 1 つのパターンのみである. したがっ

表 3-8 2 音節感動詞①のとおりうる音調, 意味・機能, アクセント+語末音調

主要部音調	語末の音調	あら	おや	アクセント+語末音調
下降	なし	入力情報の処理結果表示 (受け入れ・理解)		有核+平調
	なし	入力情報の処理開始表示		無核+平調
微上昇	顕著な上昇	入力情報の処理結果表示 (理解不能)		無核+疑問型上昇調
	下降	(受け入れ・理解) 【強調】		有核+平調(遅上り)

て, ア・オにアクセント核があるものと考え, この下降を有核のアクセントに平調の語末音調が伴ったものと判断できる.

一方, 主要部が微上昇の音調には 3 つの音調パターンが見られたが, これらのうち, まず [微上昇] → [なし] については, 下がり目が見られないことから, 無核のアクセント型に平調の語末音調が伴っていると考えられる.

次に, [微上昇] → [顕著な上昇] についても下がり目が見られないことから, 無核のアクセント型に疑問型上昇調が語末音調として伴ったものと考えられる.

これら下がり目の見られない 2 つの音調については, もともとのアクセント核がイントネーションによって消去・破壊されたと見る見方もあるが, それは特別なスタイルや感情

がある場合に限られ、通常に発音する場合にはありえないので、1音節感動詞の場合と同様に、無核のアクセント型として考えるほうが妥当であろう。

それに対し、[微上昇] → [下降] については、下がり目が見られることから、少なくとも二つの可能性が考えられる。一つは、主要部音調としては下がり目が見られないことから、無核のアクセント型で、語末音調として顕著な下降調が伴っている可能性である。もう一つは、[下降] → [なし] と同様に、アにアクセント核があると考えられる。その上で、強調などの要因により核が壊され、下がり目が次のモーラに移動し、その結果、アは低く始まっていると見る可能性である。川上（1995）には「遅上り型文頭音調」によってアクセントが壊されるという指摘があり、川上ではマ'サカ、バ'カナコト'オのように核を持つ語・句が、マ'サカ、バ'カナコト'オのように下がり目が1モーラ分（1モジュール）後ろへ移動する例が挙げられている。意味・機能についても[微上昇] → [下降]の「あら」は、[下降] → [なし]との共通性も高く、強調という特別な意図が示されることから、後者の可能性、つまり、もともとはアに核がある有核（頭高型）で、遅上り型の文頭音調により核が破壊され、下がり目がラへ移った、と考えたほうが妥当であろう。

このように、「あら」「おや」についても、アクセント型については有核・無核の2つの型をとると考えられる。これらを別語とするか、同一語の意味による使い分けにするかという問題については、語末音調が平調の場合で見ると、有核の場合は「入力情報の処理結果表示」、無核の場合は「入力情報の処理開始表示」と情報の処理過程の表示において使い分けが見られる。一方で、ア'ラとアラについては「想定外の事態」という共通の認識の変化のしかたがある。「おや系」感動詞も「想定外の事態」による認識の変化（「あら」とは当然用法の違いから幾分認識のしかたは異なる）である。したがって、「あら」「おや」についても1音節感動詞の場合と同様に、有核・無核のアクセント型が伴う形式を別語とはとらず、同一語の意味・機能による使い分けと考えることとする。

そして、アクセント+語末音調も含めた音調と意味・機能の対応については表3-8のとおりである。これを見ると、意味・機能はすべて入力情報の処理過程に関わるものであるとわかる。「入力情報の処理結果表示」としての意味・機能は[下降] → [なし]、[微上昇] → [顕著な上昇]、[微上昇] → [下降]（「あら」のみ）に現れていた。一方で、「入力情報の処理開始表示」は[微上昇] → [なし]に見られた。

### 3.4.2 2音節感動詞②—「いいえ」「いや」

表 3-9 2 音節感動詞②ととりうる音調

ここに含まれる感動詞は、一般的に「いいえ、いえ、いいや、いや」などと表記される否定の意味・機能を持つ感動詞で、狭母音 /i/ から始まり、それよりも広い母音 /e/ や /a/ で終わる 2 音節である。

主要部音調	語末の音調	いえ	いいえ	いや	いいや
微上昇	なし	○	○	○	○
	顕著な上昇	○	○	○	○
	下降	○	○	○	○
下降	なし	○	○	○	
	微上昇	○	○		
	顕著な上昇	○	○		
	上昇→下降		○		

また、語頭の /i/ の長さは典型的な表記に基づく、2 モーラ相当のものと 1 モーラ相当のものがある。富樫 (2006) や山根 (2003) は「いいえ」と「いえ」の間には意味的な違いがあるとして、両者を語彙的に区別する一方で、富樫 (2006) は「いいや」と「いや」の間には意味的な違いがないとして区別していないが、ここでは、これらを音声的に再検討するために、語末の母音、/i/ の長さを基準に「いえ」「いや」「いいえ」「いいや」の 4 種類を分析の対象とする。

### 3. 4. 2. 1 とりうる音調と意味・機能

2 音節感動詞②がとりうる音調変動を表 3-9 に示す。それぞれの感動詞について、イからエ、または、イからヤにかけての主要部音調と語末の音調に分けて示している。ここでも、それぞれの音調と、その音調が伴った感動詞の意味・機能について説明する。2 音節感動詞①の時と同じように、それぞれの音調のラベリングは [主要部音調] → [語末の音調] のように表示する。

[微上昇] → [なし]

この音調は 2 音節感動詞②の 4 つの感動詞すべてに見られる。イからエまたはヤにかけて、もしくは語頭でわずかに上昇し、語末までその音調が継続するものである。これは主要部が微上昇であるほかのタイプにも共通して見られる特徴である。

- (37) A: タイカレーって食べたこと、ありますか? / B: イ<sup>↑</sup>エ、ありません。
- (38) (A が借りていたペンを返すとき) A: どうも。 / B: イー<sup>↑</sup>エ。
- (39) (涼しい部屋から暑い外に出た瞬間に) イ<sup>↑</sup>ヤ、暑い。
- (40) イ<sup>↑</sup>ヤ、実は、今度、タイに転勤することになったんだ。
- (41) (親 (A) が子 (B) を叱り、子に謝罪を要求しているが、子は言い訳をする。)  
A: 道路で遊んじゃいけないって言ってるでしょ。

B: イ<sup>1</sup>ヤ, だって, ユキちゃんが....

この音調が伴う感動詞の典型的な意味・機能は、入力情報の処理開始表示としての、否定の開始表示である。具体的には、奥津（1989）と中島（2001）で述べられている、(37)Bのような真偽疑問文や叙述文（コメント）に対する否定的な応答、(38)のような感謝・褒め・詫びなどに対する儀礼的な応答が見られる。さらに、非応答的なものとして、(39)のような「いや」のみに見られる感動・感嘆の意味・機能や、(40)のような発話の切り出しに使われ、それまでの認識との均質な連続性を保証しないことを示す「文脈的不連続の表示」（森山 1996）、そして、(41)Bのように相手から何らかの応答要求に対し、その要求を回避・拒否する用法も見られる<sup>21</sup>。これらの非応答的な否定については、本来的な否定の意味・機能が希薄な「間接的な否定」となっている。

これらは先行発話や状況により様々な意味・機能が実現されるものの、すべて、相手の発話、あるいは、そのときの状況といった入力情報により、否定的な方向への認識の変化が生じるものである。その中でも特にこの〔微上昇〕→〔なし〕の音調が伴う感動詞は、例えば、応答では間髪入れずに応答する、また、非応答の用法でも(39)のような瞬間的な反応があることから、否定の方向性が瞬間的な認識の変化として示されたものであると言える。そのため、否定に対する話し手の態度、例えば相手に対する共感や、主観的な否定の度合いまでは表れにくいと言える。否定の度合いにかかわらないことは、応答要求に対する否定といった「直接的な否定」だけではなく、本来的な否定の意味・機能が希薄な「間接的な否定」も表れやすいという意味・機能の多様性と関係があると考えられる。

#### 〔微上昇〕→〔顕著な上昇〕

この音調は、イからエ・ヤにかけてわずかに上昇し、語末では急激に上昇するものであり、4つの感動詞すべてに見られる。

(42) (AとBは夫婦) A: アイロンかけたか? / B: イー<sup>1</sup>エ<sup>1</sup>ー, かけてないわ。

〔微上昇〕→〔顕著な上昇〕の音調が伴う場合の意味・機能については、須藤（2007b）でも観察されているとおり、この顕著な上昇に問いかけや疑問、あるいは上で何度か述べられている、入力情報の処理結果表示としての「理解不能」といったニュアンスは伴わず、〔微上昇〕→〔なし〕で見られたような否定に関する意味・機能に限られる。ただ、真偽

<sup>21</sup> 相手の応答要求に応じていないという点で非応答的であると言える。

疑問文や叙述文に対する否定応答ぐらいに限られ、しかも、目上の相手など、待遇的な配慮が求められる相手からの応答要求に対する応答にはやや用いられにくく、用いることができたとしても、かなりはっきりとした強い否定となる。一方で、(42)のようなやりとりと場面が想定できるように、親しい関係ではよく現れる音調であると言える。このような用法から、待遇的な配慮なしに対象を完全に否定しようとするという話し手の態度がこの音調に現れていると言える。つまり、入力情報の処理結果表示としての全否定の結果表示の意味・機能を持っていると考えられる。

[微上昇] → [下降]

この音調は、同様に主要部でわずかに上昇し、語末で顕著に下降するタイプである。4つの感動詞すべてに見られる音調である。

(43) (外で知り合いに出会い、暑いのを嫌そうにしている) イ'ヤ'ー, 暑い.

(44) A: いろいろ案内してくださってありがとうございます。 / B: イ'エ'ー.

意味・機能については、入力情報の処理結果表示としての否定的な結果表示で、否定の結果としての話し手の態度を積極的に表示する。この点を詳しく説明するために、感動・感嘆の「いや」を例にとって説明する。感動・感嘆の「いや」は、何かにより話し手自身が圧倒される場合に用いられる。これは明示的な否定ではないものの、話し手が否定されるといったニュアンスが伴っていると考えられることも可能であろう。[微上昇] → [なし]のタイプは、前述の(39)のように、話し手が外に出て暑さを感じた瞬間に圧倒されているように、否定的状況(=話し手が圧倒されること)を認識したという認識の変化そのものを示している。ところが、[微上昇] → [顕著な下降]は(43)のように、話し手は暑さに圧倒され、その結果、話し手の態度として暑さを嫌そうにしている、といったことが、イ'ヤ'ーによって前面に現れやすくなっていると言える。つまり、否定的状況を認識した上で、その結果としての話し手の態度が現れやすいということである。

感動・感嘆以外にも、(44)のような相手からの感謝・褒め・詫びの発話に対する儀礼的な応答として用いられる場合にもこの音調が現れやすい。これも、話し手は相手から感謝・褒め・詫びの対象とされている自身を否定、つまり、謙遜するという意味・機能である。将来にわたって話し手と相手との関係を維持できるようにするためには、感謝・褒め・詫びによって高められた話し手自身を低めることは当然であるが、それだけではなく、話し手は将来にわたって相手との関係を維持していく意図があるということを示さなければな

らない。したがって、相手に感謝された際には、上述の(38)の〔微上昇〕→〔なし〕のイ<sup>1</sup>エのように、単に感謝を否定すべきであるという認識の変化のみ表示することも可能であるが、(44)のように、否定により話し手がとるべき態度、例えば、「あなたに感謝してもらうほど私を高めなくても、いい関係はこれからも続きますよ」など、将来の関係に対する安心感が示せるほうが、対人関係の維持には効果的であろう。

〔微上昇〕→〔下降〕が伴う感動詞は、このような感動・感嘆、儀礼的な応答以外にも、文脈や対人関係などに応じ、否定の結果としての話し手の態度が前面に表示されやすい。

#### 〔下降〕→〔なし〕

次に、主要部音調が顕著に下降する場合を見る。「いえ」「いいえ」「いや<sup>22</sup>」に現れる音調である〔下降〕→〔なし〕は一般的には、イ<sup>1</sup>エ、イー<sup>1</sup>エ、イ<sup>1</sup>ヤのようにイからエまたはヤにかけて下降が見られ、そのまま語末まで下降を続けるが、「いいえ」については、イー<sup>1</sup>エのようにイ区間で顕著な下降が見られることもある。

(45) A: いろいろ案内してくださってありがとうございます。 / B: イ<sup>1</sup>エ。

(46) (外で知り合いに出会い、暑いのを嫌そうにしている) イ<sup>1</sup>ヤ、暑い。

この音調をとる感動詞は、感謝・褒め・詫びに対する(45)のような儀礼的な応答で頻繁に見られるものである。また、「いや」については、(46)のように感動・感嘆の用法でも見られる。このように、用法について〔微上昇〕→〔下降〕と似ており、また語末に下降が見られるという点でも共通していることから、この音調をとる感動詞についても、否定の結果としての話し手の態度を示す意味・機能があると言える。

#### 〔下降〕→〔微上昇〕

「いえ」「いいえ」に限られる音調で、イからエにかけて顕著に下降し、語末でわずかに上昇する。「いいえ」については、イ区間で顕著に下降するものもある。

(47) A: タイカレーって食べたこと、ありますか? / B: イ<sup>1</sup>エ<sup>1</sup>, ありません。

(48) (Aが借りていたペンを返すとき) A: どうも。 / B: イ<sup>1</sup>エ<sup>1</sup>。

(49) (AとBは夫婦) A: アイロンかけたか? / B: イ<sup>1</sup>エ<sup>1</sup>, かけてないわ。

この音調を伴う「いえ」「いいえ」については、(47)のような真偽疑問文や叙述文に対す

<sup>22</sup> この場合の「いや」は、/i/が聞こえ度が低く/j/に同化しやすいことから、高いイが聞き取れず、イからヤにかけての下降がはっきりと認められないことがしばしばある。

る応答, (48)のような儀礼的な応答に用いられる。ただ, [微上昇] → [なし] のイ'エ, イ'ーエよりも, 比較的強い否定の意志を示すものであり, 例えば, 目上など待遇的な配慮が求められる相手には用いられにくく, (49)のような逆に親しい関係では用いられやすい。このように, 儀礼的な応答にも用いられる点では異なるものの, [微上昇] → [顕著な上昇] の場合と同様に, 強い否定を示すことから, 入力情報の処理結果として, 全否定の結果表示であると考えられる。

#### [下降] → [顕著な上昇]

こちらも, 「いえ」「いいえ」に限られる音調で, イからエにかけて顕著に下降し, 語末で顕著に上昇する。「いいえ」については, イ区間内で顕著に下降するものもある。

(50) A: タイカレーって食べたこと, ありますか? / B: イ'エー, ありません。

この音調を持つ「いえ」「いいえ」は, 儀礼的な応答には用いられないものの, (50)のような真偽疑問文や叙述文に対する応答については, [下降] → [微上昇], 「微上昇」 → 「顕著な上昇」と同様に, 比較的強い否定応答として用いることができ, 目上など待遇的な配慮が求められる相手からの応答要求に対する応答には用いられにくい。このようなことから, 入力情報の処理結果として, 全否定の結果表示の意味・機能であると考えられる。

#### [下降] → [上昇→下降]

この音調は, 「いいえ」のみに見られ, イ区間で顕著に下降し, 語末のエで上昇し再度顕著に下降する。

(51) A: いろいろ案内してくださってありがとうございます。

B: イ'ー'エー, とんでもない。

この音調を伴うイ'ー'エーは(51)のように, 特に, 儀礼的な応答において大げさに謙遜する場合や, 他の真偽疑問文などに対する応答であっても「とんでもない」「冗談じゃない」など話し手の感情を大げさに表現する場合にしばしば用いられる。[微上昇] → [下降], [下降] → [なし] の場合と同じく, 否定の結果としての話し手の態度が表示されやすいが, この音調ではその態度がことさら強調されて表示されると言える。

### 3. 4. 2. 2 アクセント・イントネーションの枠組みによる整理

前節で述べた音調をもとに, アクセント・イントネーションの枠組みで2音節感動詞②

の音調について説明を試みる。

まず、主要部音調が微上昇である音調について検討する。上昇のしかたをみると、基本的にはイからエまたはヤにかけての上昇といえるが、語頭で上昇し、その後はほぼ平坦なタイプも見られる。

下がり目を持たない〔微上昇〕→〔なし〕,〔微上昇〕→〔顕著な上昇〕について、これらの上昇は無核のアクセント型に典型的な音調であり、既に述べた意味・機能からも特別なスタイルや大きな感情が加わって本来存在するアクセント核が消失・破壊されたとは考えにくく、アクセント型として無核と考えることが自然であろう。これらの上昇のしかたは、無核のアクセント型で/i/の長音がある「聞いて」（「聞く」の連用形）にキーテとキーテのような上昇のしかたがあることから、無核のアクセント型と判断して差し支えないと考える。それぞれ、〔微上昇〕→〔なし〕は、無核のアクセント型で語末が平調,〔微上昇〕→〔顕著な上昇〕は、無核のアクセント型で語末が疑問型上昇調と位置づけられよう。

しかし、語末で下がり目を持つ〔微上昇〕→〔下降〕については、二つの可能性がある。一つは、主要部に下がり目がないことから、無核のアクセント型で語末が顕著な下降調という可能性である。もう一つは、2音節感動詞①の「あら」のケースと同様に、「遅上り文頭音調」で説明する可能性である。もともとは語頭モーラに核（下がり目）があったが、強調などの要因で語頭モーラが低く始まってしまい、結果的に核が壊され、下がり目が後ろに移動したということである。この現象を2音節感動詞②の音調について考えると、もともと主要部に下降がある〔下降〕→〔なし〕から、下がり目が後ろへ移動した〔微上昇〕→〔下降〕への変化と共通している。また、それぞれの音調が伴う感動詞の意味・機能を見ると共通点も多い。ゆえに、ここでは後者の「遅上り文頭音調」の可能性を採用し、〔微上昇〕→〔下降〕については、後で述べる〔下降〕→〔なし〕と同様のアクセント型で、「遅上り文頭音調」の影響を受けていると判断する<sup>23</sup>。

次に、「いいや」以外の3つの感動詞に見られた主要部音調が下降するものについては、こちらも、イ区間内、もしくは、イからエまたはヤにかけての下降である。これらの下降

<sup>23</sup> ただし、「いいや」は〔下降〕→〔なし〕の音調を伴うことはないため、「いいや」については「遅上り文頭音調」により下がり目が移動したという説明はできない。したがって、「いいや」については前者の可能性、つまり無核のアクセント型に語末音調として顕著な下降調が伴っていると見る。だが、これを「いや」からの派生と考えると後者の考え方も可能である。つまり、下がり目の移動が強調によるものであるということであれば、イ`ヤのイも強調により引き延ばされ、結果的にイー`ヤーと説明することが可能である。ただし、この場合「いや」と「いいや」が別語ではなく、同一語のバリエーションであることが前提となるため、詳細な議論は今後の課題とする。

は、オにアクセント核があり長母音が含まれている「多い」が2モーラ目にかけて下がるオーイと、イにかけて下がるオーイという音調が見られることから考えると、下降のしかたに共通性が見られ、イに核があると考えて差し支えないだろう。

ゆえに、それぞれの音調をアクセント・イントネーションの枠組みに位置づけると、[下降] → [なし] は有核（頭高型）で語末が平調<sup>24</sup>，[下降] → [微上昇] は有核（頭高型）で語末が強調型上昇調，[下降] → [顕著な上昇] は有核（頭高型）で語末が疑問型上昇調，そして、[下降] → [上昇→下降] は有核（頭高型）で語末が上昇下降調となる。

この結果、2音節感動詞②の「いえ」「いいえ」「いや」についても、1つの形式に有核と無核という2つのアクセント型が見られた。これについても、有核・無核とも否定という意味・機能で共通していることから、別語とは見ず、これまでの分析と同様に意味・機能の使い分けと見る。表3-10のように、語末

表3-10 2音節感動詞②のとらうる音調, 意味・機能, アクセント+語末音調

主要部音調	語末の音調	いえ	いいえ	いや	いいや	アクセント+語末音調
微上昇	なし	入力情報の処理開始表示				無核+平調
	顕著な上昇	(全否定)				無核+疑問型上昇調
	下降	入力情報の処理結果としての話し手の態度				有核+平調(遅上り) (「いいや」は無核+顕著な下降調)
下降	なし	結果表示 話し手の態度				有核+平調
	微上昇	(全否定)				有核+強調型上昇調
	顕著な上昇	(全否定)				有核+疑問型上昇調
	上昇→下降	(否定の結果としての話し手の態度)【強調】				有核+上昇下降調

音調が平調の場合は、無核は「入力情報の処理開始表示」、有核は「入力情報の処理結果表示」という使い分けが見られる。

そして、意味・機能については、情報入力処理にかかわる「入力情報の処理開始表示」と「入力情報の処理結果表示」が見られ、前者には[微上昇] → [なし] が対応していた。後者については、「否定の結果としての話し手の態度」と「全否定」の2種類の具体的な意味・機能が見られ、「否定の結果としての話し手の態度」に対応する音調は[微上昇] → [下降]，[下降] → [なし]，[下降] → [上昇→下降]であった。また、「全否定」については、[微上昇] → [顕著な上昇]，[下降] → [微上昇]，[下降] → [顕著な上昇]であった。

また、これまで挙げた感動詞のうち、情報の処理過程にかかわる意味・機能を持つ感動詞については、有核・無核の両方を持っていたが、「いいや」については、無核のみであった。しかし、語末音調は平調を含めて3種類見られ、これまでの感動詞の音調のタイプとは異なっていた。

<sup>24</sup> したがって、上述の[微上昇] → [下降] も有核（頭高型）であるということになる。

### 3. 4. 3 2音節感動詞③—「こら」「ほら」

ここに分類された感動詞は、促しの意味・機能を持つ2音節の感動詞「こら」「ほら」である。同様のものに「これ」「そら」などがある。

#### 3. 4. 3. 1 とりうる音調と意味・機能

表 3-11 2音節感動詞③ととりうる音調

まず、これらの感動詞がとりうる音調を見ると、表 3-11 のようにすべてコマまたはホからラにかけて下降し、語末は特に音調の変化がなく、語末まで下降が継続している。

主要部音調	語末の音調	こら	ほら
下降	なし	○	○

- (52) コ`ラ, 何してるんだ.
- (53) コ`ラ, 静かにしなさい.
- (54) ホ`ラ, 見てごらん.
- (55) ホ`ラ, 見たことか.

これらの感動詞の意味・機能は、特に入力情報の処理過程に関わらない「促し」である。それぞれについて見てみると、「こら」は、相手に対する警告として促す用法がある。具体的には、(52)のように相手の注意を強くひきつける、あるいは、(53)のように諭したり言い聞かせたりする。子どもや部下など目下の人を呼び止めたり叱ったりするとき用いられる。一方、「ほら」は(54)のように、相手になんらかの行動を促すときや、(55)のように、相手が何か失敗した、あるいは危機的状況に置かれた場合、相手が無視した事前の忠告や警告に注目させるときに用いられる。

#### 3. 4. 3. 2 アクセント・イントネーションの枠組みによる整理

2音節感動詞③の音調はすべてコマまたはホからラにかけて下降が見られる。この下降はコマまたはホにアクセント核があると考えたと説明可能であることから、有核頭高型アクセントによるものであると考えられる。また、語末は平調である。

表 3-12 2音節感動詞③のとりうる音調, 意味・機能, アクセント+語末音調

主要部音調	語末の音調	こら	ほら	アクセント+語末音調
下降	なし	非処理(促し)		有核+平調

意味・機能との対応を見ると、「こら」「ほら」も入力情報の処理過程に関わらない「非処理」である。アクセント型が1つであること、そして、語末音調が平調のみであること

は、これまで見てきた非処理の意味・機能を持つ感動詞に共通の特徴である。

### 3. 4. 4 2音節感動詞④—「ええと」「うんと」「おっと」

ここに挙げる感動詞は、語末にトが伴う2音節の語である。「ええと」と「うんと」<sup>25</sup>は専ら言いよどみに用いられる感動詞である。また、「おっと」については、例えば、

寝てはいけない状況でウトウトしている時に発せられる「オット、寝るところだった」のように、話し手の注意が散漫である中で、急に我に返るような時に用いられる。

表 3-13 2音節感動詞④ととりうる音調

主要部音調	語末音調	ええと	うんと	おっと
微上昇	なし	○	○	
	下降	○	○	
下降	なし			○
	顕著な上昇			○

#### 3. 4. 4. 1 とりうる音調と意味・機能

2音節感動詞④のとりうる音調は表 3-13 のとおりである。ここでも、音調とその音調が伴う感動詞の意味・機能について一つずつ説明していく。

[微上昇] → [なし]

この音調は「ええと」「うんと」に見られ、エからト、ンからトにかけてわずかに上昇が見られ、その音調が語末まで続いている。

(56) (クイズで) A: フランスの首都は? / B: ント, パリ.

(57) (クイズで答えるときに) ンート, エート, もうここまで出て来てるのに.

この音調が伴う「ええと」「うんと」の意味・機能について考える。「ええと」は、定延・田窪 (1995) によれば、談話中に内容 (モノ自体) の検索や計算に手間がかかる場合に、話し手の意識を小容量の心的バッファから大容量の心的データベースに戻すことによって演算領域を確保する (つまり、心的バッファを占めている様々な情報を一時「頭の片隅」に追いやって集中力を高める) という。このような心的操作に入っていること (入りつつ、当該の検索や計算をおこなっていること) を表すのが「ええと」だということである。また、田窪・金水 (1997) によれば、「言い淀み系」の「語彙的形式」の「内容計算」に「ええ (っ) と」「ううんと」が分類されており、「うんと」についても「ええと」と同様の意味・機能を持っていると言える。

<sup>25</sup> ここでも、「うん」は必ずしも2モーラを意図したものではなく、鼻子音・鼻母音の分節音を持つ感動詞であることを、一般的なわかりやすさの面から意図した表記である。音韻的な表記としてはンを用いる。

このように、「ええと」「うんと」は言いよどみ、内容計算といったことが示唆されていることから、本章でこれまで述べてきた処理過程に基づいたラベリングをするならば、処理がなかなか開始できない「入力情報の処理前表示」とできよう。微上昇のまま語末まで続き、下降が見られない場合は、言いよどむ長さが短めで、計算結果の内容がある程度準備されている場合である。語末の音調を下降させずに、トーと引き延ばして長時間保つことが難しいため、あらかじめ長時間かかりそうな言いよどみには向かないからと考えられる。例えば、(56)のように言いよどむものの、すぐに解答が思いつくような場合に用いられる。(57)のように、解答が出て来そうで出て来ない場合にも用いることができる。

[微上昇] → [下降]

この音調も「ええと」「うんと」に見られ、エからト、ンからトにかけてわずかに上昇が見られ、その後語末のトで顕著に下降するものである。

(58) (レストランでメニューを見ながら) エ「ート」ー、どれがいいかな。

この場合の「ええと」「うんと」も「入力情報の処理前表示」であるが、語末で下降が見られるときは、言いよどみが長めで、一呼吸置いて思いをめぐらすような場合に見られる。したがって、[微上昇] → [なし] とは違い、計算結果の内容が準備されていない場合に用いられる。そのため、(58)のように料理をすぐに決められない場合には用いられやすい。

[下降] → [なし]

この音調は「おっと」にのみ現れ、オからトにかけて下降が見られる。その下降は語末まで続いており、語末に特に音調の変化は見られない。また、強調する場合にオ「ー」ットのように、語頭のオが低く始まった後に上昇し、トにかけて下降する音調も現れる。

(59) (スポーツ中継などの実況で) オ「ット」、ここで日本代表、選手の交代ですね。

この音調が伴う「おっと」については、上述のように、注意が散漫な話し手が、急に我に返ったような状況で発せられるのが典型である。また、(59)のように不意を突く状況の変化を示すときにも用いられる。ここでは、入力情報の処理結果表示として、眼前の事態の認識に変化が生じ、話し手の態度として、その事態に対する注意が不足していたが、処理が追いつき事態を理解し受け入れたことを表示する。

[下降] → [顕著な上昇]

この音調も「おっと」に現れ、主要部音調は下降し、低いトから急激に上昇するもので

ある。強調の場合は、オ<sup>ー</sup>ット<sup>ー</sup>のように、語頭のオが低く始まった後に上昇し、トにかけて下降し、そこから急激に上昇する。

(60) (スポーツ中継などの実況で)オ<sup>ー</sup>ット、ここで審判団が集まって話をしています。

この音調が伴う「おっと」は、(60)のように、試合中に審判団が集まるということが話し手にとって不可解であることを示す時に用いられる。つまり、話し手の態度としては、その事態に対する注意が不足していたが、処理が追いつき、事態を把握しようとしていることは[下降]→[なし]と同じである。しかし、[下降]→[顕著な上昇]は、その事態が依然として理解不能であることを示している。これも、入力情報の処理結果表示であり、眼前の事態の認識に変化が生じ、結果的に話し手の態度が表示されている。ただ、この用法は、実況に限られ、対話で見られることは少ない。

### 3. 4. 4. 2 アクセント・イントネーションの枠組みによる整理

2 音節感動詞④は、主要部音調のタイプが「ええと」「うんと」と「おっと」で異なることから、それぞれ別に音調を検討することにする。

表 3-14 2 音節感動詞④のとりうる音調, 意味・機能, アクセント+語末音調

主要部音調	語末の音調	ええと	うんと	おっと	アクセント+語末音調
微上昇	なし	入力情報の処理前表示(短め)			無核+平調
	下降	(長め)			無核+顕著な下降
下降	なし			入力情報の処理結果表示 (注意不足・受け入れ)	有核+平調
	顕著な上昇			(注意不足・理解不能)	有核+疑問型上昇調

まず、「ええと」「うんと」の音調について考える。[微上昇]→[なし]については、主要部音調を見てみると、トにかけて微上昇が見られる。一方で、主要部音調に下降が見られないことから、無核のアクセント型とする見方と、もともとあったアクセント核がイントネーションにより破壊されたという見方がある。しかし、これら感動詞の用法から、核を破壊するような特別なスタイルや強い感情を想定することは困難である。したがって、もともと核がない、無核のアクセント型として位置づけることにする。

[微上昇]→[下降]については、語末の音調に下降が見られた。これについては、語末音調として顕著な下降調と見る見方か、核による下降が強調などの要因により主要部から移動してきたとする見方がある。しかし、「ええと」「うんと」は[微上昇]→[なし]で無核のアクセント型としているように、全体的に有核と考える根拠に乏しいことから、

核による下降が移動してきたという見方は排除できよう。すなわち、この音調については、無核のアクセント型に語末音調として顕著な下降調が伴ったものと見ることができる。

次に、「おっと」の音調について考える。[下降] → [なし] については、オが高く、トにかけて下降するタイプと、強調するときなどに見られるオ<sup>1</sup>トのように、オが低く、次の長音にかけて上昇、そしてトにかけて下降というタイプが見られた。これらは、オにアクセント核があると考えるとどちらも説明可能である。オ<sup>1</sup>トについては、強調で語頭が低く始まっているものの、核が付与されている場所は音節単位で見ればオ<sup>1</sup>トと同じである。したがって、オにアクセント核がある、有核（頭高型）のアクセント型であると判断できる。

[下降] → [顕著な上昇] についても同様に考えられ、オにアクセント核がある有核のアクセント型で、語末音調については、疑問型上昇調が伴っていると判断できる。

意味・機能と音調との関わりを見ていくと、「ええと」「うんと」については、どちらの音調でも「入力情報の処理前表示」である。その上で、処理前の状況については語末音調の違いに還元でき、[微上昇] → [なし] は言いよどみの時間が短めで計算結果の内容がある程度準備されていることを示し、[微上昇] → [下降] については、計算結果の内容が準備されておらず、計算に時間がかかることを示している。

一方、「おっと」についても、どちらの音調でも、「入力情報の処理結果表示」であり、特に、話し手が事態に対し注意不足であったことを示している。その上で、話し手の態度をより詳しく見ると、その事態を受け入れて理解に達している場合と、その事態に対し理解不能である場合があり、これらの違いは語末音調の違いに還元できる。ただ、「おっと」はこれまで検討した「入力情報の処理結果表示」の感動詞の中では数少ない、有核（頭高型）のアクセント型のみを持つ感動詞である。

### 3. 4. 5 2 音節感動詞の音調と意味・機能のまとめ

ここまで、2 音節感動詞の音調をアクセントとイントネーションの枠組みへ位置づけることを試み、同時に、当該の音調を持つ感動詞の意味・機能についても記述を行った。ここで、1 音節感動詞の時と同様に、「音調から見た感動詞の類型」と「感動詞の音調と意味・機能」について、2 音節感動詞の場合はどうであったかをまとめる。

#### 3. 4. 5. 1 音調から見た感動詞の類型

まずは、1音節感動詞のときの3つの音調のタイプ別に2音節感動詞を分類し、音調の全体像を観察する。その上で、分類不可能な音調が出現した場合は新しいタイプとしてまとめることにする。

まず、音調を一種類のアクセントと平調の語末音調で説明できる、一般的な語の性質に近い**第一のタイプ**の感動詞としては「こら」「ほら」があった。次に、音調を有核と無核という二つのアクセント型と平調で説明する**第二のタイプ**は見られなかった。そして、音調を有核・無核の2つのアクセント型と複数の語末音調によって説明する**第三のタイプ**の感動詞として「あら」「おや」「いえ」「いいえ」「いや」が見られた。

最後に、これら3つの音調のタイプに分類できなかった「いいや」「ええと」「うんと」「おっと」はいずれも、音調を一種類のアクセントと複数の語末音調によって説明するタイプの感動詞であった。「いいや」「ええと」「うんと」は無核、「おっと」は有核（頭高型）であり、それぞれに平調を含む二種類以上の語末音調が伴っていた。これを**第四のタイプ**の感動詞とする。この第四のタイプの感動詞は、アクセントが一種類のみであるという点では第一のタイプの感動詞に近く、一般的な語の性質に近いが、語の意味・機能を判断する上での必須要素として、文末音調に準じた語末音調が複数伴うことから、部分的に文に近い性質を持っていると言える。

### 3.4.5.2 感動詞の音調と意味・機能

次に、前節で分類した感動詞が意味・機能とどう結びついているかまとめる。まず、2つのアクセント型を持ち、複数の語末音調が伴う第三のタイプの感動詞（「あら」「おや」「いえ」「いいえ」「いや」）は、すべて入力情報の処理過程に関わる意味・機能を持っていた。その中で、語末音調が平調の場合を見ると、有核のアクセント型で「入力情報の処理結果表示」、無核で「入力情報の処理開始表示」という使い分けが見られたが、語末音調が平調以外の場合はすべて「入力情報の処理結果表示」としての意味・機能が見られた。これらは1音節感動詞と同様の傾向であった。

次に、1つのアクセント型を持ち、語末音調が伴う第四のタイプの感動詞（「いいや」「ええと」「うんと」「おっと」）についても、入力情報の処理過程に関わる意味・機能を持っていた。そのうち、無核の「いいや」については、語末音調が平調であれば「入力情報の処理開始表示」、語末音調が平調以外であれば「入力情報の処理結果表示」、「ええと」「うんと」については「入力情報の処理前表示」、そして、有核の「おっと」は「入力情報の処理

結果表示」についての意味・機能であった。

そして、1つのアクセント型と平調の語末音調のみで音調が説明できる第一のタイプの感動詞（「こら」「ほら」）については、「非処理」で、促しの意味・機能であった。

2音節感動詞についても、このように音調と意味・機能の対応を見ると、やはり、情報の処理過程に関わるかどうか音が音調の多様性に関係しているようである。入力情報の処理過程に関わる意味・機能を持つ感動詞は、少なくとも、1つの形式で有核・無核という2つのアクセント型を持つ、あるいは、（特に音調の変動が見られない平調を含め）二種類以上の語末音調を持つ、というどちらか（あるいは両方）の特徴を備えていると言えるだろう。

### 3.5 考察のまとめ

以上、1音節感動詞・2音節感動詞と区分した上で、他の概念語からの転化ではない「生粋の感動詞」の音調をアクセント・イントネーションの枠組みに位置づけ説明し、それぞれの音調が伴う感動詞がどういった意味・機能で用いられるかを考察した。それぞれの感動詞のアクセント型、語末音調、意味・機能を表3-15にまとめる。

以下では、表3-15を説明する形で、感動詞の音調がアクセント・イントネーションの枠組みにどのように位置づけられたか、そして、それらの音調と意味・機能の対応関係はどうかであるのかについてまとめることにする。

表 3-15 感動詞のアクセント型、語末音調、意味・機能

		1つの形式に対するアクセント型の数	
		1つ	2つ
語末音調のバリエーション	(平調のみ) なし	「さ」「や」「よ」「な」「ね」「おい」「やい」「こら」「ほら」 <b>第一のタイプ</b> 非処理(入力情報の処理結果表示・・・「さ」のみ) 有核+平調	「わ」「ま」 <b>第二のタイプ</b> 入力情報の処理結果表示 有核+平調 入力情報の処理開始表示 無核+平調
	あり	「いや」 入力情報の処理結果表示 無核+疑問型上昇調 無核+顕著な下降調 「ええと」「うんと」 入力情報の処理前表示 無核+平調 無核+顕著な下降調 「おっと」 入力情報の処理結果表示 有核+平調 有核+疑問型上昇調	「うん」「あ」「え」「お」「はい」「あら」「おや」「いや」「いえ」「いえ」 <b>第三のタイプ</b> 入力情報の処理結果表示 有核+平調 無核+疑問型上昇調 有核+強調型上昇調・・・「うん」「あ」「いいえ」「いえ」のみ 有核+疑問型上昇調・・・「うん」「いいえ」「いえ」のみ 無核+平調(長音化)・・・「うん」「え」「お」のみ 有核+上昇下降調・・・「いいえ」のみ 入力情報の処理開始表示 無核+平調(強調型上昇調)

\* 有核は2音節感動詞の場合、語頭の音節にアクセント核がある。

### 3.5.1 アクセント・イントネーションの枠組みへの位置づけ

本章で扱った感動詞はすべてアクセントの枠組みを取り入れた説明が可能で、かつ妥当であった。そのため、本章での音調記述は、従来の先行研究に見られたアクセントの枠組みを無視した記述と比べ、日本語の音韻体系に沿うものであると言える。その上で、一般的な語が持つ音調からはやや異質な特徴も観察できた。

まず、アクセント型については、一般的な語のように1つの形式に1つのアクセント型で説明可能な感動詞と、1つの形式に有核と無核の2つの型で説明すべき感動詞が見られた。後者のタイプの感動詞は、有核のアクセント型が伴う形式と無核のアクセント型が伴う形式に意味・機能（処理過程、認識の変化のしかた）の点で共通性があることから、これらの形式を別語とはせず同一の語とし、アクセント型により意味・機能を使い分けしていると判断した。

次に、感動詞の音調については、アクセントによる音調に、文末音調に準じた語末音調が伴っていると考えerことで説明可能であった。

このようなアクセント型の特徴と語末音調の特徴により、感動詞を4つのタイプに類型化したのが表3-15である。これは、当該の感動詞が持つアクセント型の数と、語末音調のバリエーションの有無による類型化である。例えば、表の左上は、アクセント型が1つで、平調以外の特別な語末音調が伴わないタイプ（3.3.3節、3.4.5節では「第一のタイプ」）で、音調について一般的な語の性質に近いタイプである。逆に、表の右下はアクセント型が2つで、様々な語末音調が伴うタイプ（3.3.3節、3.4.5節では「第三のタイプ」）で、2つのアクセント型があるという点では一般的な語からは異質な、また、語末音調が伴うという点から、語よりも文の性質に近いと言えるタイプである。

### 3.5.2 感動詞の音調と意味・機能

本章で取り上げた感動詞の意味・機能は、具体的な用法に即すと非常に多様である。しかし、発話内容や眼前の事態などによって生じる話し手の認識の変化、そして、その結果生じる話し手の態度といった入力情報の処理過程の側面から意味・機能を見ると、4つのタイプに類型化できた。認識の変化の結果生じる話し手の態度を中心に表示する「入力情報の処理結果表示」、話し手の認識の変化自体を中心に表示する「入力情報の処理開始表示」、認識の変化が生じる直前の状態を表示する「入力情報の処理前表示」、そして、前3つのよ

うな入力情報の処理過程にかかわらない、促しや決意などといった「非処理」という4つのタイプである。

その上で、有核・無核のアクセント型、そして、音調の4つのタイプとの対応を見てみると、感動詞の意味・機能と音調に関する特徴をいくつか挙げる事ができる。

まず、2つのアクセント型を持つ感動詞（表 3-15 の「第二・第三のタイプ」に属する感動詞）について、有核と無核の意味・機能の使い分けを見てみると、語末音調が平調の場合は、有核が「入力情報の処理結果表示」、無核が「入力情報の処理開始表示」に関わる意味・機能であった。しかしながら、語末音調が伴うとそのような使い分けはなくなり、すべて前者に関わる意味・機能であった。

そして、音調の4つのタイプとの対応を見てみると、入力情報の処理にかかわらない「非処理」の意味・機能を持つ感動詞は、アクセント型が1つで、平調以外の特別な語末音調が伴わない音調を持つタイプの感動詞のみ（表の左上の「第一のタイプ」）であることがわかる。一方で、入力情報の処理過程にかかわる意味・機能を持つ感動詞は、アクセント型が2つ、あるいは、語末音調も2つ以上ある、多様な音調を持つ感動詞（「第二・第三・第四のタイプ」）であった。先に述べたとおり、2つのアクセント型は入力情報の処理過程に関わる意味・機能の使い分けと関わりがあり、また、語末音調については、「入力情報の処理結果表示」における話し手の様々な態度（肯定的な結果表示、理解不能など）を反映していた。

したがって、これまでの考察から、感動詞の音調、そして意味・機能とのかかわりについて、以下のような結論が導き出せる。まず、感動詞の音調については、一般的な語と同様にアクセント型が1つで、平調以外の特定の語末音調が伴わない感動詞がある一方で、有核・無核の2種類のアクセント型、あるいは、平調を含む複数の語末音調、あるいは、その両方の組み合わせといった、多様な音調を持つ感動詞が多く見られた。そこで、多様な音調を持つ感動詞の意味・機能を観察すると、「入力情報の処理結果表示」などといった入力情報の処理過程に関わる意味・機能を持っていた。一方で、一般的な語と同様に1つのアクセント型で特定の語末音調が伴わない感動詞には、入力情報の処理過程に関わる意味・機能はほとんど見られない。ゆえに、入力情報の処理過程に関わる意味・機能を持つ感動詞は、話し手の様々な態度表示や認識の変化の表示に対応できるように、2つのアクセント型、あるいは、平調を含む複数の語末音調、もしくは両方の組み合わせによる音調のバリエーションが必然的に備わっていなければならない、と結論付けられよう。

### 3.6 おわりに

以上、本章では、日本語感動詞の音調を日本語の韻律の体系にどう位置づけるかを、その音調が伴う感動詞の意味・機能を考慮に入れながら検討した。その結果、感動詞はアクセントによる記述が妥当であるということを示すことができ、その上で、アクセント型が2つ、平調を含む複数の語末音調が伴うといった感動詞ならではの特徴も観察できた。そして、こういった音調の多様性は、入力情報の処理過程に関わる意味・機能との結びつきが強いということも指摘した。

この議論を総論と位置づけ、以下の2つの章(4章と5章)では、各論として、具体的な感動詞の音調についての分析を行う。4章では、「うん系」感動詞の音調の多様性と意味・機能との関わりについて、そして、5章では、意味・機能から一步深め、「あ系」感動詞の音調と対人関係のとらえ方との関わりについてそれぞれ議論を深める。

## 第4章

### 感動詞の音声的特徴と意味・機能—「うん」の分析

#### 4.1 はじめに

##### 4.1.1 なぜ「うん」か？

本章では、感動詞の音声的特徴と、感動詞が本来持つ言語的な意味・機能<sup>1</sup>との対応関係を考察するにあたり、「うん系」の感動詞を中心に分析を行う。

3章において、1音節感動詞①に分類された感動詞の中で音調のバリエーションが最も多かったのは「うん系」の感動詞であった。このように、主に親しい関係において発せられる「うん系」の感動詞は、音調以外にも持続時間や音色といった音声的特徴のバリエーションが多いと考えられる。その根拠の1つとして、「うん系」の感動詞は書きことばでは、「うん」をはじめ、「うーん」「んん」「ん」「ううん」などといった、さまざまなモーラ数での表記が可能であり、このことは持続時間のバリエーションの多さと同時に、音色の微妙な違いを示唆していると言えよう。とはいえ、これらの「うん系」の感動詞が「う」と「ん」の2つの音で構成されることは、特に強調などを意図して発せられる場合を除いては珍しく、通常は1つの音、例えば [m]や[N]といった鼻子音、[ŋ]といった鼻母音で構成されることが多い。

このような音声的特徴のバリエーションの多さの一方で、「うん系」感動詞は、談話において、あいづちや問い返し、肯定的な応答、否定的な応答などといった広範な意味・機能を持って出現している。定延(2002)は、非言語的な「うん」・独話で発せられる「うん」・対話固有の「うん」という3つの大分類の下に17種類のタイプがあるとしている。

そして、これらの意味・機能については、少なくとも書きことばにおいては、「うん」に肯定的な応答、「ううん」に否定的な応答というように、それぞれの表記にある程度対応しており、このように日常的に見られるものについては辞書レベルで対応関係が記述されている。当然ながら会話においても音声的特徴と意味・機能にある程度の対応関係があると見られるが、話しことばにおける音声的な実態と意味・機能の対応関係の詳細な分析や記述は管見の限り見当たらない。

そこで、本章では、上記のような性質を持つ「うん系」の感動詞を総称的に感動詞「う

<sup>1</sup> 本研究では、感動詞が本来持つ、語としての意味、あるいは、談話上の現象としての機能のことを「(言語的な)意味・機能」と呼び、次章で述べる、対人関係にまつわる感動詞の非言語的な機能とは区別することとする。

ん」とまとめ、「うん」がどのような音声的特徴を持ち、どのような意味・機能と結びついているかについて、3章よりも踏み込んだ分析を行う。具体的には、まず、先行研究やテレビドラマの会話資料の採集データに即した「うん」の意味・機能の分類とそこに現れる音声的特徴の観察を行う。そして、その分析を基礎として、会話文読み上げ実験によって得られた音声データの音響分析により、意味・機能と音声的特徴との詳細な対応関係について考察を行う。

ここで、なぜ「うん」が分析対象であるかに触れる。「うん」は冒頭に述べたとおり、音声的特徴と意味・機能のバリエーションが豊富で、他の多くの感動詞と共通する部分が見られる。そして、3章で見てきたように、同じ意味・機能を持つ感動詞が音声的特徴もある程度共有しているということも考えられる。したがって、本章において「うん」を分析対象とし、「うん」の意味・機能と音声的特徴の関係を明らかにすることは、感動詞全体の音声的特徴と意味・機能の対応の様相を明らかにするための大きな手がかりとなり、今後、それぞれの感動詞の音声的特徴と意味・機能を検討する上での仮説となると考えるからである。

#### 4. 1. 2 本章の構成

本章ではまず、「うん」がどのような意味・機能で、どのような音声的実態をもって出現しているかという予想図を描くべく、「うん」の意味・機能と音声的特徴について概観し、対応関係の整理・分類を試みる(4.2節)。整理・分類に際しては、定延(2002)をはじめとする先行研究と、10歳代の登場人物を中心としたドラマから採集した用例を内省の支えとする。

「うん」の意味・機能と音声的特徴に関する予想図を描いた上で、次に、肯定的な結果表示に関わる意味・機能を持つ「うん」の韻律的特徴(4.3節)を、そして、否定的な結果表示に関わる意味・機能を持つ「うん(ううん)」と「いや」の韻律的特徴(4.4節)を、それぞれ会話文読み上げ実験により調査協力者から得られた「うん」または「いや」を含む発話音声により分析する。

しかし、「うん」は広範な意味・機能を持つため、当然ながらこれだけですべての意味・機能についての音声的特徴を検討しつくすことにはならない。しかし、肯定的な結果表示に関わる意味・機能は、ドラマから採集した「うん」全体の半数を超えており、また、「うん」という表記を見れば、音声的実態としてピッチが下降し、肯定や納得といった意味・

機能を持った「うん」を想起しやすいということからも、この種の意味・機能は「うん」を代表するものであると言える。また、否定的な結果表示に関わる意味・機能は、特に「うん」については独特な音調を持っており、「いや」「いえ」「いいえ」といった同様の意味・機能を持つ感動詞との共通性を考える上で、つまり、今後、感動詞全体の音声的特徴と意味・機能の対応関係を考える上で非常に興味深いと言える。したがって、「うん」の音声的特徴と意味・機能の分析の出発点として、この2つの意味・機能を取り上げることには一定の意義があると考えられる。

## 4. 2 「うん」の韻律的特徴の観察—ドラマ音声の分析から

### 4. 2. 1 談話資料について

#### 4. 2. 1. 1 概要

談話資料として、日本テレビで放映されたドラマ『野ブタ。をプロデュース』（2005年11月19日・2005年11月26日の2話分）を用い、「うん」を採集した。このドラマは高校が舞台で、10歳代後半の登場人物が中心である。なお、分析については、10歳代後半に限らず、あらゆる年齢層の登場人物によって発せられた「うん」を対象としている。

#### 4. 2. 1. 2 ドラマの「うん」と自然性

自然談話ではないドラマを分析の対象としたのは、「うん」の意味・機能を分析する上での利便性があるためである。ドラマは参加者や場が固定される討論やトークショーとは違い、会話の場や形式、内容、会話参加者のバリエーションが比較的豊かな上、「うん」の意味・機能を分析する上で重要な発話の意図が視聴者にもわかりやすいことが挙げられる。自然談話においてはあらゆる場面、あらゆる内容の会話を網羅することは難しい。しかも、発話の分析者には、発話の意図が見えにくく、発話者に対するフォローアップインタビューで初めてわかることも多い。そのため、「うん」の意味・機能を探る上で文脈が明示的であるドラマを採用することは、少なくとも本格的な音声的特徴の分析の前段階、仮説を導き出す方法としては有効である。

しかし、ドラマから得られたデータは、自然談話から得られたデータと比べて自然性で落ちることは認めざるを得ない。杉藤（2003）も会話とドラマの違いを「フィラー、繰り返しなどの有無」と「声の高さの変化と、発話速度、ポーズ」と述べている。杉藤によるとドラマにはフィラーがないということであるが、分析対象としたドラマには「うん」が

頻出している。確かに、「うん」はセリフどおりに計画的に発せられることもあるが、むしろ、「うん」をセリフに入れること自体、自然な会話を意識していると言え、ある程度の自然性を持っていると言えよう。また、声の高さの変化や発話速度、ポーズは、確かに「うん」の音声的特徴にも関わる要素ではあるが、意味・機能に大きく関わるほどの違いがドラマと会話の間で起こるとは考えられず、その差は決して大きいものではないと言える。

一方で、熊谷（2003）は、ドラマの日本語を「つくりもの」だとしながらも、「それは日本語会話について日本人が持っている様々なイメージを具現化したものではないか」と述べている。ドラマの「うん」についても、日本人が持っている日本語会話の「うん」の意味・機能や音声的特徴が反映・具現化されていると言える。さらに、郡（2006a）に対人音声の研究手法として挙げられている、場面を設定した対話を演じてもらうなどの方法で発音を求める「シミュレーション法」は、まさに熊谷（2003）が指摘した、イメージの具現化を利用した研究方法であり、ドラマとかなり共通している。

これに関連して、データの代表性についても、ドラマの特性上、偏った属性のデータをもとに分析を進めざるを得ない。しかし、ドラマの日本語が日本語会話についてのイメージの具現であると考え、多くの人が視聴するドラマのデータが周縁的で代表性が低いということは（特別な演出がない限り）稀だと言え、ドラマのデータの代表性は必ずしも低いものではないと言える。

このように、ドラマの「うん」は、データの自然性や代表性という点ではやや信頼性に欠けるものの、分析の利便性、そして、実際の会話に現れる「うん」の音声的特徴や意味・機能のイメージが具現化しているということからも、少なくとも仮説を得るだけの信頼性は保たれていると考える。

#### 4. 2. 1. 3 「うん」の採集数, 文字化

談話資料によって採集できた「うん」は 82 例であった。また、後の会話例における文字化については、状況を理解することも必要であることから、串田・定延・伝（2005）の「録音・録画データの共通転記記号」をもとにした記号（【資料 2】参照）を用い、かな漢字表記とした。なお、「うん」自体の表記については、意味・機能がいろいろであっても、ひとまず分節音としては単一なものとして考え、「うん」という表記で統一し、詳細な音声的特徴は、次節で述べるとおり、文字化とは別に記述することにする。

## 4. 2. 2 「うん」の音声的特徴に関する記述について

「うん」の音声的特徴については、会話例の文字化とは別に、音価と韻律的特徴に関する記述を加えることとする。なお、分析対象の音声データは、MPEG-2方式で録画したドラマから Wave 方式（量子化 16 bit/サンプルレート 44.1kHz）で抽出したもので、分析には、Speech Analyzer Ver.2.7 を用いた。

### 4. 2. 2. 1 音価

会話例に現れる「うん」の音価の判別は音響分析によっても非常に難しい。図 4-1・図 4-2・図 4-3 はそれぞれ[m] [N] [ŋ]の音声波形と、縦線で挟まれた波形部分のスペクトル（北海道出身 30 歳男性）である<sup>2</sup>。いずれも鼻音の特徴として、300Hz 付近を中心に振幅が大きい部分、いわゆる「鼻音フォルマント」が見られる。また、口腔フォルマント、鼻腔フォルマント、鼻腔アンチフォルマントからなるために、振幅の変化が母音より激しくなっている。しかし、3つのうち、鼻母音である[ŋ]は、母音のフォルマント ( $F_1$  と  $F_2$  : 図 4-3 の矢印の部分) が鼻音フォルマントとあまり変わらない振幅で比較的是っきり現れているのに対し、鼻音の[m]の場合は、鼻音フォルマントの低周波域の振幅が他と比べて非常に大きく、それ以上の周波数帯で振幅が小さいという性質がある。

このようなスペクトル上の傾向から、これらの単音間には連続性があり、カテゴリーカルな判別はできないものの、[m]のような鼻音性の強いものか、あるいは、[ŋ]のような母音性の強いものかの区別であれば比較的記述しやすいと言える。会話例の「うん」についても、鼻音性の強いもの ( $n_c$ ) と母音性の強いもの ( $n_v$ ) を区別して表記することとする。

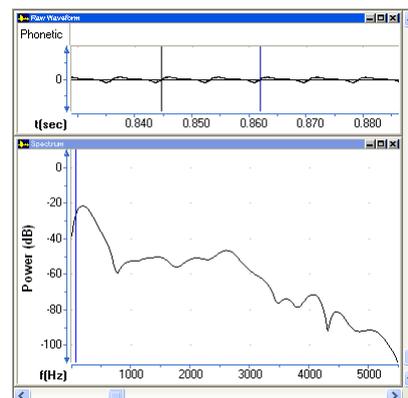


図 4-1 [m]の音声波形, スペクトル

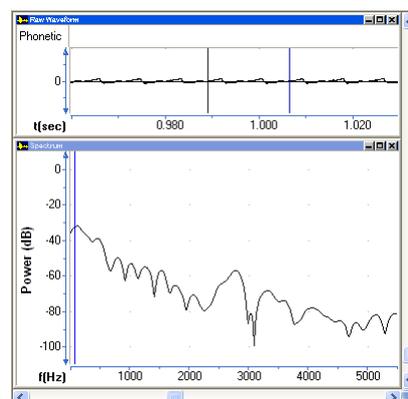


図 4-2 [N]の音声波形, スペクトル

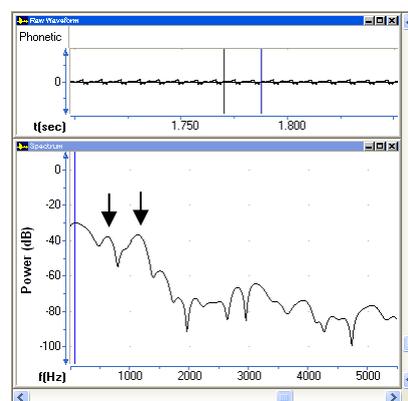


図 4-3 [ŋ]の音声波形, スペクトル

<sup>2</sup> 図 4-1・図 4-2・図 4-3 で対象となっている音声は、ドラマ録画の音声ではなく、別途 Wave 形式（量子化 16 bit/サンプルレート 22.05kHz）で直接録音されたものである。

#### 4. 2. 2. 2 韻律的特徴

音価のほかに、持続時間と  $F_0$  曲線の形状、そして、「うん」区間で顕著な  $F_0$  変動幅（下降幅または上昇幅）を半音単位で記した。図 4-4 は後述の【会話例 1】S03 の発話の一部で

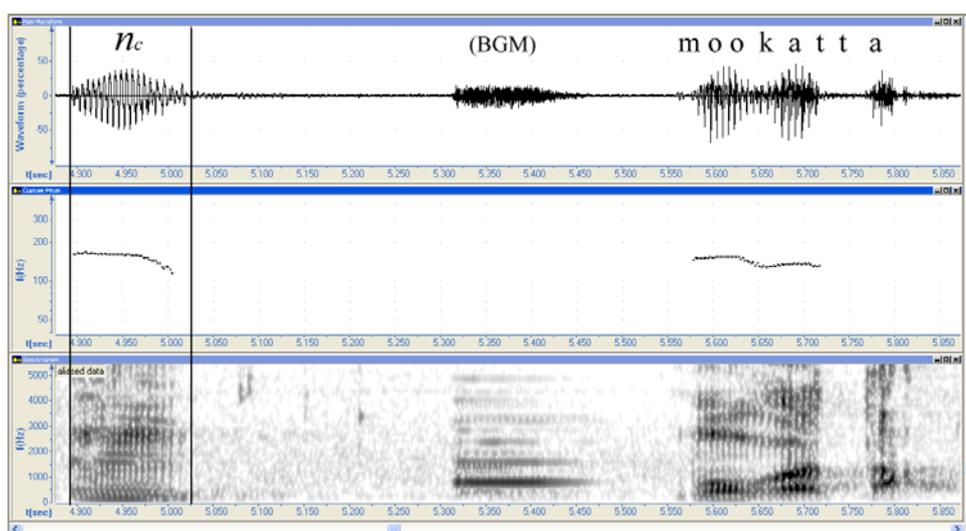


図 4-4 「うん, 儲かった」の音声波形,  $F_0$  曲線, スペクトログラム

表 4-1 会話例の「うん」の音声的特徴(音価・持続時間・ $F_0$  曲線・ $F_0$  変動幅)

会話例	発話番号*	音価	持続時間	$F_0$ 曲線の形状	顕著な $F_0$ 変動幅
会話例 1	S03	$n_c$	119ms	下降	6.43st 下降
	S05	$n_c$	103ms	下降	7.70st 下降
会話例 2	(Q)04	$n_c$	78ms	ほぼ平坦	1.15st 下降
会話例 3	Z03	$n_c$	236ms	下降	5.23st 下降
会話例 4	S01	$n_c$	218ms	上昇→下降(終端部)	5.16st 上昇 4.45st 下降
	S02	$n_c$	168ms	下降	3.95st 下降
会話例 5	S02	$n_c$	227ms	下降	8.06st 下降
	S04	$n_c$	130ms	下降	3.95st 下降
会話例 6	S06	$n_c$	214ms	ほぼ平坦	1.24st 上昇
会話例 7	A04	$n_c$	103ms	上昇	13.07st 上昇
会話例 8	K02-1	$n_v$	259ms	上昇	13.39st 上昇
	K02-2	$n_v$	232ms	上昇	12.39st 上昇
	K02-3	$n_v$	311ms	上昇	14.84st 上昇
会話例 9	X02	$n_c$	258ms	上昇→ほぼ平坦(開始部)→上昇	2.16st 上昇 1.41st 下降 14.01st 上昇
	Y04	$n_c$	283ms	下降→上昇	7.93st 下降 7.02st 上昇
会話例 10	S02	$n_c$	592ms	下降(開始部)→上昇	4.92st 下降 2.42st 上昇
会話例 11	F03	$n_c$	493ms	上昇→ほぼ平坦	3.21st 上昇 0.08st 下降
会話例 12	S01-1	$n_c$	106ms	ほぼ平坦	1.45st 下降
	S01-2	$n_v$	87ms	ほぼ平坦	1.66st 下降

\*同じ発話に複数の「うん」がある場合は、出現する順に発話番号の後ろに-1, -2...と番号をつけて区別した。

ある<sup>3</sup>が、この場合、「うん」の持続時間は、振幅の開始点から収束点までの  $n_c$  区間を計測し、 $F_0$ （基本周波数）変動幅は  $n_c$  区間の  $F_0$  最大値から最小値までの下降幅を半音単位で計測した。

次節以降の会話例に現れる「うん」について音響分析を行い、その結果をまとめたものが表 4-1 である。ここでは、会話例と発話番号、「うん」の音価、持続時間（ミリ秒：ms）、 $F_0$  曲線の形状、そして、顕著な  $F_0$  変動を方向と変動幅（半音：st）について記載した。 $F_0$  曲線の形状が途中で変化しているものは矢印を用いて時系列に沿って変化を記述したが、「開始部」「終端部」と書かれたものは、それぞれ始点・終点から 1/3 付近までの形状であり、矢印のみの場合は、中間付近で形状が変化している<sup>4</sup>。また、「ほぼ平坦」と書かれてあるものは、 $F_0$  変動幅が 2 半音未満の比較的小さいものである。

## 4. 2. 3 分類

### 4. 2. 3. 1 分類の観点

採集データの分類については、まず当該の「うん」の意味・機能を、文脈・用法といった談話面から検討し、同時に音声的特徴も抽出した。次に、分類項目の設定に当たっては、音声的特徴との対応を考え、談話構造を踏まえた分類を避け、意味・機能としての共通性を見出すことを重視した。例えば、相手の意見に賛成している場合に発せられる「うん」を談話構造に基づいて分類すると、発話者が話し手であるか聞き手であるかにより、「あいづち」「応答」という異なる分類となる。しかし、あいづちであれ、応答であれ、相手に対し、肯定的な信号を出しているとみなすことができれば 1 つの分類にできる。また、逆に、「あいづち」とはいっても、堀口（1997）のいうとおり「聞いているという信号」もあれば「否定の信号」もある。つまり、談話構造による分類だけではこのようなあいづちの多様な機能に着目しづらくなる。本研究は意味・機能の多様性を音声の視点から分析しようとするものである。そのため、あいづちのような、話し手か聞き手か、あるいは対話か独話か、といった談話構造は分類基準として考慮に入れていない。

その上で、音声的特徴による「うん」の意味・機能の分類を挙げたものが表 4-2 である。ここでは、3 章と同様に、「うん」が話し手のどのような情報処理過程を表示するかという点を基準として、大きく 4 種類（「入力情報の処理結果表示系」「入力情報の処理開始表示

<sup>3</sup> 図 4-4 中の(BGM)区間の波形は、シーン中に流れるピアノの音であり、音声ではない。

<sup>4</sup> 表 4-1 の会話例 9 の X02 の  $F_0$  曲線の形状は「上昇→ほぼ平坦」が開始部で生じ、残りの 2/3 で上昇している。

系」「入力情報の処理前表示系」「非処理系」)に分類した。この基準での分類は、検討の余地はあるものの、意味・機能と音声的特徴との対応関係を比較的簡潔に記述できるという点で、本研究の目的に沿ったものであると言える。さらに、表 4-2 の右側に挙げた感動詞は、「うん」の意味・機能と音声的特徴に共通性があるもので、「うん」に対する分析は、これらの感動詞の分析にも大きな示唆を与えることとなる。

この意味・機能の分類に基づき、以下では、それぞれの分類における意味・機能と音声的特徴について会話例や音響分析の結果を参照しながら述べることにする。

表 4-2 「うん」の意味・機能の分類と、意味・機能と音声的特徴に共通性がある他の感動詞

「うん」の意味・機能	共通性がある感動詞
A. 入力情報の処理結果表示系	
A-1 情報の入力に対する肯定的な結果表示 応答要求発話に対する肯定的な応答 行為要求発話に対する承諾 受け入れ	はい ええ はい ええ はい ええ ああ おお
A-2 理解不能の情報の入力に対する結果表示	え えー? はい?
A-3 情報の入力に対する否定的な結果表示	いいえ いや いや
A-4 未知の情報の格納に対する結果表示	へえー ほー
B. 入力情報の処理開始表示系 認識の変化	あ
C. 入力情報の処理前表示系 迷い、言いよどみ	ええと えー あのー
D. 非処理系 決意、促し	さあ ほら

#### 4. 2. 3. 2 入力情報の処理結果表示系(A)

これは田窪・金水(1997)の「入出力制御系」におおむね相当するもので、話し手に情報が入力されて、何らかの形で処理されたものが(途中経過ではなく)結果として表示されるタイプである。談話資料では、82例中75例、90%以上の「うん」がこれに相当した。表 4-2 からわかるとおり、処理結果表示系には、その処理結果に応じて4つのサブカテゴリがある。以下では、採集された会話例を用いながら詳しく説明する。

##### A-1 情報の入力に対する肯定的な結果表示

肯定的な結果表示とは、情報入力の際に話し手の知識と照らし合わせて容認可能な情報が入力された際の結果表示である。主に下降のピッチ曲線になることが多いが、ほぼ平坦

の場合や、一旦上昇してから下降することもある。談話資料では 82 例中の半数以上の 53 例が A-1 に相当し、一般的に「うん」と表記すると、下降のピッチとこの意味・機能を想起することも多いことから、肯定的な結果表示は、まさに「うん」を代表する意味・機能であると言える。

肯定的な結果表示の「うん」には具体的な談話上の意味・機能として、3 種類のパターン（応答要求発話に対する肯定的な応答、行為要求発話に対する承諾、受け入れ）が見られた。

< 応答要求発話に対する肯定的な応答 >

真偽疑問文や付加疑問文に対する肯定的な応答として用いられる「うん」である。

【会話例 1】 修二 (S) はまり子 (M) にアルバイトについて聞かれている。

S01 : そうそうそう(.)アルバイト。

M02 : 儲かった？

S03 : うん. (0.5)儲かった. (0.4)あ(.)んっんじゃ今度おごるよ。

M04 :ほんとに:??

S05 : うん。

【会話例 1】の M02 と M04 の応答要求発話を比べると、M02 は S が「儲かった」かどうかを知りたいための発話であるのに対し、M04 は S が肯定することを前提とした応答要求発話、つまり、M が S に「今度おごる」ことを念押しするための発話である。談話資料では、肯定することを前提とした応答要求発話に対する「うん」(17 例)が、実質的に肯定か否定かを尋ねる応答要求発話に対する「うん」(2 例)に比べ多く用いられていた。この 2 種類の「うん」は、応答する側から考えると、肯定的な応答をすることが相手にある程度了解済みで、それほど肯定の意思をはっきり示す必要がない場合の「うん」と、相手に（否定ではなく）肯定の意思をはっきりと示す場合の「うん」である。そのため、話し手の意思の表示に合わせて、「うん」に幾分異なる音声的特徴を持たせている可能性もある。

< 行為要求発話に対する承諾 >

依頼・勧誘・命令など、相手からの発話行為を伴う働きかけに対して承諾する場合に用いられる。談話資料では 8 例見られた。

【会話例 2】 クラスメート P と Q が屋上に小谷信子を呼びに来て、すぐに戻っていく。

P01 : 小谷さーん(1.3)こんなとこにいた.

Q02 : (0.4)キーホルダー欲しいってゆ子が来てるよ

(P)03 : °いこ°

(Q)04 : °うん. °

(P)05 : °いこ°

【会話例 2】では、(P)03 で、(Q)に「いこ (行こう)」と促している。P と Q の間では、「行かない？」ではなく「行こう」という文末形式となっていることから、屋上からすぐ戻るということがある程度 2 人の間で了解されていたと考えられ、「承諾」とはいえ、(Q)04 はもはや、承諾するかどうかの判断はしていないと言ってもいいくらい軽い承諾となっている。このような軽い承諾と、承諾する側に判断が委ねられている場合の「うん」とを比べると、承諾する側が相手にどの程度積極的に意思を表示するかという点で、音声的特徴が異なることも考えられる。

<受け入れ>

談話資料で採集された A-1 の 53 例中残りの 26 例は、応答要求や行為要求に対する応答ではなく、発話内容・状況等を理解した、あるいは発話を単に聞いている、などといった形で発話内容や状況等を受け入れているものであり、これを受け入れの「うん」とまとめることにする。ここでは、①相手の発話内容に同意・納得した場合、②自分の発話の途中や直後で発話内容を追認する場合、③相手の発話を聞いている場合、④相手の考えを受け入れつつも不満な場合の 4 つのタイプを取り上げる。

まず 1 つ目は、相手の発話内容に同意・納得した場合の「うん」であるが、これは相手の発話内容や与えられた状況を好意的に、異論のない形で受け入れたときに用いられる。

【会話例 3】では Y02 の意見に対し Z03 が「うん」を用いている。それに続く「あたしも」からわかるように、Z は Y と同じ意見であることを表明しており、「うん」もそれに沿う意味・機能を持っていると言える。

【会話例 3】放送部の部員がビデオを見た感想を言い合う。X は男性、Y, Z は女性。

X01 : これ:(.)どうかな

Y02 : (0.6)わたしはよかったと思う。

Z03 : うんあたしも。

2 つ目は、自分の発話の途中や直後で発話内容を追認する場合である。【会話例 4】では、S の会話の相手である信子が（もっと明るく人付き合いできるように）クラブ活動を始めるというアイデアを S がいいと認めている際に、発話のはじめではなく、途中で「うん」が現れている。このように、発話の途中や終わりに、自分の発話内容を追認する「うん」が現れることもある。

【会話例 4】 信子がクラブ活動を始めるというアイデアについて修二 (S) が納得する。

S01 : あ……(0.7)クラブ活動ね(0.4)うん. (0.3)あ-(0.5)その手があったか.

S02 : (1.9)いんじゃない. (0.3)うん. (0.8)なんか人間関係とか広がるし.

3 つ目は相手の発話を聞いている場合である。この「うん」は聞き手として発せられることから、堀口 (1997) の、あいづちのうちの「聞いているという信号」に相当する。【会話例 5】では、M が話し手、S が聞き手となっており、M の発話を聞いているときに、聞き手としての S の発話 (S02, S04) に「うん」が現れている。

【会話例 5】 まり子 (M) と修二 (S) が弁当を食べながらおしゃべりしている。

M01 : 最近さ.

S02 : うん.

M03 : 小谷さんとか草野君とかと.

S04 : [うん.]

M05 : [よ] く一緒にいるよね

そして、4 つ目は相手の考えを受け入れつつも同意できず不満な場合である。場合によっては、「うん、でもね…」のように、相手に対する反論の端緒となることもある。この場合の「うん」はほぼ平坦なピッチ曲線となることが多い。

【会話例 6】では、A と S は N が撮影に失敗したビデオを見て笑っている。それを見て、N は自分で撮ったビデオをコンクールへの出品の候補にするのを突然あきらめようとする (N03)。S は突然の N03 の発言に驚き、S04 のように、N に発話の真意を確認するも、ところどころに声門閉鎖が現れ、文も完結せず途切れている。この S04 や、S06 と A07 の冒頭の沈黙からも、N がビデオの出品をあきらめることをすんなりとは認めていないことがわかる。このような状況での S06 は、N の意向を受け入れつつも、すんなりとは認めたくない「うん」であると言えよう。この「うん」の  $F_0$  曲線はほぼ平坦である。

【会話例 6】 信子 (N) が撮った、人の顔だけが映っていないビデオを見ながら修二 (S) と彰 (A) が笑っている。

A01 : [((N のビデオを見て笑う))

S02 : [((N のビデオを見て笑う))

N03 : [((あきらめて))もう-(.)これいい。

S04 : ((N の発言に驚き))(h)え(h)何? h えこれいい-(0.8)何-(0.5)あきらめちゃうの?

N05 : (1.4)うん。

S06 : (1.5)°うん°

A07 : (1.2)°うんじゃ(.)うん°(0.4)((気を取り直して))次行こう次

このように、情報の入力に対する肯定的な結果表示の「うん」のピッチ曲線には全体的に下降の傾向が見られる。しかし、意味・機能をより詳しく検討すると、肯定的な結果を積極的に表示するかどうかで、その下降の度合いが変わる可能性もあると言える。

#### A-2 理解不能の情報の入力に対する結果表示

理解不能の「うん」は、話し手が注意を向けている対象が何かわからない、理解できない状況で用いられる。具体的に談話資料に現れた例 (14 例) には、名前での呼びかけに対する「うん?」や、「大丈夫?」と問いかけられ「うん?何が?」のように、相手の発話意図が理解できない時の「うん」、そして、予期していたものとは異なる状況に遭遇したりした時に現れる「うん」などが見られた。これ以外にも、発話自体が聞き取れない、よくわからないものを発見した際に「うん」が上昇のピッチ曲線で現れる。談話資料では  $F_0$  上昇幅が 1 オクターブ (12 半音) を超える「うん」が見られた。

【会話例 7】 信子 (N) は修二 (S) と彰 (A) を公園へ連れてきて、地面を掘らせる。

N01 : 掘って

S02 : (0.5)はあ?

A03 : (1.6)ワンワン。((おもちゃのスコップで土を掘り返す))

A04 : (7.0)((何かを掘り当てる))うん?(2.5)あ(0.3)何か(1.2)出てきた。

【会話例 7】 で、A は N に言われるがままに公園の地面を掘っていると、スコップで何かを掘り当てた。しかし、その時 A はその対象が何であるかよくわかっていない。

理解不能の「うん」は上昇で実現されるが、例えば、話し手の想定範囲外で、状況が理解できない場合は、単に周りがるさくて発話が聞き取れなかった時よりも急激に上昇し、持続時間が長めになると考えられる。つまり、その状況で通常「こうなるはずだ」という実現の見込みが高ければ高いほど、実現されなければ理解不能に陥った時の意外性は大きいはずであり、その意外性が音声的特徴にも影響を与えと言える。下の作例(1)(2)では、(1)のほうが意外性が大きく、ピッチ曲線がより急激な上昇となりやすい。

(1) (案内図どおりに何度も歩いたが、目的地にたどり着けないとき)

うん ( $n_c$ ) ? おかしいな。

(2) (周りがるさくて、相手の発話が聞き取れなかったとき)

うん ( $n_c$ ) ? なに？

また、非常に高圧的に相手に何かを促す場合にも、理解不能の「うん」が用いられることがある。これは、話し手の要求に沿わない相手の発話や行為について、理解不能であることを意図的に表示することで、話し手自身の要求を強引に押し付けられるという効果があるためである。【会話例 8】では、K01 の説教の後に、理解不能の「うん」を用いることで、金儲けに走り出した生徒 3 人に非常に強い警告を促している。この「うん」は鼻母音で声量も大きい。

【会話例 8】3 人の生徒が、よく売れる手作りのキーホルダーでもっと金儲けする話をしているところに、急に教頭 (K) が入って来る。雰囲気を知った教頭が 3 人に金の怖さを説教する。

K01 : 金には(0.7)裏と表があることを(0.4)ゆ::め:ゆ::め:忘れることなかれ。

K02 : (0.6)((生徒三人それぞれに))うん ? (0.6)うん ? (1.0)うん ? (2.2) (h)うん(h)うん  
(h)うん(h)うん。

### A-3 情報の入力に対する否定的な結果表示

否定的な応答の時にも「うん」(一般的な表記では「ううん」など)が用いられる。応答要求発話に対する応答がほとんどである。談話資料に現れたのは【会話例 9】に現れた 2 例のみである。

【会話例 9】 修二 (S) がクラスメートの女の子 (X,Y) に願いがかなうキーホルダーのニューバージョンを買ったかどうかきいている。

S01 : おねねねね(0.3)ニューバージョン買った？

X02 : (.)うん

S03 : (0.4)ニューバージョン.

Y04 : (0.6)うん

【会話例 9】 では、S の問いかけ (S01 と S03) に対して X と Y が否定的な応答の「うん」を用いている。それぞれの  $F_0$  曲線に共通しているのは、一度ゆるやかに下降してから上昇するというパターンである。下降または上昇が平坦に近くなる場合もある。また、終端に声門閉鎖が伴うこともある。

#### A-4 未知の情報の格納に対する結果表示

これは、富樫 (2002a) の「ふーん」にあたるもので、その本質的機能を「提示された情報がデータベースに格納されたことを示す。あるいはその情報が活性化していないことを示す」としている。つまり、この「ふーん」は話し手の知識になかった情報がそのまま（特に興味・関心を持って取り上げられず）話し手の知識に入った時に発せられる。また、富樫は語用論的な効果として、興味・関心を持って取り上げようとする前の状態である「計算準備的な態度」や、特に興味・関心を持っていない状態である「判断留保的な態度」などと解釈することが可能であると述べている。そのような「ふーん」をここでは未知の情報の格納の「うん」としておく。このタイプの「うん」は、他の「うん」と比べると明らかに持続時間が長く、ピッチ曲線は開始部で下降する場合があるものの、ゆるやかに上昇する。談話資料には 6 例見られた。

【会話例 10】 クラスメート (R) が修二 (S) に、他のクラスメートの高校卒業後の進路のことを話している。修二は興味を持って聞いてはいない。

R01 : 谷はさ(0.6)テニスで大学の推薦受けるみたい.

S02 : (0.5)うん

【会話例 10】 はうわさ話の一部である。R01 からのクラスメートの卒業後の進路についての情報提供に対し、S は未知の情報格納の「うん」を用いて、知らなかった情報を知る

も無関心の態度をとっている。S02 の「うん」の  $F_0$  曲線は開始部で下降し、その後、低い  $F_0$  から徐々に上昇している。

#### 4. 2. 3. 3 入力情報の処理開始表示系(B)

「入力情報の処理開始表示系」とは、今まで注意が及んでいなかった物事に何らかのきっかけで注意が及んだ時点で発せられる「うん」である。注意が及んだこと、つまり、その物事に関する話し手の認識に変化があったこと自体を明示するものである。談話資料には見られなかったが、作例(3)のような発話は容易に想定可能であろう。

(3) (洗濯物を取り込もうとしていたら、シャツにカタツムリがついているのを見つけ)

うん ( $n_c/n_v$ ), カタツムリ.

(3)は洗濯物の中からカタツムリを発見した際に発せられた「うん」であるが、この場合は、カタツムリを不思議に思ったり、怖がったり、親近感を覚えたりするのではなく、単に注意が及んだだけである。この時、持続時間は短めで、ピッチ曲線は平坦で、終端には声門閉鎖が伴うことが多い。

#### 4. 2. 3. 4 入力情報の処理前表示系(C)

前節までは入力情報について何らかの処理が行われているのに対し、入力情報の処理前表示とはそのような処理が期待されいながら、処理が滞ってなかなか開始できない状況を表示するタイプである。持続時間は A-4 と同様、他の「うん」よりも明らかに長く、基本的には平坦なピッチ曲線となる。談話資料では 4 例見られ、具体的な意味・機能のタイプとして「迷い」と「言いよどみ」の 2 つが見られた。

<迷い>

例えば、選択肢があり 1 つに決めかねるときなど、判断を下したり何かを決定しようとする際に用いられるのが迷いの「うん」である。作例(4)は通販カタログをながめて好きな色や大きさなど検討しつつも、注文する商品を決めかねている場面である。

(4) (通販カタログを見ながら) うん ( $n_c/n_v$ ), どれにしようかな.

迷いの「うん」は他の会話参加者がいたりして、その場で決定を迫られている場合と、

そうではない（1人でのんびりカタログを眺めているときなど）場合とでは、ピッチ曲線も幾分異なる。その場で決定を迫られている場合は、平坦の傾向が強いのに対し、決定を迫られていない場合は、ゆるやかに下降するピッチ曲線も出現しやすい。

<言いよどみ>

話し手が既に話すべき内容がある程度決定しているにもかかわらず、どういう表現を使うべきか、また、読み方が難しくてどう読むべきか、など発話の段階で処理が滞ることがある。これを言いよどみの「うん」としておく。この場合は、他の会話参加者がいて、何らかの出力（発話など）を迫られていることが多い。

【会話例 11】 彰の父（F）は彰（A）に会社を継がせようとしていたが、それを撤回した場面。

F01 : お前の好きにしていっ hhh

A02 : (0.3)えー?(2.0)なんで.

F03 : (1.8)うん:::なんでって:::(2.7)ちっ(0.4)これ見てみる. ((咳払い))

【会話例 11】の F は A が会社を継がなくていいということを決意しており、そう決意した理由もあるはずである。ただ、それをこの時どうやって A に伝えるかという過程で処理が滞っていると考えられる。

この入力情報の処理前表示は、音声的特徴の点から見ると、「うん」の中では持続時間が長めのものが多い。また、話し手の出力処理が他から要請されているものか、そうでないものか、という点も音声的特徴では重要になると考えられる。

#### 4. 2. 3. 5 非処理系(D)

非処理系とは、情報の処理に関する表示をするのではなく、例えば、話し手自らが意志を決したり、自らの意志で相手に何らかの行動を促したりするものである。「決意」「促し」の 2 タイプが見られた。

<決意>

決意の「うん」は話し手が何か行動を起こそうとするときに発せられるものである。行動を起こすかどうかを検討した結果、行動するに値すると判断し、それを実行しようとする

るときに「うん」が現れる。したがって、検討した結果に納得するという点で、受け入れの「うん」と連続した性質を持っていると言える。

(5) (レポートを書き終えて) うん ( $n_c$ ), じゃ, これで出そう.

(5)では、書き終えたレポートがこれでいいかどうか検討していて、結局、これで提出すると決断した際に「うん」が現れている。音声の特徴は、基本的には平坦のピッチ曲線で終端に声門閉鎖が伴う。持続時間は短めである。

<促し>

促しの「うん」は、「うん」と同時にあごや手などを使って指し示しながら、幾分高圧的に相手に何らかの行動を促すというものである。談話資料には促しの例が3例見られた。

【会話例 12】のように状況から判断できれば、促しの「うん」のみで、促す行動が具体的に言語化されなくてもいい。これも基本的には平坦のピッチ曲線で、持続時間は短めである。S01の2つ目の「うん」は鼻母音に近い音価である。

【会話例 12】玄関のチャイムが鳴り、修二 (S) はあごで弟 (O) を玄関に行かせるよう促す。

S01 : ((ピンポン))うん. (1.4)うん.

O02 : (0.6)あ...も....

#### 4. 2. 4 考察

##### 4. 2. 4. 1 談話資料から見た「うん」の意味・機能

ここでは、表 4-2 のそれぞれの分類が、より実態に近いレベルで具体的にどのような意味・機能を有しているかを、「うん」の採集例が多かったものを中心に、採集例をもとにまとめる。まず、A-1 の「情報の入力に対する肯定的な結果表示」は採集例の半数以上を占めるほどであり、「うん」の代表的な意味・機能であるが、「応答要求発話に対する肯定的な応答」では、主に肯定的な応答をすることを前提とした応答としての「うん」の使用が顕著に見られた。また「受け入れ」では同意・納得、追認、発話を聞いている、受け入れつつも同意できない、といった場合に「うん」が現れた。

そして、A-2 の「理解不能の情報入力に対する結果表示」には、呼びかけに対するもの、

相手の発話意図が理解できないときのもの、予期していたものとは異なる状況に遭遇したときの用法がある一方、相手に高圧的に促す用法も見られた。

採集したデータはおおむね表 4-2 の分類に沿うものであったが、上述のように、採集例が多いものを中心に、それぞれの意味・機能についていくつかのタイプが見られた。このようなタイプは、音声的特徴に影響を与える要素である可能性もあり、今後検討していかなければならないものである。

#### 4. 2. 4. 2 「うん」の意味・機能と音声的特徴の対応

4.2.3 で述べた「うん」の意味・機能 (A~D) 別に予想されるおおよその音声的特徴 (音調・持続時間) をまとめたものが表 4-3 である。音調はそれぞれの「うん」の基本的なピッチ曲線の特徴から「下降調」「平坦調」「上昇調」と複合型の「下降上昇調」に区分し、持続時間については、採集した「うん」が 100~300ms 前後のものと、それを越えて長いもの (500~600ms 前後) とに、意味・機能の面からもおおよそ区分できたことから、ひとまずこの 2 区分 (「短」と「長」) を設けることにした。

表 4-3 「うん」の意味・機能 (A~D) と予想される音声的特徴

音調 持続時間	下降調	平坦調	上昇調
短	A-1	B* D*	A-2(急激な上昇調)
	下降上昇調…A-3*		
長		C	A-4(ゆるやかな上昇調)

\* 終端に声門閉鎖が伴うことがあるもの

入力情報の情報処理結果表示系 (A) は、意味・機能別に音声的特徴もそれぞれ異なるものが対応している。A-1 はほぼ平坦なものも例外的に見られたものの、おおむね下降のピッチ曲線が現れることから、下降調であると言える。A-2 は会話例で見られたとおり、1 オクターブ以上の  $F_0$  上昇幅であり、急激な上昇調である。A-3 は下降上昇調で終端に声門閉鎖が伴うことがある。A-4 は持続時間が顕著に長く、音調は A-2 と比べると  $F_0$  上昇幅の小さい、ゆるやかな上昇調である。入力情報の処理開始表示系 (B) は平坦調で終端に声門閉鎖が伴うことがある。入力情報の処理前表示系 (C) は A-4 と同様に持続時間が長く平坦調である。そして、非処理系 (D) は平坦調で終端に声門閉鎖を伴うことがある。

また、音調や持続時間以外にも音価の特性として、A-2 や D で特に相手に強く促す場合には、母音性の強い「うん」が出現しやすい傾向が見られた。

#### 4. 2. 5 まとめ

以上、4.2節ではドラマの談話資料をもとに、「うん」の意味・機能および音声的特徴を観察してきた。採集データの「うん」はおおむね表 4-2 の意味・機能の分類に沿っており、また、それぞれに特徴的な音声的特徴を持っていることから、結果として、音声的な側面からの「うん」の意味・機能の分類がある程度明確になったと言える。この結果を踏まえ、表 4-2 で示した意味・機能と音声的特徴で共通性が予想される他の感動詞についても実証的な研究を行っていかねばならない。これにより、「うん」で得られた知見が他の感動詞にも適用できるかどうか、感動詞全体として共通性があるのか、あるいは、感動詞によっては独自性が見られるのか、という点を検討することができよう。

また、採集データから、「うん」の分類の中にもさまざまな意味・機能のタイプがあり、その微妙な違いが音声的特徴を左右するという可能性も指摘できた。例えば A-1 の「うん」は下降調であるものの、その中には、肯定的な応答、承諾、受け入れなど、いくつかのタイプがあった。それぞれのタイプの違いが、急激に下降したり、平坦に近くなったりするといった音声的特徴に影響を与えることも十分考えられる。

次の 4.3 節では、こういった意味・機能の微妙な違いと音声的特徴の関係をより明らかにするべく、A-1 の意味・機能で用いられる「うん」について、それを含む発話を調査協力者に読み上げてもらい、その音声を音響的に分析することにする。

さらに、4.4 節では、「うん」の意味・機能と音声的特徴の対応関係が、他の感動詞へもあてはまるかという観点から、否定の結果表示という同様の意味・機能を持つ「いや」と音声的な共通点があるかどうか観察・分析していくことにする。

### 4. 3 「うん」と肯定的な結果表示

#### 4. 3. 1 問題の所在—受け入れの度合いと「うん」の韻律的特徴

4.2 節で見たように、「うん」は、話し手の情報処理過程の表示のしかたから、大きく「入力情報の処理結果表示系 (A)」「入力情報の処理開始表示系 (B)」「入力情報の処理前表示系 (C)」「非処理系 (D)」という 4 つの意味・機能のグループを持ち、そのうち A のグループは処理結果に応じて 4 つのサブカテゴリに分けられた。その中で「情報の入力に対する肯定的な結果表示」(A-1) は、4.2 節での採集データでは最も採集数が多かった。そして、用法を含めて詳しく観察してみると、「応答要求発話に対する肯定的な応答」「行為要

求発話に対する承諾」「受け入れ」という 3 つのタイプがあり、さらに、受け入れには 4 つの下位タイプが見られ、単なる「肯定的な結果表示」といえども、非常に多彩であった。そこで、ここでは、この受け入れの「うん」の多彩な意味・機能と音声的特徴に着目することにする。

これまで見たとおり、受け入れの「うん」は、相手の発話を受けて発するだけでなく、自分の発話の途中でも、相手の発話の途中でも発することができ、形式的にも多彩である。また、相手の発話内容に同意・納得する、自分の発話の途中や直後で発話内容を追認する、相手の発話を聞いている、相手の考えを受け入れつつも不満である、というように、受け入れの度合いという面でも多彩である。しかし、受け入れの度合いを、「同意」という概念を軸に見てみると、受け入れの度合いの異なる 2 つのタイプの「うん」が見られる。

1 つは、相手の意見を聞いて、理解し、そして同意する場合の「うん」である。4.2 節でも挙げた【会話例 3】では Z03 は Y の意見に同意する発話であり、その発話に「うん」が出現している。

【会話例 3】放送部の部員がビデオを見た感想を言い合う。X は男性、Y, Z は女性。

X01 : これ:(.)どうかな

Y02 : (0.6)わたしはよかったと思う。

Z03 : うんあたしも。

もう 1 つは、相手の意見を聞いて、理解しつつも、同意はしない場合の「うん」である。

【会話例 13】は 10 歳代の若者が集まり、ナンパの是非について討論している場面である。Y (男性) はナンパをして当たって砕けたほうがいい、と主張するのに対し、W (女性) はそれを受け入れつつも、「恥ずかしい」という同意しがたい点を指摘している。この W の発話に先立ち、Y01 と Y03 を聞いた時点の W05 で「うん」が現れる。このように、「うん」がむしろ反論の端緒となることもある。

【会話例 13】<sup>5</sup>ナンパをして当たって砕けたほうがいいのかどうかの議論

Y01 : 怖がって何もしないよりは(0.7)全然なんか(0.5)壁に-ぶち当たって

(W)02 : うん。

<sup>5</sup> 【会話例 13】は NHK 教育テレビ「真剣 10 代しゃべり場」2005 年 11 月 25 日放送分の一部を文字化したものである。W05 の「うん」の音価は鼻子音性が強い  $n_c$ 、持続時間は 301ms、 $F_0$  曲線は 1.45st の下降であった。

Y03 : (0.5)なんかこう(0.4)砕けたほうが(0.7)いんじゃないっていうの俺は言いたい.

(X)04 : うん-

W05 : [うん=

(Z)06 : [うん

W07 : なんか(0.5)うちは(.)その(.)すごいタイプの人がそこに(.)いて(.)こま街角とか(0.7)でも(0.8)はずかしんだ(0.5)話しかけんのがすごいだからその(0.4)当たって砕けるってのもわかるんだけど

これら2つのタイプの「うん」は、受け入れの「うん」とみなせるとはいえ、「同意」「非同意」という点で対照的であり、受け入れの度合いが異なっていると言えよう。それでは、これらの「うん」の韻律的特徴はいったいどうなっているのであろうか。仮説として2つの側面が考えられる。

1つは、どちらの「うん」も相手の発話を聞き、理解しているという点では共通していることから、韻律的にもある程度共通していて、同意か非同意かの解釈は、発話内容の解釈によればいい、という側面である。もう1つは、会話の中でこれらの発話を聞いて、実時間で同意あるいは非同意と解釈できるためには、「うん」の韻律的特徴にも、その差がある程度反映されていたほうが会話参加者にとって都合がいい、という側面である。

そこで、これら2つの「うん」の韻律的特徴について、どの程度共通していて、また、どの程度相違しているか、ということを検討するために、これらの「うん」を含む発話を調査協力者に読んでもらう会話文読み上げ実験を行い、それによって得られた「うん」を音響的に分析することとした。

#### 4. 3. 2 実験

##### 4. 3. 2. 1 概要

前節で挙げた、受け入れの2種類の「うん」（以下、同意の「うん」、非同意の「うん」とする）が調査協力者の発話に含まれる会話文をそれぞれ作成し、実験実施者（筆者）と調査協力者がそれぞれの役割になり、実際に話しているように読み合った。調査協力者が読み上げた発話はヘッドセットのコンデンサ・マイクを用い、量子化16bitのPCM方式（サンプリングレート:44.1kHz）で録音し、「うん」を含む発話については音響分析ソフト Speech

Analyzer Ver. 2.7 で観察・分析を行った。

#### 4.3.2.2 調査協力者

調査協力者は東京都内および川崎市・横浜市出身（中学校までの期間で最も長く住んでいた地）の20歳代・30歳代・40歳代の男性5名・女性5名の計10名にご協力いただいた。調査協力者の性別・年齢・出身地・職業については【資料3】のとおりである。

#### 4.3.2.3 実験手順

まず、調査協力者には、【資料4】にある実験の手順、そして、会話文とその説明文を読んでもらい、会話の状況等を理解してもらった。「うん」が入るところは、「うん」とは書かず空欄にし、別途実験指示文にさまざまな表記の例を挙げて空欄に入れる「うん」の音声を説明し、発話に適切な「うん」の発音をなるべく表記に左右されずに考えてもらうようにした。その後、一度、実験実施者と調査協力者で読み合わせの練習をし、その後の3回の読み合わせをデータとして採用した。

#### 4.3.2.4 実験に用いた会話文

調査協力者に読んでもらった会話文は筆者が作成したものである。【資料4】の会話文のように、会話の参加者AとBは親しい友達という設定で、学校の課題で「引きこもり」の対策について考えることになり、意見交換している場面である。「引きこもり」の対策として「出会い系で積極的に友達みつけたほうがマシ」というAの意見に対して、調査協力者が読むBは同意または非同意の「うん」を含む発話で自らの立場を表明する、というものである。同意の「うん」を含む発話は「うん、かなりマシかも」で、非同意の「うん」を含む発話は「うん、でもなんか出会い系ってさ、危なそうだし、もっといろんな方法あるんじゃないかなって思うんだけど」である。

#### 4.3.2.5 分析の対象とした韻律的特徴

3章と4.2節の分析から、「うん」の意味・機能の分類に、持続時間と $F_0$ 曲線の形状が大きく関わっていることが判明した。そこで、今回の実験においては、持続時間と $F_0$ 曲線の形状、そして、 $F_0$ 変化幅を分析の対象とした。持続時間については音声波形とスペクトログラムを手がかりに、「うん」と後続発話の間の無音区間の開始部まで、無音区間がない場

合は後続発話の「かなり」の[k], 「でも」の[d]の開始部までを「うん」区間として測定した。これ以外にも、「うん」の  $F_0$  の高さや、分節的要素としての「うん」の音色、例えば鼻子音であるか、鼻母音であるか、といった要素も重要であり、今後分析に取り組みなければならない要素ではあるが、今回は分析の対象とはしていない。

### 4. 3. 3 分析

#### 4. 3. 3. 1 持続時間

図 4-5 は、10 名の調査協力者の 3 回の読み上げから得られた同意・非同意の「うん」の持続時間の平均をまとめたものである。同じ調査協力者で同意・非同意の持続時間を比べてみると、同意よりも非同意のほうが持続時間の長い傾向があることがわかる。同意・非同意を固定因子、調査協力者を変量因子として二元配置の分散分析を行ったところ、固定因子の水準間に有意な差があった ( $F(1,9)=16.862$   $p=.003$ )。

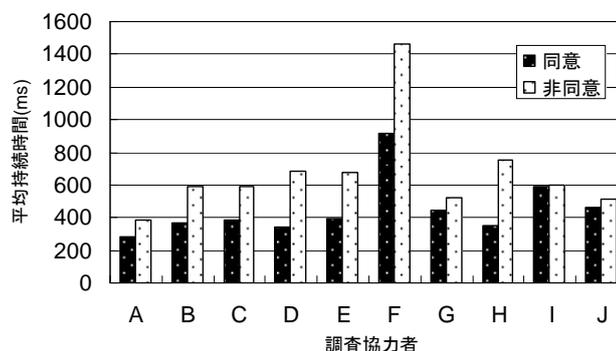


図 4-5 10 名の調査協力者から得られた同意・非同意の「うん」の持続時間の平均

このことから、まず、同意と非同意では「うん」の持続時間が異なり、非同意のほうが持続時間の長い「うん」が現れやすいということが言える。

#### 4. 3. 3. 2 $F_0$ 曲線の形状・変動幅

次に、それぞれの「うん」の  $F_0$  曲線の形状を観察した。同意の「うん」の場合は開始部から 100ms 辺りまで緩やかに上昇する場合もあったが、開始部が高く終了部が低い、下降傾向を示した<sup>6</sup>。また下降→ほぼ平坦→下降という曲線も見

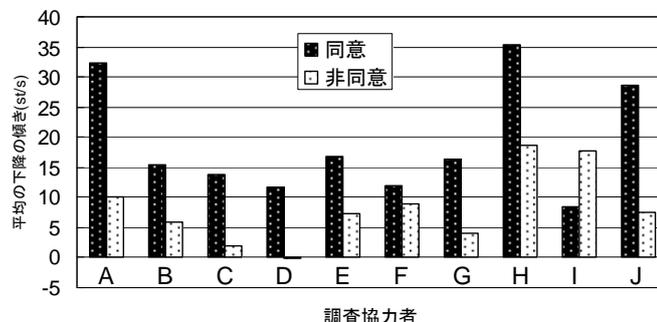


図 4-6 10 名の調査協力者から得られた同意・非同意の「うん」の  $F_0$  下降の傾きの平均

<sup>6</sup> 下降後終了部で  $F_0$  の上昇も見られたが、これは後続発話の「かなり」のアクセントに影響を受けたものであると考えられる。

られた<sup>7</sup>.

一方、非同意の「うん」は、おおむね同意の「うん」と同じように、開始部が高く終了部が低い下降傾向が見られたが、調査協力者によっては、1.5 半音程度の  $F_0$  変動幅で終了部まで緩やかに上昇し続け、終了部で下降する、「うん」全体として上昇部が長く、下降傾向が見られないものもあった。

その上で、同意・非同意の「うん」の開始部  $F_0$  最大値と終了部  $F_0$  最小値の差、および、その区間の持続時間より、1 秒当たりの  $F_0$  下降幅 ( $F_0$  下降の傾き) を求めた<sup>8</sup>。図 4-6 は 10 名の調査協力者の 3 回の読み上げから得られた  $F_0$  下降の傾きの平均を示したものである。これについても、同じ調査協力者で同意・非同意の  $F_0$  下降の傾きを比べてみると、調査協力者 I を除いた、10 名中 9 名について、同意の傾きのほうが大きいという傾向が見られた。 $F_0$  下降の傾きについても、同意・不同意を固定因子、調査協力者を変量因子として、二元配置の分散分析を行った結果、固定因子の水準間に有意な差が見られた ( $F(1,9)=14.649$   $p=.004$ )。

#### 4. 3. 3. 3 分析のまとめ

「うん」の持続時間および  $F_0$  曲線の形状・下降の傾きについて、前節で行った分析から言える受け入れの「うん」の韻律的特徴は以下の 3 点にまとめられる。

1. 非同意の「うん」は同意の「うん」より持続時間が長い。
2. 同意・非同意とも  $F_0$  曲線はおおむね下降の傾向が見られる。
3. 同意の「うん」は非同意の「うん」より  $F_0$  下降の傾きが大きい。

では、これらの韻律的特徴は、受け入れの「うん」、同意・非同意の「うん」においてどのようなことを意味しているのであろうか。次節で詳しく考えることにする。

#### 4. 3. 4 結果と考察

##### 4. 3. 4. 1 受け入れの「うん」と $F_0$ の下降

同意・非同意とも  $F_0$  曲線はおおむね下降傾向が見られた。 $F_0$  の下降は、受け入れの「うん」以外にも、応答要求発話に対する肯定的な応答の「うん」や、行為要求発話に対する

<sup>7</sup> 部分的に  $F_0$  下降が見られない場合も、下降区間が最も長く、開始部が高く、終了部が低ければ下降傾向と判断した。

<sup>8</sup> ただし、上昇傾向が見られたものについては、開始部の  $F_0$  最小値と終了部の  $F_0$  最大値の差から求め、 $F_0$  下降の傾きを負の数とした。

承諾の「うん」にも見られる特徴であるため、表 4-2 の「情報の入力に対する肯定的な結果表示」(A-1) の共通の特徴であると言えよう。

#### 4. 3. 4. 2 同意・非同意の「うん」と持続時間—非同意の際の配慮と持続時間

「うん」の持続時間については同意・非同意の間で差があり、非同意の「うん」のほうが長いという結果となった。会話分析の観点から考えると、非同意の「うん」を含む発話は、先行する発話の期待に反する発話であり、Pomerantz (1984) では、相手の評価に対する自分の評価として同意が好ましい場合 (agreement preferred) における不同意 (disagreements) と述べられている。Pomerantz (1984) によると、不同意では、沈黙や確認要求や繰り返しといった、種々の遅れ (delay) が見られるという。また、このような「選好されない応答形式 (dispreferred responses)」について、橋内 (1999) では、相手の体面を傷つけないようにするために、①応答までに時間を要し、言い遅れ (delay) や誤ったスタートや言い淀み (filler) があり、②種々の和らげる表現 (mitigators) を用いるため、長めの応答になり、③独特な韻律的特徴や外見的特徴が出現する、といった特徴を持っていると述べられている。

これを踏まえ、日本語の感動詞について具体的に考えてみよう。例えば、即興で行うスピーチで、次に話す内容や適切なことばを考えたりするときに現れる「ええと」や「あのう」などに見られるように、話し手の情報の処理に時間がかかると、一般的に、感動詞の持続時間も長くなる傾向がある<sup>9</sup>。それでは、持続時間が比較的長い非同意の「うん」の話し手が、情報の処理に時間をかけている場合、なぜ情報の処理に時間がかかるのであろうか。非同意の「うん」の話し手は、この場合、親しい友達である相手の意見と自分の意見が異なることを表明しながらも、互いの対人関係を維持しなければならないというジレンマに陥る。話し手はそのジレンマを克服すべく、持続時間の長い「うん」によって、考慮し苦しむことを相手に示すことで、自分の意見が相手と異なるものであっても、一定の配慮の上で発せられていると相手に解釈してもらえよう意図しているのである。したがって、相手との対人関係の維持を前提に考えると、持続時間については、非同意の「うん」のほうが、特別な配慮の必要がない同意の「うん」に比べ長いということが言えるのではないだろうか。

<sup>9</sup> 山根 (2002) の「話し手の情報処理能力を表出する機能」には、話し手が情報処理の時間を稼ぐために、フィラーを連続させる、5 拍以上の長いフィラーを使うといった特徴が見られる。

このように、非同意の「うん」の持続時間が長くなることについては、異なる意見を表明しながらも、相手との関係を維持し、相手への配慮を示すための戦略と説明でき、会話分析において観察される現象とも一致した。

#### 4.3.4.3 同意・非同意の「うん」と $F_0$ 下降の傾き—肯定的な要素と $F_0$ 下降

今回の分析では同意の「うん」の  $F_0$  下降の傾きが、非同意に比べて大きいという結果が出た。上で触れた「情報の入力に対する肯定的な結果表示」の  $F_0$  の下降傾向という全体的な特徴を踏まえると、「うん」の持つ肯定的な要素は  $F_0$  の下降に関与すると仮定できる。受け入れの「うん」についても、話し手が相手の発話内容を聞いて理解するという側面から肯定的な要素が備わっていると言える。その上で、同意の「うん」は、発話内容を聞いて理解し、さらに、その発話内容に同意するため、受け入れの度合いが強い。つまり、肯定的な要素が強いと言え、 $F_0$  下降の傾きもより大きくなったと考えられる。一方、非同意の「うん」は、発話内容を聞いて理解する程度で、発話内容に対し同意はしないため、受け入れの度合いは弱い。つまり、肯定的な要素が弱いと言え、そのため、 $F_0$  下降の傾きより小さく、また場合によっては下降が実現していなかったと考えられる。

#### 4.3.5 まとめ

相手の発話を聞いて理解する際の受け入れの「うん」は、受け入れの度合いや形式の面から非常に多彩であるが、受け入れの度合いが「うん」の持続時間や  $F_0$  変動、特に  $F_0$  下降の傾きといった韻律的特徴にある程度反映されていることが、同意・非同意の「うん」に関する会話文読み上げ実験の分析によって明らかになった。そして、その要因と考えられる「非同意の際の相手への配慮」と「肯定的な要素の強さ」についても指摘できた。

しかしながら、特に持続時間については、調査協力者間の個人差が大きかった。今後は、聴取実験により、これらの音声のうちで最も「同意らしい」、「非同意らしい」ものを抽出し、その音声的特徴を検討していかなければならないであろう。

また、4.3.4 で触れた「考慮中」や「肯定的な要素」は、今後、全体的な「うん」の意味・機能を考える上でも重要な概念であり、他の意味・機能についての「うん」の分析を進める上でさらに検討していかなければならない。

さらに、今回の分析では扱わなかった「うん」の音色や、「うん」の  $F_0$  の高さについても今後検討する余地がある。

## 4. 4 「うん」と否定的な結果表示

### 4. 4. 1 問題の所在

前節では、受け入れの「うん」について、同意・非同意という受け入れの度合いや、相手への配慮といった要素が「うん」の音声的特徴、特に持続時間と  $F_0$  の下降に影響していることを述べた。本節では、否定的な応答で用いられる「うん(ううん)」の音声的特徴について、まずそれがどのような音声的特徴であるか、そして、同様の意味・機能を持つ「いや」とは音声的な共通点があるかどうかについて、前節と同様に会話文読み上げ実験により得られたデータをもとに述べ、意味・機能が共通する感動詞が果たして、音声的特徴においても共通しているか、ということを考えてい。

#### 4. 4. 1. 1 否定の感動詞とは？

まず、否定という意味・機能について考える。話し手が否定の感動詞を用いて、何に対して否定するのかについて富樫(2006)は、「情報の提示行為<sup>10</sup>」と「情報そのもの」に対して否定することができるとし、「いや」「いえ」「いいえ」では、それぞれの否定できる対象、つまり使用範囲が異なっている、と述べている。

##### (6) (富樫 2006:31)

(異端審問風の場面)

- A 太陽は地球の周りを回っています。
- B いえ/いや、地球が太陽の周りを回っているのです。

##### (7) (富樫 2006:30)

(重要な打ち合わせの最中に突然 A が)

- A お昼は何食べようか。
- B ??いえ/いや、今は関係ないでしょ、その話は。

<sup>10</sup> 富樫の「情報の提示行為」に対する否定は、田窪・金水(1997)の「あいまいな否定」や山根(2003)の「ぼかしの「いや」」のような、相手の応答要求に対して、行為の否定と言うよりはむしろ、話し手が応答をひとまず回避・拒否すると捉えたほうが自然だと思われる。下の例では親(A)が子(B)を叱り、子から謝罪を要求しているのに対して、子は言い訳をして謝罪を回避している。

- A 道路で遊んじゃいけないって言ってるでしょ。
- B いや、だって、ユキちゃんが…。

富樫は(6)の B のような情報そのものを否定する場合とは異なり、(7)の B のような情報を提示する行為に対しての否定的な応答では「いや」が用いられ、「いえ」は用いられにくいと述べている。「いや」は「情報そのものおよび情報提示行為に対して否定することができる」(2006:32)として、3つのうちで最も使用範囲が広いとされている。また、「いや」については、「いやあ、今日は暑いね」といった場合に見られる「感動の「イヤ」」(奥津 1989)、「情動的感動用法」(森山 1996)、「通常の予測を上回っている」(田窪・金水 1997)のような否定応答を超えた機能も存在している。

一方、「ううん」については、定延(2002)が「否定応答の「ううん」とは、他者の発話(典型的には問いかけ)に対して否定的に回答する際に用いられると述べ、他者の問いかけに対して、あるいは、情報提供に対して用いることができるとしている。これらは、どちらも富樫(2006)の枠組みでは、「情報そのもの」に対する否定と考えることができ、(7)のような「情報の提示行為」に対する否定には用いられにくい。

#### 4. 4. 1. 2 否定の感動詞の音調

「ううん」の音調については、4.2 節の表 4-3 によると「情報の入力に対する否定的な結果表示」の「うん」の音調は下降上昇調であり、バリエーションとして、下降または上昇が平坦に近くなることや、終端に声門閉鎖を伴うことがあるとしている。他には、定延(2002)が3通りのイントネーションを指摘している。第1は、下降した後、急激に高く上昇する、V字型のイントネーションで、軽く「違うよ」と言うような、やや素っ気ない態度の場合に発せられる。第2は、上昇して下降する、山型のイントネーションで、「とんでもない」という態度の場合に発せられる。そして第3は、低い音で始まり、上昇して下降、再び上昇するN字型の音調で、最も一般的であるということである。

いずれも、ピッチ変動が複数の段階に及んでいることを指摘している点では納得できるものの、最もピッチ変動が激しい「N字型の音調」が「最も一般的」という考えには疑問を抱かざるを得ず、逆に平坦な音調がまったく提示されていないことから、実証的に検証する余地は十分ある。

また、否定応答表現の音調について、富樫(2006:43)では、「非上昇調のイントネーション」と「上昇調のイントネーション」が見られ、上昇調は否定の意味合いに加えて、相手への問い返しのニュアンスが含まれているとしている。しかし、上昇調を「問い返し」といった疑問の機能と結びつけていいのかという点で疑問が残る。少なくとも文末音調で

は、女性の発話に現れる「行かないわ」の「わ」が上昇調で発せられることからあきらかなように、「上昇調＝疑問」とは必ずしも結びつかない<sup>11</sup>。そのため、感動詞の音調についても慎重に検討する必要がある。

#### 4. 4. 1. 3 問題提起

以上の先行研究から、以下のような問題提起ができよう。「ううん」の音調はピッチ変動が激しく、N字型のようなピッチ変動が一般的か、また、「ううん」「いや」の上昇調が問い返しのニュアンスを含むのか。いずれにしても具体的なデータに基づいた分析ではない。そこで、両者の  $F_0$  変動を観察し、韻律的な枠組みを踏まえ、両者の音調を検討する。そして、音調が明らかになった上で、否定的な結果表示の意味・機能を持つ感動詞間に音声的な共通点があるのか考察する。

なお、音調以外にも、「ううん」「いや」の持続時間やそれに続く無音区間の有無と持続時間、さらには、後続発話との音の高さの相対的な関係など、観察すべき音声的特徴はいくつか挙げられる。しかし、これまでの議論から、意味・機能には音調との関わりが大きいがことが指摘されており、ひとまずは音調を議論の中心に据えることにする。

#### 4. 4. 2 実験

##### 4. 4. 2. 1 概要

前節で触れた、富樫（2006）の情報そのものを否定する機能で用いられる「ううん」と「いや」が調査協力者の発話に含まれる会話文をそれぞれ作成し、実験実施者（筆者）と調査協力者がそれぞれの役割になり、文脈に合うように、実際に話しているように読み合った。調査協力者が読み上げた発話はヘッドセットのコンデンサ・マイクを用い、量子化16bitのPCM方式（サンプリングレート：44.1kHz）で録音し、「うん」を含む発話については音響分析ソフト Praat ver.4.4.26 で観察・分析を行った。

##### 4. 4. 2. 2 調査協力者

調査協力者は東京都内および川崎市・横浜市出身（中学校までの期間で最も長く住んでいた地）の20歳代・30歳代・40歳代の男性5名・女性5名の計10名である。調査協力者は4.3の実験と同じであり、性別、年齢、出身地、職業は【資料3】のとおりである。

<sup>11</sup> 郡（2003）の「疑問型上昇調」は、疑問文だけに現れるということを前提としていない。

#### 4. 4. 2. 3 実験手順

まず、調査協力者には、【資料5】【資料6】のような会話文とその説明文を読んでもらい、会話の状況等を理解してもらった。会話文には「ううん」「いや」と書かず空欄にし、先に実験指示文でそれぞれの発音（長さや高さなど）を考えてもらうように指示した。その際、「ううん」については、「ん」の音として提示し、「うん系」感動詞の表記の例を挙げて、さまざまな可能性を考えてもらった。適当な感動詞の発音を考えたら、一度、実験実施者と調査協力者で読む練習をし、その後の3回の読み上げをデータとして採用した。

#### 4. 4. 2. 4 実験に用いた会話文

調査協力者に読んでもらった会話文は筆者が作成したものである。会話の参加者AとBは親しい友達という設定で、【資料5】【資料6】のように携帯電話でAが撮った写真を見ながらBは自分の携帯電話にそれを送って欲しいと頼んでいる。そこで、Aは会社が異なると写真が送れない可能性があると思い、Bの利用している会社がエーユーかどうか聞く。ドコモの携帯電話を持っているBは、「ううん」または「いや」を用いて応答する。それぞれ後続発話として「ドコモ」が続く。

#### 4. 4. 2. 5 分析対象

調査協力者10名の3回の読み上げから得られた「ううん」「いや」それぞれ30例について、 $F_0$ （基本周波数）曲線の形状について音響的に分析を行った。また、 $F_0$ の変動幅は半音（st）単位で記録した。

#### 4. 4. 3 分析

$F_0$  曲線の形状全体を見ると、「ううん」と「いや」とでは異なるタイプが見られた。

##### 4. 4. 3. 1 「ううん」の $F_0$ 曲線

「ううん」の  $F_0$  曲線は、開始部でわずかに上昇し、その後大きく下降する山型の  $F_0$  曲線となる共通点があるが、

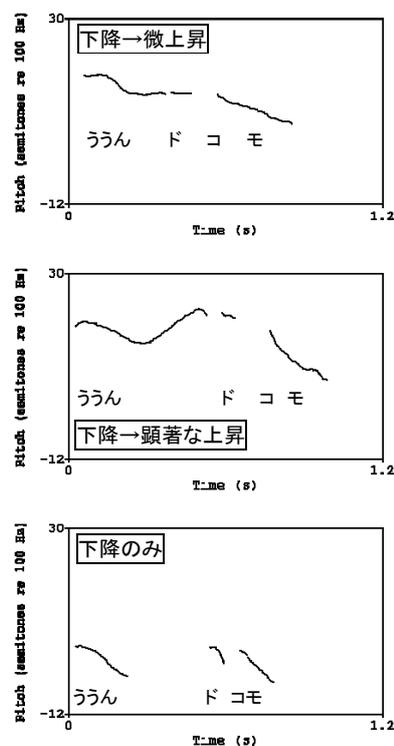


図 4-7 「ううん」の  $F_0$  曲線 3 タイプ

下降した後の  $F_0$  曲線の特徴によって図 4-7 のように大きく 3 つのタイプが見られた。1 つ目は下降後にはほぼ平坦、あるいは小さい変動幅で上昇するタイプ（下降→微上昇タイプ）、2 つ目は、顕著に上昇するタイプ（下降→顕著な上昇タイプ）、そして、もう 1 つは下降のみのタイプであった。

#### 下降→微上昇

このタイプは、前半部に下降 ( $F_0$  下降幅が 3.36st~11.65st) があり、その後、ほぼ平坦か、わずかな上昇があり、終了部で上昇幅とだいたい同じ変動幅で下降するものである。後半部は  $F_0$  上昇幅が小さく (0.17st~1.97st)、かつ、前半部の下降しきったところと終了部の  $F_0$  の差がおおむね±1 半音以内に収まっているのが特徴である。このタイプは 30 例中 12 例、5 名の調査協力者に見られた。

#### 下降→顕著な上昇

このタイプは、前半部に下降 ( $F_0$  下降幅が 4.68st~17.30st)、後半部に顕著な上昇 ( $F_0$  上昇幅が 3.10st~15.98st) が見られ、V 字のような  $F_0$  曲線となるものである。30 例中 14 例、5 名の調査協力者に見られた。

#### 下降のみ

このタイプは 30 例中 4 例、2 名の調査協力者にのみ現れた。下降幅は 3.80st~7.58st であった。

### 4. 4. 3. 2 「いや」の $F_0$ 曲線

「いや」の  $F_0$  曲線も図 4-8 のように大きく 2 つのタイプが見られた。1 つは 30 例中 21 例、7 名の調査協力者に見られた、 $F_0$  変動幅の比較的小さい上昇が見られる微上昇タイプである。/i/から/ja/にかけての変動を見ると、/i/が無声化していた 3 例を除き、残りの 18 例はすべて 0.39st~4.01st の比較的小さい上昇が見られた。特に 18 例中 13 例は 2 半音未満のごく小さい上昇であった。また、上昇後、18 例中 17 例において、わずかな下降 (0.12st~4.16st) が生じている。そのうち 13 例が 2 半音未満の下降である。

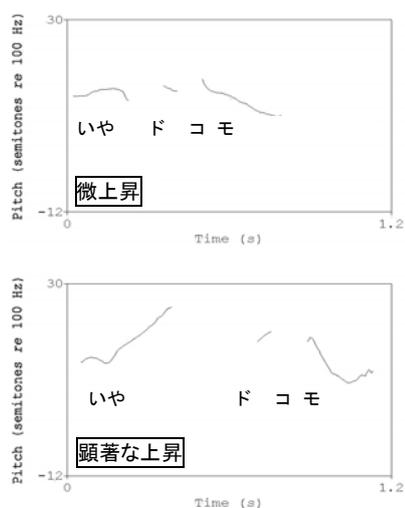


図 4-8 「いや」の  $F_0$  曲線 2 タイプ

一方で、 $F_0$  上昇幅が 6.33st~17.14st の顕著な上昇タイプが 30 例中 9 例、3 名の調査協力

者に見られた。  $F_0$  の上昇は開始部からではなく、少し後から、おおむね/ja/区間が始まる辺りから上昇している。

#### 4. 4. 4 結果と考察

##### 4. 4. 4. 1 「うん」の音調

前節で分析したとおり、「うん」は、すべてのデータに  $F_0$  下降が見られ、その後  $F_0$  の微上昇、あるいは、 $F_0$  上昇が伴うものが大半であった。先行研究にあった N 字型の  $F_0$  変動は本実験では見られなかった。

この  $F_0$  変動の要因を、アクセント・イントネーションを意識した音調の側面から考える。まず、後半部に見られた  $F_0$  変動を文末の音調の枠組み（郡 2003）で説明すると、 $F_0$  の微上昇タイプは、上昇幅が小さい強調型上昇調、一方、 $F_0$  の顕著な上昇タイプは疑問型上昇調、さらに下降のみの場合は顕著な高低変化のない平調であると言える。

この場合、共通して見られる前半部の  $F_0$  下降はアクセントによる下降と見るのが自然である。そう考えると、肯定や否定といった機能は、感動詞「うん」の語末の音調の違いに還元できる。つまり、平調は肯定的な結果表示に、強調型上昇調・疑問型上昇調は否定の応答に用いられるということである。なお、「うん」と 3 文字で表記されるのは、音の高さの変化が、下降→微上昇、あるいは下降→顕著な上昇と 2 段階に及ぶためである。日本語共通語アクセントでは、通常モーラ内で音の高さが変化しないため、文末の助詞など、語としては 1 モーラであっても、下降調を意識すれば、「おいしいねえ」と長音を添加して表記することが普通である。これと同じ現象が「うん」の表記にも当てはまるのである。

##### 4. 4. 4. 2 「いや」の音調

「いや」については、 $F_0$  微上昇のタイプと  $F_0$  が顕著に上昇するタイプが見られた。4.4.3.2 で見たとおり、変動幅の大小はあるものの、/i/から/ja/にかけての区間で  $F_0$  上昇傾向が見られた。これは、「いや」の平板型（あるいは尾高型<sup>12</sup>）アクセントの語頭の上昇と解釈するのが自然であろう。それをもとに  $F_0$  曲線の 2 つのパターンを前節同様に文末音調の枠組みで説明すると、微上昇のタイプは、語頭の上昇後のわずかな下降は発話に生じる自然下降

<sup>12</sup> 感動詞をアクセント体系に当てはめる場合、平板型と尾高型の判断、つまり有核か無核かという判断については、感動詞の独立性の高さから判断が付きにくい。この点については今後の課題としたい。

であり、顕著な高低変化のない平調であるということになる<sup>13</sup>。一方、顕著な上昇タイプは疑問型上昇調であると言える。

「いや」の場合は、平調と疑問型上昇調（と強調型上昇調）とで肯定・否定といった機能が大きく左右されることはない。また、たとえ顕著な下降調であっても、「うん」のように肯定になるわけではなく、否定のニュアンスも残る（相手にお礼を言われて謙遜する「いや」に多いか）。そのため、語末の音調によって否定の機能が決定される「うん」と比べ、「いや」は語自体に否定の機能が備わっていると考えられ、語末の音調に否定の機能を決定する要素はない。一方で、4.4.1.1で触れた「いやあ、今日は暑いね」といった、否定とはやや異なる用法で語末に顕著な下降調が現れることも多い。したがって、「いや」の語末音調は、「いや」の否定の機能をどの程度前景化するかを調節する側面があると言える。

#### 4. 4. 4. 3 「うん」「いや」の疑問型上昇調

「うん」と「いや」に現れた疑問型上昇調であるが、実験では発話の後続に「ドコモ」という平叙文が続いていて、感動詞部分のみで問いかけをすることが不自然であることから、疑問や問いかけとは関係がないと言える。それでは、この疑問型上昇調は、同じ否定の機能で現れる「うん」の強調型上昇調、「いや」の平調・強調型上昇調とは何か異なる効果があるのであろうか。

Yuasa (1999) は、Crystal (1969) らのピッチ幅と感情に関する分析結果から、広いピッチ幅は強い感情表現として理解されたり利用されたりし、逆に狭いピッチ幅はこのような感情表現のなさとして伝えられている、とまとめている。

これを「うん」「いや」にあてはめると、語末の疑問上昇調は上昇幅が大きいことから、効果として何らかの感情表現・意図を強めていることになり、ここでは少なくとも否定を強める効果があると考えられる。より詳しい効果については今後の課題としたい。

#### 4. 4. 5 まとめ

ここでは「うん」と「いや」の音調について、アクセントと文末の音調の枠組みを用いて説明し、否定の機能との関係について分析した。

まず、実験によって採集したデータの分析から、アクセントについて検討したところ、

---

<sup>13</sup> 平調のような自然下降が生じないタイプが強調型上昇調であり、これも平調・疑問型上昇調と並び否定の機能として現れても自然であると考えられるが、今回の実験では顕著に見られなかった。

「うん」は頭高型、「いや」は平板型アクセントであった。次に、否定の機能の場合に典型的に取りうる語末の音調について、「うん」は強調型上昇調と疑問型上昇調、「いや」は平調・強調型上昇調・疑問型上昇調であることがわかった。

「うん」は、肯定的な結果表示に見られる「うん」と同じアクセントを持つ同一の語とみなすことができ、語末音調のバリエーションによって肯定・否定のように、全く異なる機能として用いられる。一方「いや」は、語自体に否定の機能が備わっていて、語末の音調によって肯定の機能に変わるようなことはないが、どの程度否定の機能を前景化させるか調節していると言える。このような結果から、否定の機能と音調の関係においては、「うん」の語末の音調は、「いや」と比べ、否定の機能であることを判断するための重要な役割を担っていると言える。

さらに、「うん」「いや」双方に現れた疑問型上昇調については、少なくとも否定を強める効果があると考えられるが、詳しい分析については今後の課題としたい。

また、「うん」「いや」の音調以外にも、後続する無音区間の有無について、「いや」の場合に顕著に見られるなど、両者の間には観察すべき音声的特徴がいくつか挙げられる。

「いいえ」に対しても、音調はもちろん、他の音声的特徴も視野に入れながら、否定の機能と感動詞の音声的特徴の関係を今後、より明らかにできればと考えている。

#### 4.5 おわりに

以上、本章ではドラマの談話資料の観察と会話文読み上げ実験を通して、「うん」の音声的特徴、特に音調と意味・機能の関係について考察した。まず、4.2節では第一段階として、ドラマの談話資料に現れる「うん」の意味・機能と音調を観察し、7種類に分類された意味・機能に（持続時間の長短を含め）6種類の音調で対応しているという予想図を得た。また、1つの分類の中にもさまざまな意味・機能のタイプがあり、例えば「入力情報に対する肯定的な結果表示」(A-1)は、肯定的な応答や承諾、受け入れというタイプがあり、受け入れにはさらに様々な下位タイプが見られた。A-1については下降調の音調を共通して持つとはいえ、急激な下降であったり平坦に近くなったりすることもあり、こういった意味・機能のタイプの違いが音声的特徴に反映している可能性も指摘した。この指摘を踏まえ、4.3節では、A-1の受け入れの「うん」のうち、同意の「うん」と非同意の「うん」の韻律的特徴を、会話文読み上げ実験により得られた音声データから分析した。その結果、同意・非同意の「うん」には持続時間と $F_0$ の下降の傾きについて有意な差が見られること

がわかり、この要因として「非同意の際の相手への配慮」と「肯定的な要素の強さ」を指摘した。さらに、4.4節では、意味・機能が共通する感動詞で音声的特徴に共通点があるかどうかを検討するために、否定の応答で用いられる「うん(ううん)」と「いや」の音調を、やはり会話文読み上げ実験により得られた音声データから分析した。その結果、語末音調に共通して、問いかけとは異なる特有の疑問型上昇調が現れたものの、アクセントの枠組みで考えると、互いに異なるアクセント型となり、意味・機能が共通するからといって、必ずしも音調が共通するとは言えないことが明らかになった。

この章の議論を通じ、感動詞の音声的特徴、特に持続時間や音調が意味・機能に密接に関わっているということ、ドラマの談話資料の観察、および、会話文読み上げ実験を通して示唆できた。ただし、当然ながらこれは「うん」についてのみ言えることであり、他の感動詞についても音声的特徴と意味・機能の関係があるかどうかは、これからの実証的な研究を進めた上で検討しなければならない。そもそも、「うん」という、口を閉じた状態でも開いた状態でも得られる単純で原始的な、言語音として成り立つか否かの音であるからこそ、何らかの意味・機能の伝達のために、音調や持続時間といった他の音声的特徴が充実しているにすぎない、とも考えられる。

それでもなお、本章における考察は、感動詞の意味・機能と音声的特徴を結びつけるための基礎として、今後の研究に資するものであると考える。今後は、音調や持続時間以外の音声的特徴も含めつつ、「うん」の他の意味・機能における分析を行った上で、「うん」以外の感動詞についての意味・機能と音声的特徴の関係について実証的に分析を行いたい。そして、「意味・機能—音声的特徴」という関係が感動詞によってどのように異なるかを検討していきたい。

#### 【引用談話資料】

ドラマ『野ブタ。をプロデュース』日本テレビ（木皿泉脚本、白岩玄原作）

2005年11月19日放送分（会話例1,2,5,7,8,9,10,11,12）

2005年11月26日放送分（会話例3,4,6）

『真剣10代しゃべり場』NHK

2005年11月25日放送分（会話例13）

## 第5章

### 感動詞の音声的特徴と対人関係―「あ」の分析

#### 5.1 はじめに

2章でも触れたとおり、感動詞の音声的特徴を変化させる要因を考える場合、意味・機能、そして感情については多くの先行研究で指摘されているが、その他の非言語的な要因についてはあまり議論されていないようである。特に、会話参加者間の対人関係については、管見の限り、橋彌・小林（1998）に、社会的出会い場面における「あ」と「お」という間投詞の使い分けが、出会う2者の社会的関係や様々な文脈によってなされている、という考察がある程度で、対人関係と感動詞の音声的特徴の関係については、その関わりは指摘されながらも、未知の部分が非常に多いと言える。

そこで本章では、(1)のような、他の会話参加者の発話に対する応答発話に伴う、「あ系」の感動詞に着目していくことにする。

- (1) A: 先生、きょうノートパソコン持ってきてなかった？  
B: あ、持ってきてたよ。

(1)のBの応答発話に「あ」<sup>1</sup>が伴っているが、「あ」は3章で見たとおり、音調のバリエーションが多く、それに対応する意味・機能もバラエティに富んでいる。しかし、AとBの対人関係が「あ」の音調や持続時間といった音声的特徴にどういった影響を与えるのかということも、感動詞の音声的特徴を考える上で不可欠な側面である。感動詞の音声的特徴は会話参加者間の対人関係によってどのように変わるのだろうか。

本章では、まず、「あ」と会話参加者間の対人関係について問題を提起をし、対人関係を反映した会話文を読んでもらう実験の概要と、それによって得られた「あ」の音響分析の結果について、須藤（2002）の要点をまとめつつ簡潔に述べる。次に、その分析結果をもとに、対人関係と「あ」の音声的特徴との関係をより精密に分析することを目的として聴取実験を行い、その結果の分析・考察を行うこととする。

なお、対人関係が感動詞の音声的特徴の選択に関わっているという議論には、「あ」単独ではなく、感動詞全体として議論する必要もあると考えられるが、対人関係は、例えば、

<sup>1</sup> 以下、アの母音で成り立つ感動詞を「あ系」感動詞、もしくは「あ」と総称することにする。

肯定の応答での「はい」「うん」の選択といった、感動詞の使用自体にも大きく影響するため、他の感動詞については個別に議論する必要がある。したがって、本章では、ひとまず「あ」の議論にとどめ、他の感動詞について検討する際の手がかりとしたい。

## 5.2 問題提起

(2)(3)の会話は、筆者（S）がかけた電話会話の一部である。

(2)<sup>2</sup> （クラブの後輩宅へ電話 T:後輩の母親 S:筆者）

01S: あのーTTTKKK さんいらっしゃいますで [しょうか。

02T: [アッちょっといま出てるんですけど:

03S: アッそうですか:.

04T: はい.

(3) （学部時代からの友人の携帯電話へ電話 H:友人 S:筆者）

01S: あのね [:

02H: [うん.

03S: うんと:(.)××さんから返事がなくてね(.)こまってんねん.

04H: (1.2)あらららら(.)ぜんぜん?

05S: うん.

06H: アーそう.

07S: うん.

08H: 電話番号変わってないんやけどね:.

09S: アーそう [なんだ.

10H: [でん] (.)うんうんうんうんまた(.)それで日にち決まった?

(2)の T と S はお互い会ったことがない関係であるのに対し、(3)の H と S は学部時代から知り合っておよそ 4 年になる友人で、会えばよく話をしたり、ときどき電話で長く話した

---

<sup>2</sup> (2)(3)での文字化については、【資料 2】の記号を用いている。また、「あ」の表記については筆者の知覚による判断で、音声的特徴をある程度反映させたカタカナ表記を用いている。アッは長さが比較的短く、しかもその後には声門閉鎖などによる無音区間があり、ピッチ下降がない「あ」、アーは長さが比較的長く、ピッチ下降がない「あ」である。

りするような関係である。(2)は、Sがクラブの後輩に連絡を取ろうとしたが、後輩が不在ということがわかった場面、また、(3)はHとSの同期の学生の送別会の出欠確認が全員とれていないとSがHに報告する場面である。

ここでまず注目すべきは、発話のはじめに感動詞「あ」が伴っている(2)の02Tと03S、(3)の06Hと09Sの発話である。これらの発話は、相手の先行発話の内容を話し手が何らかの形で処理し、その結果として発せられた発話であり、話し手の発見・思い出しなどによる、相手の先行発話と無関係に発せられたものではない。このことは、(2)の02T以外の「あ」には、ソウ形コメント(土屋1997,1999)が後続し、相手の発話を理解した、聞き入れたといった「受け入れ」となっていることからわかる。

このように、(2)の03S、(3)の06H、09Sに伴う「あ」は、共通する性質を持つ先行・後続発話のもとで出現していると言える。それにもかかわらず、(2)と(3)の「あ」は持続時間が異なっている。(2)の03Sは47msで非常に短い、(3)の06Hは209ms、09Sは278msであり、(2)の03Sの「あ」の4倍以上の持続時間であった。

前章までは、感動詞の持つ意味・機能が音声的特徴にどう影響を与えるかを観察してきたが、ここでは、前後の文脈もほぼ同じで、意味・機能としても大きな違いはないと思われる「あ」の音声的特徴(持続時間)が大きく異なっているのである。この持続時間の違いはいったい何に由来するものなのであろうか。

(2)と(3)の対人関係に着目すると、(2)はTとSがお互い会ったことがない関係であり、(3)はHとSが友人であるという違いがある。そのため、文末表現も(2)は丁寧体であるのに対し、(3)は普通体となっており、スタイルの違いが見られる。このことから、「あ」の持続時間の違いも対人関係によるスタイルの違いの一種と見ることはできるのではないだろうか。そこで、本章では、対人関係により、このような感動詞の音声的特徴の違いが生じると仮定し、それを検証するために、会話文読み上げ実験、および、聴取実験を行った。

### 5.3 会話文読み上げ実験

#### 5.3.1 実験の概要

感動詞「あ」が、対人関係により音声的特徴が異なることを観察するために、調査協力者と実験実施者の二人が、場面や対人関係が設定された会話文をその設定にしたがって読み合い、調査協力者の発話に現れる「あ」を録音し、音響分析を行った。

まず、会話文は発話の種類と対人関係が変数となるように筆者が作成した(用いた会話

文については【資料7】を参照)。まず、「あ」が伴う発話の種類は2種類あり、1つは先行発話で第三者である先生がノートパソコンを持ってきたかどうかを尋ねられ、その出来事を確認し応答する「出来事を確認し応答する発話」(1-1~1-4)と、もう1つは先行発話で面会する日を尋ねられ、それに対し、任意の日で構わないということを応答する「意思を決定し応答する発話」(2-1~2-4)である。

対人関係については、「親疎」と「上下」の2種類の変数を用いることにした。これらは、菊地(1997)の「待遇表現の使用に関わる要素」のうち、「社会的ファクター」に含まれるものの2要素である<sup>3</sup>。このうち「上下」については、「相手がクラブの先輩(またはOB)」の場合(相手が上)と「クラブの同学年(同じ年齢)同士」(相手と同等)という2つの変数を、また、「親疎」については、面識があるかどうかを基準に「初対面」(疎)と「クラブ活動をしている親しい同士」(親)という2つの変数を設定した。

したがって、発話の種類の変数と対人関係の「上下」「親疎」それぞれ2変数を反映させた会話文は全部で8つとなる。各会話文は【資料7】にあるように1-1~1-4、2-1~2-4と番号をつけている。対人関係についてはすべて調査協力者の役割から見て、1-1と2-1が「相手と同等」で「親」、1-2と2-2が「相手が上」で「親」、1-3と2-3が「相手が上」で「疎」、1-4と2-4が「相手と同等」で「疎」としている。各会話文はすべて調査協力者の発話部分に「あ」が含まれているが、調査協力者に示した会話文の「あ」の部分はあえて空欄とし、調査協力者が会話参加者間の対人関係や状況などを勘案して、文字に惑わされずに最も適当な音声的特徴を伴った「あ」が発話できるようにした。

手順については、まず、調査協力者に会話文とその説明を読んでもらい、場面や自分の役割、相手との関係を理解してもらった。次に、一度実験実施者(筆者)と読みあわせをし、その後3回を分析対象のデータとして採用した。調査協力者は東京都および神奈川県出身の日本語母語話者6名で、20歳代5名(うち男性2名、女性3名)、30歳代女性1名である。

### 5.3.2 実験の結果

それぞれの会話文から得られた調査協力者の「あ」について、音響分析により持続時間

<sup>3</sup> 菊地(1997)の「社会的ファクター」のうちの「人間関係」に挙げられている4要素(上下の関係、立場の関係、親疎の関係、内/外の関係)を参考にしている。菊地の「立場の関係」の大部分は、南(1979)の「立場的上下関係」と解釈することも可能で、本研究でも広い意味での上下関係と解釈している。また、「内/外の関係」は主に、会話参加者と話題に登場する人物との「内/外の関係」が問題になることから、ここでは考慮に入れていない。

とピッチ下降幅を計測した結果を対人関係別に図 5-1～図 5-4 に示す。ここでは 2 種類の発話のタイプ別の結果をまとめて示している。

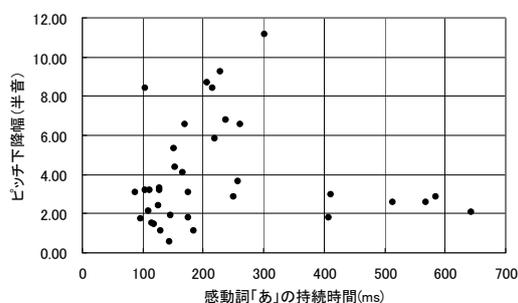


図 5-1 「あ」の持続時間とピッチ下降幅  
(1-1, 2-1; 相手と同等・親)

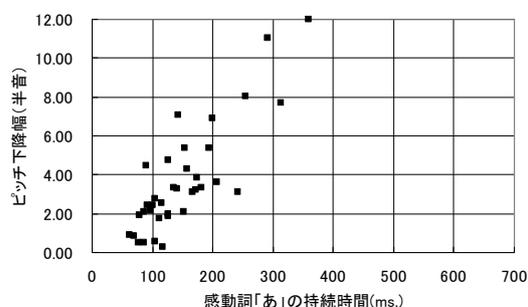


図 5-2 「あ」の持続時間とピッチ下降幅  
(1-2, 2-2; 相手が上・親)

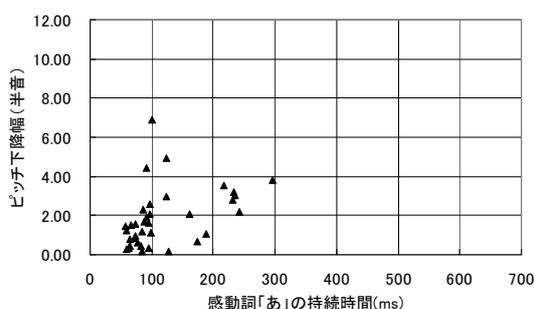


図 5-3 「あ」の持続時間とピッチ下降幅  
(1-3, 2-3; 相手が上・疎)

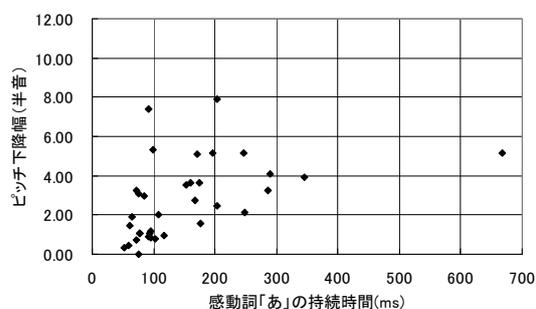


図 5-4 「あ」の持続時間とピッチ下降幅  
(1-4, 2-4; 相手と同等・疎)

上の 4 つのグラフの中で最も原点の近くに標本が集まっているものは図 5-3 のグラフ、つまり、相手が上で疎である場合である。持続時間が 100ms 以下でピッチ下降幅が 2 半音以下の「あ」がいくつあるかを見てみると、図 5-1 では 1 つ、図 5-2 では 5 つ、図 5-4 では 12 であるのに対し、図 5-3 では 19 にのぼり、半数を超えている。このことから、相手が上で疎の関係にある場合の「あ」は持続時間が短く、ピッチ下降幅が小さくなる傾向が最も強いと言える。

次に、「親疎」「上下」別に見てみる。まず、「親疎」について、図 5-1・図 5-2 と図 5-3・図 5-4 を比べてみると、図 5-1・図 5-2 は持続時間が 100ms 以下にはあまり分布が見られないのに対し、図 5-3・図 5-4 では多く見られ、おおむね 100ms が分布の境界となっている。そこで、持続時間 100ms 以下、ピッチ下降幅 2 半音以下の「あ」の数を見ると、疎の場合（図 5-3・図 5-4）の「あ」が 31、親の場合（図 5-1・図 5-2）が 6 で、圧倒的に疎の場合に

多いことがわかる。このことから、疎の場合のほうが、親の場合よりも持続時間が短く、ピッチ下降幅が小さい「あ」が出現しやすいということがわかる。一方、「上下」について、同様の持続時間・ピッチ下降幅の範囲で「あ」の数を見ると、相手と同等の場合が 13、相手が上の場合が 24 であり、相手が上の場合のほうが相手と同等の場合よりも持続時間が短く、ピッチ下降幅が小さい「あ」が出現しやすいことがわかる。

また、分布の特徴として、図 5-1 のみグラフの右下にも分布が見られる。つまり、相手と同等で親の場合、持続時間が 400~650ms でピッチ下降幅が 2~4 半音程度の「あ」も出現しているのである。

### 5.3.3 まとめ

以上の会話文読み上げ実験の結果を、以下の 4 点にまとめる。

- ① 親疎関係については、「疎」の場合のほうが、「親」の場合と比べ、持続時間が短く、ピッチ下降幅が小さい「あ」が現れる傾向がある。
- ② 上下関係については、「相手が上」の場合のほうが、「相手と同等」の場合と比べ、持続時間が短く、ピッチ下降幅が小さい「あ」が現れる傾向がある。
- ③ 「親」で「相手と同等」の場合に持続時間が 400ms~650ms と極端に長いものの、ピッチ下降幅が 2~4 半音程度の比較的下降幅が小さい「あ」も現れている。
- ④ 親疎関係について「あ」の持続時間を見ると、100ms 前後で大きく分布が分かれる。つまり、「疎」の場合は 100ms 以下、「親」の場合は 100ms 以上にデータが多く分布するということが言える。

①~④の結果から、特に、親疎関係について「あ」の音声的特徴を見ると、その特徴が単純ではないことがわかる。そこで次に、「あ」の音声的特徴の選択と対人関係との対応をいっそう明確にするために、「あ」の音声的特徴を人工的に変化させた合成音声を作成し、そこからどのような「会話参加者間の対人関係」が想定されうるか探るという聴取実験を行った。聴取実験により、対人関係と「あ」の音声的特徴との関係をより精密に分析することを目的とした。

## 5.4 聴取実験

### 5.4.1 概要

まず、調査協力者に、以下のような対話を想定してもらった。この対話は、5.3の「会話文読み上げ実験」の1-1~1-4の会話文の場面がもとになっている。

学校生活でのAとBとの対話で、Aが、（その場にはいないCが）ノートパソコンを持って来たかどうかを相手Bに尋ねられて、その応答としてAが「あ、持って来てました」という発話で答えた。

この対話の「あ、持って来てました」の部分について、「あ」の部分の $F_0$ （基本周波数）の動き、「あ」の持続時間、「持って」の「て」の $F_0$ の高さの3つの要素について値を変えて刺激音を作り、調査協力者に聞かせた<sup>4</sup>。調査協力者にはそれぞれの刺激音を判断基準に、対話の中でAから見た相手Bとの関係がどのような対人関係（上下関係・親疎関係）であるかを、それぞれ二者択一（相手が上・相手と同じ／親しい・初対面）でどちらか一方を必ず回答してもらった。対人関係を「上下関係」「親疎関係」と設定するに当たっては、5.3と同様に、菊地（1997）の待遇表現選択の要素のうち、対人関係に関わる要素を参考にした。

この聴取実験の結果を、「会話文読み上げ実験」の結果に基づいて予想すると、まず、 $F_0$ の変化の小さい刺激音、そして、持続時間の短い刺激音に対しては、親疎関係については（「疎」の関係に当たる）「初対面」、上下関係については「相手が上」という回答が予想される。また、 $F_0$ の変化の大きい刺激音、そして、持続時間の長い刺激音に対しては、親疎関係については「親しい」、上下関係については「相手と同じ」という回答が予想される。

#### 5.4.2 刺激音

「会話文読み上げ実験」で得られた発話の一つ（東京出身女性によるもの）をもとに、音声研究用ソフトPraat4.0を用いて、前節で述べた3点を変数として合成音を作成した。

##### ①「あ」の $F_0$

会話文読み上げ実験で得られたサンプルには、 $F_0$ が下降するものか平板なものしかなかった。そのため、合成音作成に当たっては、 $F_0$ が下降するものを3種類、 $F_0$ が平板なもの

<sup>4</sup> 実験に先立ち、その他の要素、たとえば、「あっ持って来てました」のような場合の、「あ」の後にある声門閉鎖などによる無音部分の有無や、感動詞「あ」に隣接する「持って」の「も」の $F_0$ なども変数として加えた予備実験を行ったが、「対人関係」によって比較的大きな差が出ると予測された上記の3要素を変数として本実験を行うことにした。

を4種類、全部で7種類の合成音を作成した。下降するものは、はじめの50msは一定の周波数(280Hz, 320Hz, 360Hz)で $F_0$ を固定する。そして、その後すべて240Hzへ下降させる。一方、平板なものは、「あ」の部分の $F_0$ を一定の周波数(240Hz, 280Hz, 320Hz, 360Hz)で固定した<sup>5</sup>。

## ②「あ」の持続時間

持続時間については、 $F_0$ が下降するものは100ms, 150ms, 250ms, 350msの4種類、平板なものは50ms, 100ms, 150ms, 250ms, 350msの5種類にした<sup>6</sup>。5.3でも触れたとおり、会話文読み上げ実験では100ms前後で「親」と「疎」のサンプルの分布が分かれるという結果が出た。したがって、本実験では、この部分で集中的な検討を行うことにした。

「あ」の $F_0$ と持続時間のバリエーションは、**図 5-5・図 5-6**の通りである。**図 5-5・図 5-6**とも、縦軸は $F_0$ を、横軸は持続時間を示している。また、○は「あ」の部分の始点となるところ、●は終点となるところである。 $F_0$ が下降する場合は、**図 5-5**の太い実線のように、○から50msは始点と同じ $F_0$ を保持し、その後●まで、すなわち、240Hzまで $F_0$ を下降させた。他の○からも同様に作成した。 $F_0$ が平板の場合は、**図 5-6**のように、任意の○から、同じ $F_0$ の●までの刺激音を作成した。

また、例えば、強い「あ」や、こもったような「あ」というように、「あ」の音色も対人関係の影響を受けうると考えられるが、本章ではこれらは考察の対象としていない。

## ③「持って」の「て」の $F_0$

会話文読み上げ実験では、「あ」に後続する部分には着目していなかったが、対人関係は「あ」だけではなく、文の残り部分全体に影響している可能性がある。この文では残り部分である「持って来てました」のうち、テキ区間がアクセントとして高いが、原音声ではキは無声化しているので、影響がある場合に最も変化するとと思われるテの高さを変え、テマシタ区間は原音声を使った。「て」の $F_0$ は、300Hzと360Hzの2種類に設定した。

## ④その他

**図 5-5・図 5-6**のとおり、「あ」と「持って来てました」の間には無音区間(ポーズ)を

<sup>5</sup> 「あ」と後述の「持って」の「て」の $F_0$ の設定については、会話文読み上げ実験で得られたサンプル(女性4名のもの)を参考にした。サンプルのうち、「あ」の $F_0$ 曲線の(中央の)最も高い部分の $F_0$ の最大値が346Hz、最小値が201Hzであったが、240Hz以上にサンプルが集中していたため、240Hz~360Hzの幅での設定とした。また、240Hz付近では、「あ」の $F_0$ 曲線の終端部の $F_0$ も240Hz程度であったため、240Hzは平板型のみでの設定とした。また、「て」の $F_0$ については、最小値が254Hz、最大値が413Hzであったが、300Hz付近と350Hz以上にサンプルが集中していたため、300Hzと360Hzでの設定とした。

<sup>6</sup> 「あ」の持続時間の設定も同様に、会話文読み上げ実験で得られたサンプルを参考にしてしている。サンプルでの持続時間の最大値は360ms、最小値は59msである。

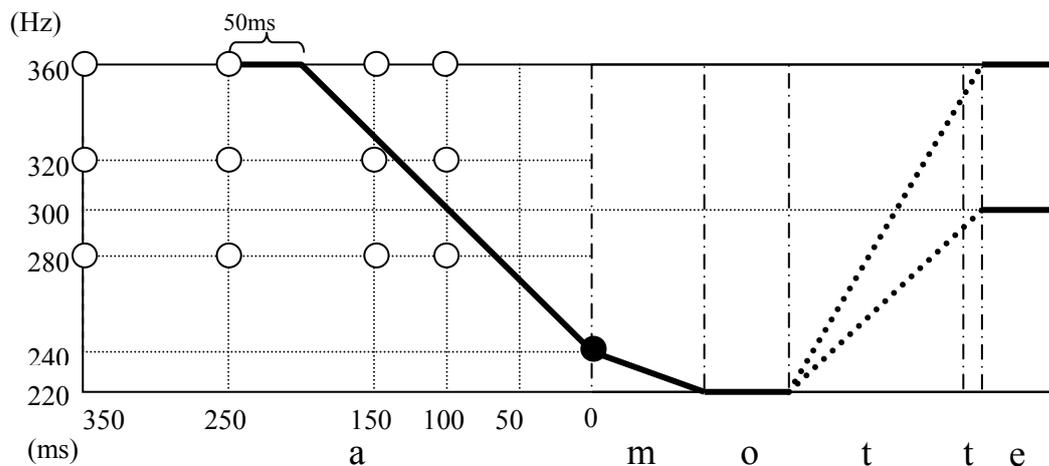


図 5-5 刺激音の種類

「あ」の  $F_0$  と持続時間 ( $F_0$  が下降する場合)

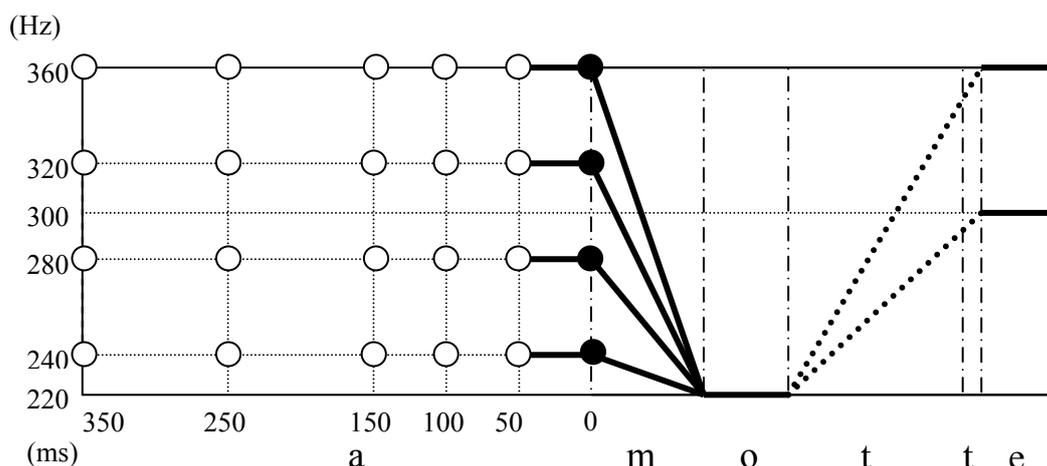


図 5-6 刺激音の種類

「あ」の  $F_0$  と持続時間 ( $F_0$  が平板の場合)

置いていない。「持って来てました」の「も」については、すべての刺激音について母音の位置で  $F_0$  を 220Hz に設定した<sup>7</sup>。

したがって、上記①～④をまとめると、調査協力者に聞かせる刺激音の種類は 64 種類になる。刺激音に対する判断をより妥当なものとするため、1 種類の刺激音に対して判断を 2 回求められるよう、64 種類の刺激音を 2 つずつ計 128 の刺激音をランダムに配列して調査協力者に聞かせ、それぞれについて回答を求めた。さらに、回答の始めに 3 つ、終わりに

<sup>7</sup> 同様に、会話文読み上げ実験で得られたサンプルを参考に行っている。「持って」の「も」の部分の平均の  $F_0$  値は 233Hz であったが、それよりやや低めにサンプルが集中していたので、220Hz とした。

2つ、集計に加えないダミーの刺激音を、また回答の前には練習の刺激音を2つ用意し、実験に慣れて集中している時の回答のみが得られるように努めた。1回の回答の際には、同じ刺激音を4秒の間隔で2度聞いてから回答を求めるようにした。また、次の刺激音のキュー（合図）までの間隔も4秒置き、キューから刺激音までの間は0.5秒の間隔を置いた。

#### 5.4.3 調査協力者

東京23区、八王子市、川崎市、横浜市、千葉市出身（中学までの期間でいちばん長く住んでいたところ）の20～30歳代の15名（男性6名・女性9名）に回答をお願いした（表5-1参照）。調査協力者には、前節の刺激音を録音したCDまたはMDを渡し、それを再生して聞きながら回答用紙に回答を記入してもらった。

#### 5.4.4 回答の方法

5.4.1で触れたとおり、刺激音それぞれについて「あ、持って来てました」と応答したAと相手Bとの間の対人関係（上下関係・親疎関係）を判断し、それぞれ二者択一（相手が上・相手と同じ／親しい・初対面）で回答してもらった。調査協力者には判断に際して、学校生活<sup>8</sup>におけるやりとりを想定してもらった。上下関係については、「相手が上」の場合は、相手が自分よりも年齢でも立場でも上（先輩）、「相手と同等」の場合は、相手と

表 5-1 調査協力者の性別・年齢・出身地・職業

性別	年齢	出身地	職業
男性	20歳代後半	東京23区	会社員
男性	20歳代後半	横浜市	教師
男性	20歳代後半	川崎市	会社員
男性	20歳代後半	千葉市	教師
男性	30歳代前半	千葉市	教師
男性	30歳代後半	八王子市	教師
女性	20歳代前半	八王子市	会社員
女性	20歳代後半	東京23区	学生
女性	20歳代後半	東京23区	会社員
女性	20歳代後半	横浜市	教師
女性	20歳代後半	横浜市	学生
女性	30歳代前半	東京23区	教師
女性	30歳代前半	東京23区	教師
女性	30歳代前半	千葉市	教師
女性	30歳代後半	東京23区	主婦

自分は年齢も学年も立場も同じ（同級生）という基準を回答用紙に示しておいた。また、親疎関係については、「親しい」の場合は、学校だけではなく、「プライベートで食事をしたり、長電話ができそうな関係」、「初対面」の場合は、相手と「初めて会って、しかも、この場きりの関係」と回答用紙に示しておいた。

#### 5.4.5 結果

<sup>8</sup> おそらく調査協力者全員が経験したことがある社会であり、「先輩」ということばに見られるように、上下関係が比較的是っきりしており、かつ、親疎関係に関しても特に、プライベートな付き合いが想定しやすい社会であることから採用した。

まず、上記のようなさまざまな音声的特徴を持つ刺激音を聞いて、調査協力者が「相手が上」「相手と同等」「初対面」「親しい」のそれぞれに回答した割合と、「あ」自体の音声的特徴にどのような関係があるか述べることにする。その後で、「持って」の「て」の  $F_0$  (300Hz, 360Hz) とそれに対する対人関係の判断にどのような関係があるかを述べる。

#### 5. 4. 5. 1 「あ」自体の音声的特徴と上下関係

図 5-7~図 5-10 は、上下関係について、「相手が上」「相手と同等」と回答した刺激音の音声的特徴<sup>9</sup>と回答の割合を、 $F_0$  下降型と  $F_0$  平板型に分けて示したものである。それぞれの刺激音に対する回答の割合をよりわかりやすく示すために、回答の割合が 0.5(すなわち、

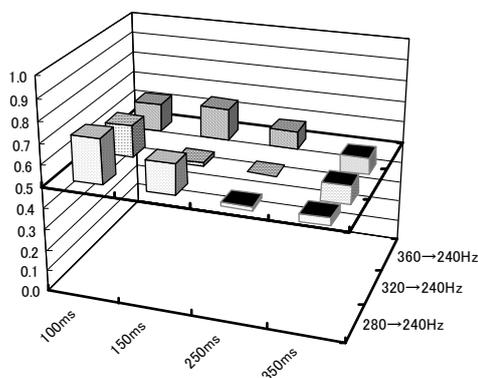


図 5-7 「相手が上」と回答した回答率 ( $F_0$  下降型)

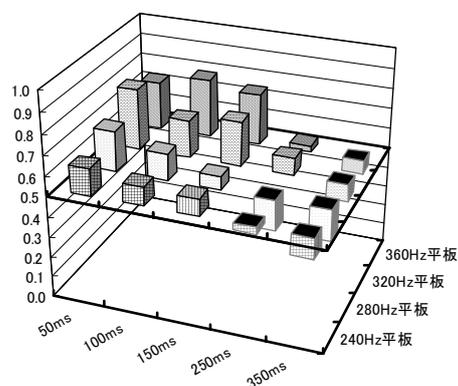


図 5-8 「相手が上」と回答した回答率 ( $F_0$  平板型)

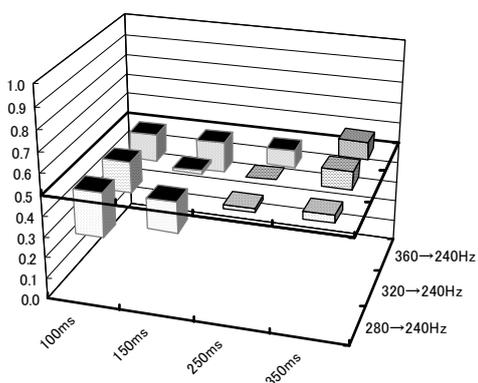


図 5-9 「相手と同等」と回答した回答率 ( $F_0$  下降型)

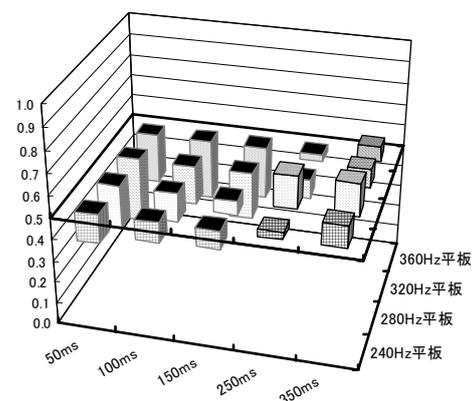


図 5-10 「相手と同等」と回答した回答率 ( $F_0$  平板型)

<sup>9</sup> ここで、「持って」の「て」の  $F_0$  値については考慮していない。次節の親疎関係についても同様である。

全回答の 50%) を超える刺激音を上向きの立体柱で表示している。また、0.5 を下回るものは（上面が黒い）下向きの立体柱になっている。

「相手が上」のグラフ（図 5-7・図 5-8）と「相手と同等」のグラフ（図 5-9・図 5-10）を比べると、回答の割合は主に「あ」の持続時間によって変化していることがわかる。「相手が上」の図 5-7・図 5-8 では、回答の割合が 0.5 を超える刺激音が持続時間 150ms までの範囲に全て現れているが、250ms 以上の範囲で見ると、0.5 以上の回答率の刺激音がほとんど現れていない（14 種類中 3 種類）。それに対し、「相手と同等」の図 5-9・図 5-10 では、250ms 以上の範囲では、全 14 種類中 10 種類の刺激音が 0.5 以上であった。したがって、「あ」の持続時間と上下関係については、150ms~250ms を境に、それ以下が「相手が上」、それ以上が「相手と同等」と判断される傾向が見られることになる。その傾向の中で、回答の割合について 0.75 以上の高得点だった刺激音を詳しく見ていくと、「相手が上」と判断されたものは、音声的特徴（ $F_0$ ・持続時間）が 320Hz 平板・50ms のもの、360Hz 平板・100ms のもの、そして、360Hz 平板・150ms のものの 3 つであった。したがって、「相手が上」と判断されるには、持続時間以外に、 $F_0$  について、形状が平板であること、そして、320Hz 以上と比較的高い値でなければならないということが考えられる。一方、「相手と同等」と判断されたものの中では、280Hz 平板・250ms、280Hz 平板・350ms の刺激音に対する回答の割合が 0.65 で最も高い値であった。「相手と同等」と判断されるには、持続時間以外に、 $F_0$  の形状が平板で 280Hz 程度とあまり高くないことが考えられる。

#### 5. 4. 5. 2 「あ」自体の音声的特徴と親疎関係

図 5-11~図 5-14 は、親疎関係について「初対面」「親しい」と回答した刺激音の音声的特徴と回答の割合を、「あ」の  $F_0$  下降型と  $F_0$  平板型に分けて示したものである。図 5-7~図 5-10 と同様に、回答の割合が 0.5 を超えるものについては上向きの立体柱で表示している。

親疎関係については、上下関係のときのように分布がはっきりしていない。「親しい」と回答した割合を示す図 5-13 と図 5-14 を見ると、主に  $F_0$  下降型に回答の割合が 0.7 以上である刺激音が多く見られる（図 5-13）が、 $F_0$  平板型（図 5-14）にも局所的に 0.7 以上のものが見られる。それらの音声的特徴を詳しく見ると、(1)  $F_0$  が 360Hz→240Hz・持続時間が 150ms、(2)360Hz→240Hz・250ms、(3)360Hz→240Hz・350ms、(4)320Hz→240Hz・150ms、(5)320Hz→240Hz・250ms、(6)320Hz→240Hz・350ms、(7)280Hz→240Hz・250ms、(8)280Hz

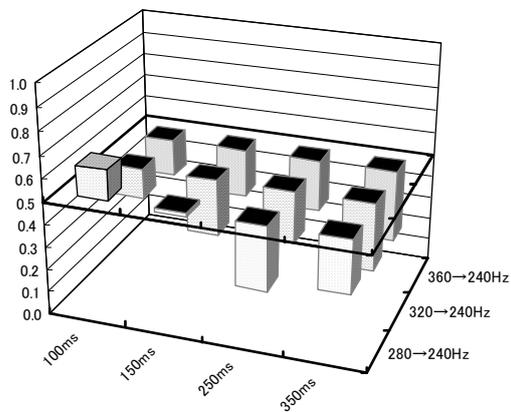


図 5-11 「初対面」と回答した回答率  
( $F_0$ 下降型)

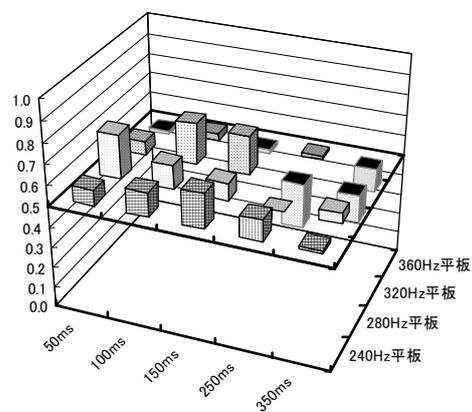


図 5-12 「初対面」と回答した回答率  
( $F_0$ 平板型)

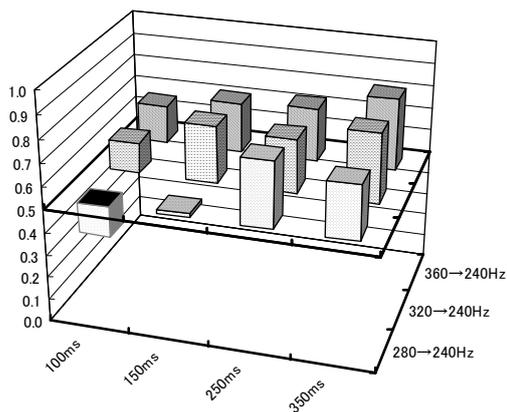


図 5-13 「親しい」と回答した回答率  
( $F_0$ 下降型)

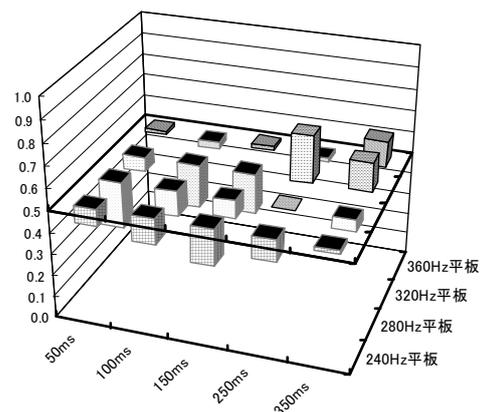


図 5-14 「親しい」と回答した回答率  
( $F_0$ 平板型)

→240Hz・350ms, (9)320Hz 平板・250ms の9つであった。したがって、「親しい」と判断されるには、まず、 $F_0$ の下降が1つの条件として挙げられる<sup>10</sup>。しかし一方で、持続時間が250ms以上と比較的長く、 $F_0$ がやや高めの320Hz 平板型の刺激音も「親しい」と判断されている。 $F_0$  平板型のこのタイプは、持続時間がより長い350msで、 $F_0$ が320Hzと360Hzの刺激音にやや回答の割合が高い部分がある以外は、「親しい」と判断されにくいということが特徴である。つまり、「親しい」と判断される音声には大きく分けて、「 $F_0$ 下降型」と「持続時間が長めで $F_0$ がやや高めの平板型」の2つのパターンがあるわけである。

一方、「初対面」と判断される刺激音については、 $F_0$ が平板で320Hz~280Hzを中心とす

<sup>10</sup> 持続時間が短く、 $F_0$ の下降幅が小さい刺激音については、明瞭な下降として判断できないために回答が少なかったと考えられる。

る範囲で、持続時間が 100ms~150ms を中心とする範囲のものにその傾向が見られた。

#### 5. 4. 5. 3 「持って」の「て」の $F_0$ と対人関係

刺激音「あ、持って来てました」は、感動詞「あ」の部分以外に、「持って」の「て」の

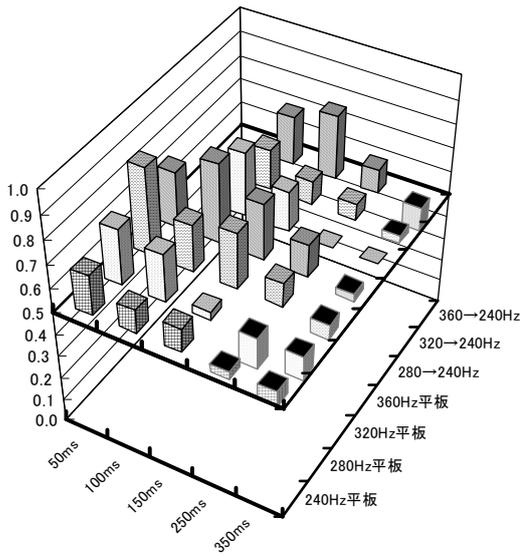


図 5-15 「相手为上」と回答した回答率  
(「て」の  $F_0$  が 360Hz の場合)

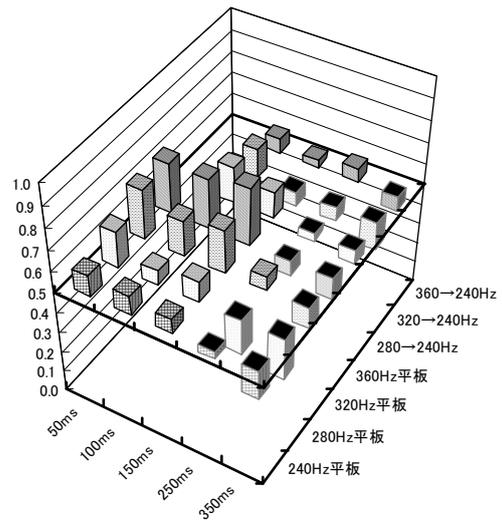


図 5-16 「相手为上」と回答した回答率  
(「て」の  $F_0$  が 300Hz の場合)

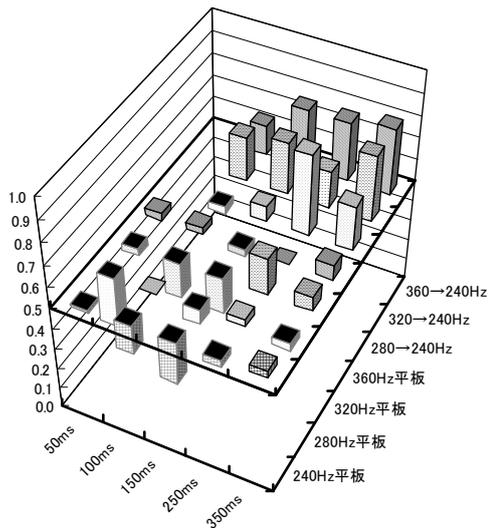


図 5-17 「親しい」と回答した回答率  
(「て」の  $F_0$  が 360Hz の場合)

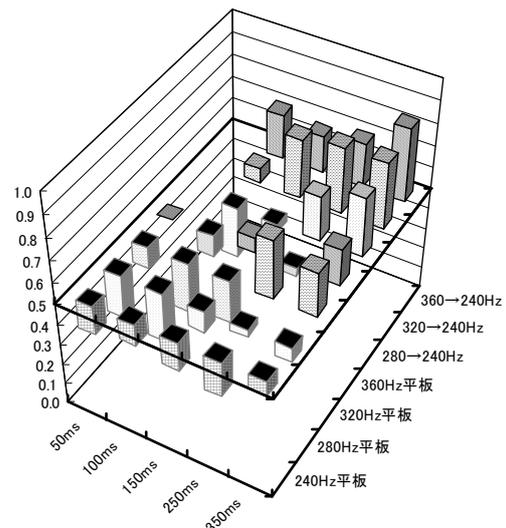


図 5-18 「親しい」と回答した回答率  
(「て」の  $F_0$  が 300Hz の場合)

$F_0$ も2種類の値(300Hz, 360Hz)に変化させている。今度は、この「て」の $F_0$ が対人関係を判断する際にどう影響しているかを述べる。

まず、「て」の $F_0$ を変化させたことによる各々の刺激音に対する回答の割合の変化を、上下関係を図5-15と図5-16で、親疎関係を図5-17と図5-18で見ることにする。図5-15と図5-16は、上下関係について「相手が上」と回答した割合、図5-17と図5-18は、親疎関係について「親しい」と回答した割合である<sup>11</sup>。また、図5-15と図5-17は「て」の $F_0$ が360Hzのときの、図5-16と図5-18は300Hzの回答の割合である。

「相手が上」の回答の割合を比べてみると(図5-15と図5-16)、どちらも「あ」の持続時間で150ms~250msを境界に、それ以下が回答の割合が高くなっており、5.4.5.1で見た「相手が上」の場合の分布のし方と大きな差は見られない。また、「親しい」の回答の割合も同様に比べてみると(図5-17と図5-18)、どちらも $F_0$ 下降型で回答の割合が高く、さらに、 $F_0$ が320Hz 平板、持続時間が250ms~350msの刺激音に対する割合が局所的に高くなっており、両者で共通しており、やはり、5.4.5.2で見た「親しい」の場合の分布のし方と大きな差は見られない。以上より、「て」の $F_0$ が300Hz, 360Hzと異なっても回答の分布に大きな差が見られないことから、対人関係の判断に主にかかわっているのは、「あ」の音声的特徴であると言える。

それを踏まえ、「て」の $F_0$ が対人関係の判断に影響しているかどうかについて統計的検定を行うため、「て」の $F_0$ が300Hzと360Hzのときで、対人関係(上下関係・親疎関係)の回答パターンが異なるかどうかについてカイ二乗検定を行った。その結果、上下関係については、 $\chi^2=8.426$ ,  $df=1$ ,  $p=.004$ で、「て」が300Hzと360Hzのときの回答パターンに有意な差があった。図5-19に示すように、「相手が上」の回答の割合は360Hzのときに明らかに高くなっている。一方、親疎関係については、 $\chi^2=1.709$ ,  $df=1$ ,  $p=.191$ で、「て」が

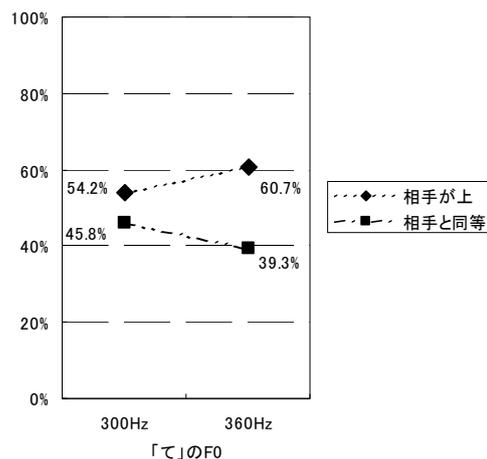


図5-19 「持つて」の「て」の $F_0$ による回答パターンの変化(上下関係について)

<sup>11</sup> 「相手と同等」「初対面」の回答の割合については、それぞれ、「相手が上」「親しい」と割合が相補的になるため、説明を省略する。

300Hz と 360Hz の時の回答パターンには有意な差はなかった。

以上から、上下関係では、「て」の  $F_0$  が 360Hz と高い時に「相手が上」と回答する傾向が強くなるのに対し、親疎関係では、「て」の  $F_0$  の変化が回答パターンには影響していなかった。「て」の  $F_0$  が比較的高いときに「相手が上」と回答する傾向が強いのは、「相手が上」と判断される「あ」の音声的特徴で（持続時間以外に） $F_0$  が比較的高いということと共通している。

## 5. 5 聴取実験結果のまとめ

図 5-20 と図 5-21 は、5.4 節の聴取実験の結果、どのような音声的特徴を持った「あ」にどのような対人関係の回答が集中したかを大まかに図示したものである。以下では、上下関係と親疎関係について聴取実験の結果をまとめ、そして、5.3 節の「会話文読み上げ実験」の結果とも比較する。

### 5. 5. 1 上下関係

まず、上下関係については、以下の 3 点にまとめることができる。

- ・「あ」の持続時間が 150ms 以下と比較的短いものは「相手が上」と判断されやすい。
- その上で、 $F_0$  が平板で、320Hz 以上と比較的高いものが、より「相手が上」と判断されやすい。
- ・「あ」の持続時間が 250ms 以上のやや長めのものは「相手と同等」と判断されやすい。
- その上で、 $F_0$  が平板で、280Hz 程度のやや高めのもものが、より「相手と同等」と判断されやすい。

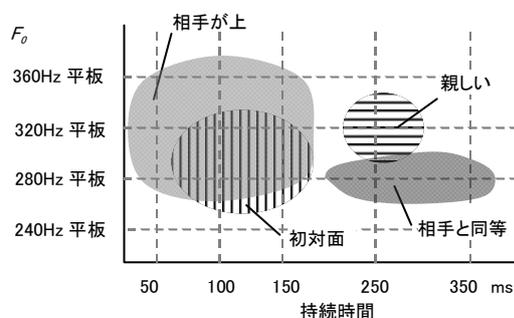


図 5-20 刺激音パターンと回答分布 ( $F_0$  平板型)

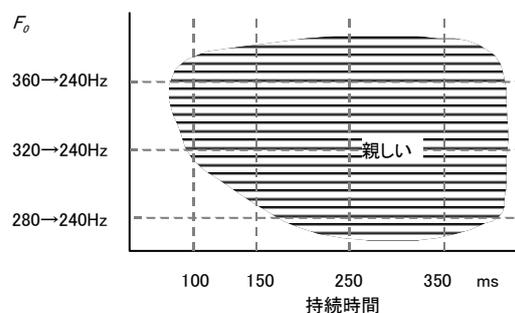


図 5-21 刺激音パターンと回答分布 ( $F_0$  下降型)

- ・「持って」の「て」の  $F_0$  の高いほう (360Hz) が、より「相手が上」と判断されやすい。

会話文読み上げ実験との比較では、持続時間については同様の結果が出たが、 $F_0$  の変化幅については、会話文読み上げ実験では「相手と同等」の場合はピッチ下降幅が比較的大きかったことから、聴取実験の結果と必ずしも一致していないことがわかる。

### 5. 5. 2 親疎関係

次に、親疎関係については、以下の4点にまとめることができる。

- ・「あ」の  $F_0$  下降型では、 $F_0$ ・持続時間ともに分布に幅があり、持続時間が短く  $F_0$  下降幅の小さいものを除いては、おおよそすべての刺激音で「親しい」と判断される。
- ・平板型で「親しい」と回答されたものは少ないが、320Hz 平板・250ms のように、「親しい」と判断される刺激がないわけではない。
- ・ $F_0$  が平板で 320Hz~280Hz を中心とする範囲で、持続時間が 100ms~150ms を中心とする比較的短いものに「初対面」と判断されやすい傾向がある。
- ・「持って」の「て」の  $F_0$  は、親しみの判断を左右する要因にはならない。

会話文読み上げ実験との比較では、「親」の場合、ピッチ下降幅は比較的大きいという点で聴取実験の結果と一致しているが、持続時間は、会話文読み上げ実験では比較的長かったのに対し、聴取実験では、 $F_0$  が下降していることを認識できれば、あらゆる長さで「親しい」と判断されていた。一方、「疎」の場合、持続時間が比較的短く、ピッチ下降幅が比較的小さかったということで、聴取実験の「初対面」の結果とほぼ一致した。

## 5. 6 考察

前節で述べた実験結果から、「あ」の音声的特徴と対人関係は1対1で対応していないことがわかるが、なぜ両者がこのような対応関係になっているのかを次に考えたい。まず考えなければならないのは、音声的特徴と対人関係との間の対応関係は一般の言語記号と意味の間の関係と同様、恣意的なものであるという可能性である。特に、ここで音声的特徴と対人関係が1対1に対応しない点を見ると、その可能性は低くないように思われる。一方で、両者の間には必然的な結びつきがあることも想定できる。具体的には、対人関係に

応じて発話時に話し手が特定の生理的な状態になったり、相手に対して意図的な一定の配慮をすることが要求されたりして、その結果、特定の音声的特徴が生じるということである。まず、このような音声的特徴と対人関係の間に一般にありうる自然な関係について検討したい。

### 5. 6. 1 話し手の生理的要因—緊張

一般に対話で、相手に失礼になることや、コミュニケーションの失敗を避けなければならない場合は、ことば遣いや態度などにより多く注意を向けなければならなくなり、ストレスがかかった緊張状態になる。これは相手が上の場合に典型的に生じる事態であると思われるが、このような緊張状態は、話し手の発音器官にも影響を与え、声帯が緊張している場合は、当然声帯の振動数が高くなる。しかも、アクセントによる下降という音韻的制約がない感動詞の場合には、筋肉が「こわばる」ことで、変化のない平板なイントネーションになりやすいことが考えられる。また、「だらだら」というような日本語表現からも示唆されるように、緊張がない状態はテンポが遅い発音に反映され、逆に緊張状態ではテンポが速く、個々の分節音も短くなると考えられる。「あ」についても文全体についても、音声的特徴の考察には、まず話し手のこういった生理的な側面を考慮に入れる必要があると言える。

### 5. 6. 2 話し手の意図的要因—相手のフェイスに対する配慮と、その手段としての「私的な」情報の表示

また一方で、相手への配慮を意識し、それを言語表現に反映させるという、話し手の意図的な側面も音声に反映しうる。日本語の会話では、会話参加者の「相対的な地位」を維持する必要がある (Matsumoto 1988)<sup>12</sup>。互いにその地位に応じた適切な行動を取ることによって、会話参加者同士のフェイスを満足させるようにする必要があり、話し手は相手との対人関係に応じて適切なストラテジーをとる。ストラテジーにはいくつかあるが、その中の1つは、失礼なことや余計なことをして相手の機嫌を損ねないように、つまり、ネガティブ・フェイス (negative face; Brown and Levinson 1987) を満足させるストラテジーである。

<sup>12</sup> 日本の文化では、人々は、相対的な地位やグループのほかのメンバーに配慮したランク付けに応じて適切な行動をとることが期待されており、ポライトネス・ストラテジーを用いて維持したいのは、相対的な地位なのである (1988:423) と、日本語における会話参加者の「相対的な地位」の維持の必要性が述べられている。

もう1つは、相手に積極的に接し、「他人に理解されたい、好かれたい、賞賛されたいというプラス方向への欲求」(宇佐美 2001a)であるポジティブ・フェイス (positive face; Brown and Levinson 1987) を満足させるストラテジーである。典型的には、「相手が上」であれば、まず、相手に対して失礼なことがないように、ネガティブ・フェイスを満足させようとするし、「親しい」であれば、理解し合えるような関係を志向しているので、ポジティブ・フェイスを満足させようとするであろう。

一方で、「あ」など感動詞は話し手の心的状態 (田窪・金水 1997) や感情 (坊農 2001) が反映されたものでもある。聴取実験での応答の際の「あ」は、専ら応答に関する情報のみを表示することもあれば、話し手の個人的な、例えば感情や特別な意図など、応答とは関係ない情報を表示することもありうる。このような「私的な」情報の自由な表示は、フェイスに対する配慮の面而言えば、相手のポジティブ・フェイスを満足させることにつながり、逆に「私的な」情報の表示を抑制することは、ネガティブ・フェイスを満足させることにつながると言える。

では、一般に話し手の「私的な」情報が現れやすい音声的特徴とはどんなものであろうか。Uldall (1964) や Crystal (1969) のイントネーション (ピッチ幅) と感情表現の強調に関する古典的な議論でも取り上げられているように、 $F_0$ の変化が伴う、つまり、 $F_0$ の変化幅が大きいものは、感情などといった「私的な」情報が現れやすい、相手のポジティブ・フェイスを満足させる音声的特徴だと言える。逆に、「あ」に「私的な」情報が現れにくい、相手のネガティブ・フェイスを満足させる音声的特徴には、 $F_0$ の変化幅が小さいこと以外に、「あ」自体ができるだけ目立たなくなるような持続時間が短いものも挙げられる。

### 5. 6. 3 対人関係と音声的特徴

今述べた話し手の生理的要因と意図的要因の2つの要因の介在を考えれば、聴取実験の結果における対人関係と「あ」および文全体の音声的特徴との対応関係は、恣意的なものではなく必然的なものとしておおむね説明できる。これをまとめると次のようになる。

#### 5. 6. 3. 1. 相手が上

「相手が上」という状況では一般に話し手は緊張する。また一般に「私的な」情報の表示は抑制して、相手のネガティブ・フェイスを満足させるべき状況でもある。聴取実験の結果、「相手が上」と判断された「あ」の音声的特徴は、持続時間で 150ms 以下の範囲に

収束した。これは、一つには話し手が緊張状態にあることが感じられたためであり、同時にネガティブ・フェイスを満足させるために「私的な」情報が表示されにくくなるように調節された音声と判断されたからだと説明できる。また、「あ」の $F_0$ が平板で320Hz以上と比較的高めであったことは、こうした音声的特徴により、話し手が緊張状態にあることを感じたためだと説明できる。また、「持って来てました」の「て」が高いと「相手が上」の回答が増えるのも、話し手の緊張という要因で説明できる。

### 5.6.3.2 初対面

「初対面」の場合、「私的な」情報の表示は少なくして相手のネガティブ・フェイスを満足させることが多いであろう。この場合にも話し手の緊張はありうる。しかし、先述のように、この実験では回答用紙に「初めて会って、しかも、この場きりの関係」と示しておいた。したがって、ここでは話し手の緊張が特に必要な状況とはなっていない。ここで「初対面」と判断された「あ」は持続時間が100~150msを中心とする比較的短い範囲であり、ゆえに、これは「私的な」情報の表示抑制が音声的特徴に影響していると解釈できる。

### 5.6.3.3 親しい

「親しい」場合は緊張する必要はないが、「私的な」情報を表示して相手のポジティブ・フェイスを満足させる必要がある。ここで「親しい」と判断された「あ」の音声的特徴には、2つのパターンが見られ、1つは（持続時間や高さのレベルに関係なく） $F_0$ 下降型であった。これは、ポジティブ・フェイスを満足させる「私的な」情報を表出する音声的特徴と判断されたと考えられるし、話し手の緊張度が低い対人関係であることから、 $F_0$ が高く平板である必要がないためだとも解釈できる。

もう1つのパターンである、 $F_0$ が中程度レベルの320Hz平板で持続時間が250msを中心とするものについては、話し手の緊張や「私的な」情報の表示で説明することは難しい。ただ、例えば、相手に対して、考え中であったりするときには、「あ」に限らず「え」でも「う」でも、いわゆるフィラーとして、持続時間が比較的長く $F_0$ 下降が少ない音声が現れることがある。これも「考え中」という、専ら応答に関係する情報ではないもの、すなわち話し手の「私的な」情報であると考えてもよいが、むしろ特定の意味・機能に由来した「あ」であると言える。

#### 5. 6. 3. 4 相手と同等

「相手と同等」の場合、話し手は緊張する必要はなく、またあえて「私的な」情報を表示する必要も、抑制する必要もないであろう。したがって、音声として特に  $F_0$  が高く平板である必要も、変化幅が大きい必要もなく、また持続時間が短い必要もないことになる。聴取実験で「相手と同等」と判断された「あ」が、 $F_0$  平板型 280Hz 程度（中以下のレベル）で、持続時間が 250ms 以上の範囲に見られたことは、まさにこのような状況を反映したものであると言える。

### 5. 7 おわりに

本章での議論の目的は、応答発話に現れる「あ」の音声的特徴の多様性が話者間の対人関係によってどの程度、どのように説明できるかを探ることであったが、結果として、その多くが説明できることがわかった。具体的には、聴取実験の結果へのアプローチとして、発話の際の話し手の生理的側面と意図的側面を考慮し、2つの視点（話し手の緊張、相手のフェイスに対する配慮の手段としての「私的な」情報の表示）を導入した。これにより、①「相手が上」「初対面」の場合の 150ms 以下の「あ」の持続時間、高めの  $F_0$ 、そして「持って来てました」の高めの「て」、②「親しい」の場合の「あ」の  $F_0$  下降型、③「相手と同等」の場合の 250ms 以上の「あ」の持続時間については2つの視点による解釈が可能であった。

しかし、「親しい」の  $F_0$  平板型については、対人関係というより、発話機能の面から考えるべきものと判断された。さらに、3章や4章における議論を踏まえると、ある種の音調が意味・機能（情報の処理過程）とも対人関係とも対応関係があるということとなる。例えば、 $F_0$  が下降するものは、意味・機能の側面からは「肯定的な結果表示」と解釈されるが、対人関係の側面からは「親しい」と解釈されるということである。このような現象は、意味・機能という要因と、対人関係という要因が互いに独立し、結果として偶然同じ音調で現れたとも考えられるが、対人関係に応じた話し手の態度を表示するために、意味・機能の表示を利用したという可能性も排除できない。6章では、情報の処理過程の表示の利用という観点から、音調に影響を与える要因をさらに深く検討していきたい。

## 第6章

### まとめ～音声的特徴から見た感動詞の機能とは

2章で本研究の方向性として「感動詞の音声的特徴はどのような要因によって規定されるか」、そして、「感動詞の音声的特徴はそれぞれの要因によってどのように規定されるか」という問題提起をもとに、3章から5章にかけ、感動詞の音声的特徴について、いくつかの角度から分析・考察した。具体的には、感動詞の音調をアクセント・イントネーションの体系に位置づけ、そして、肯定的な応答や受け入れなどといった感動詞本来の言語的な意味・機能を反映した音声的特徴、会話参加者間の対人関係という非言語的な要因を反映した音声的特徴について述べてきた。

本章では、3章から5章で導き出された結果を、まず、この問題提起に対応する形で整理する。そして、その上で、以下の二つの問題について考えてみたい。

一つは、音声的特徴を規定する要因についての問題である。ここまで論じてきた中では、感動詞の音声的特徴を規定する要因として、感動詞が本来持つ言語的な意味・機能と、(応答場面における)会話参加者間の対人関係が見られた。この2つは対話で感動詞が用いられる場合は、常に音声的特徴に影響を与える要因であると言えるが、これらの要因の関係は必ずしも協調的であるとは限らない。

例えば、5章のように、その場にいない第三者がノートパソコンを持ってきたかどうかという相手からの応答要求発話に対し、「あ、持ってきてました」という肯定の応答発話に現れる「あ系」感動詞で、下降のない平板の「ア」が出現した場合、確かに、「相手が上」という対人関係を想起しやすい。しかし、言語的な意味・機能の面から考えると、一般的に下降のない「ア」は、肯定的な応答であることを示す「入力情報の処理結果表示」とは解釈されない。この「ア」は、3章で述べたとおり、話し手に認識の変化が生じたこと自体を示す「入力情報の処理開始表示」で、一般的に、何かを思いついたり、発見したりした場合に用いられる。つまり、この下降のない平板の「ア」は、対人関係の影響を受けているが、肯定的な応答という言語的な意味・機能の影響を受けていないのである。なぜ、このように、「対人関係」と「言語的な意味・機能」との間で競合が起きてしまうのであろうか。このような現象を説明できるよう、ここまで述べた音声的特徴を規定する要因をまとめ、今一度この要因について検討を試みる。

もう一つは、日本語の語彙の中で感動詞はどのように位置づけられるかという問題であ

る。3章で挙げた川上(1992)の、「はい」「ええ」「うん」は音調の乗り物に過ぎず、音調を捨象すればこれらの語が意味を失い、そのため、語ではなくなってしまうという指摘は、感動詞を、通常1つのアクセント型をとる一般的な語と見る立場からは遠いと思われる。音韻的な側面から、感動詞は一般的な語と比べ、どの程度異質なのかについて、主に3章の考察をもとに検討する。

## 6. 1 感動詞の音声的特徴を規定する要因

まず、本研究でこれまでに議論に上った感動詞の音声的特徴を規定する要因についてまとめることとする。本研究では、言語的な意味・機能と会話参加者間の対人関係が感動詞の音声的特徴を規定する要因として議論の対象となった。以下ではそれぞれの要因についてまとめることとする。

### 6. 1. 1 言語的な意味・機能

本研究で扱った議論の中ではまず、感動詞の言語的な意味・機能が音声的特徴を規定する要因となっていた。感動詞の言語的な意味・機能といっても非常に幅広く雑多だが、本研究では音声的特徴との対応を考慮に入れ、具体的には、言語的な意味・機能を反映した次の3つの要因を中心に整理した。各々の要因について以下で詳しく述べる。

- ・ 入力情報の処理の有無と様々な処理過程（入力情報の処理結果表示・処理開始表示・処理前表示と非処理）
- ・ 入力情報の様々な処理結果（入力情報の処理結果としての話し手の態度）
- ・ 肯定的な結果表示における受け入れの度合い（同意と非同意）

まず、「入力情報の処理の有無と様々な処理過程」は、3章で感動詞の多様な音調を記述する際に導入した概念である。入力情報の処理過程とは、相手や第三者の発話内容や眼前の出来事などといった情報に話し手が接してから、様々な反応が起きるまでのプロセスである。このプロセスには3つの段階があり、情報を受け入れた上でそれに対する評価や同意といった話し手の態度を表示する「入力情報の処理結果表示」、情報に接した瞬間に話し手の認識が変化したこと自体を表示する「入力情報の処理開始表示」、そして、これから話し手が何らかの反応をすることが期待されているにもかかわらず、処理が滞り開始できないことを表示する「入力情報の処理前表示」である。また、これらとは異なり、相手に対

する促しや話し手自身の決意など、相手や第三者の発話内容や眼前の出来事などといった情報とは関係なく発話可能な、情報の処理に全く関わらないものを「非処理」とした。そして、このプロセスのどの段階を表示するかが、主にアクセント核の有無に関わることを見てきた。

次に、「入力情報の様々な処理結果」についてである。上述の「入力情報の処理結果表示」は、処理結果として話し手の態度を表示するものであるが、具体的には、肯定的、否定的、理解不能、驚き、落胆、未知の情報の格納など、様々な話し手の態度を表示する。これらのどの処理結果を表示するかが、感動詞の音調、つまり、アクセント型と語末音調の組み合わせに影響を与えるということを見てきた。

そして、上の2つよりもやや個別的な要因として、「肯定的な結果表示における受け入れの度合い」が挙げられる。これは4章の「うん」の音響分析で議論した。「受け入れ」とは、「うん」の肯定的な結果表示のうち、疑問文に対する応答でも、依頼や勧誘などに対する承諾でもなく、相手の発話内容を理解した、聞いている、発話内容に同意している、といった結果を表示するものである。その中でも特に、相手の発話内容に理解を示し、同意もしているような受け入れの度合いが高い場合と、相手の発話内容に理解は示すものの、同意をしているわけではないような受け入れの度合いが低い場合の韻律的特徴を観察した。その結果、どちらもンーという下降の音調が伴っていながら、 $F_0$ 下降幅と持続時間に差が見られた。 $F_0$ 下降幅については、肯定的な要素の強さが、そして、持続時間については、同意できない場合の相手への配慮となる、考え中の表示がそれぞれ関わっていることを指摘した。

### 6. 1. 2 対人関係

5章では対人関係が「あ系」感動詞の音声的特徴をどのように規定しているかということを中心に議論した。対人関係は、様々な要素でとらえられるべき複雑なものであるが、5章では親疎関係（「親しい」と「初対面」）と上下関係（「相手が上」と「相手と平等」）を変数として、相手と親しい関係のときに典型的に発せられる「あ」、相手が上のときに典型的に発せられる「あ」、というように、それぞれの対人関係における音声的特徴（主に  $F_0$  変動と持続時間）を分析した。

5章では「親疎」「上下」という要因と音声的特徴の関係が1対1で対応していないことから、一般的な言語記号と意味の関係と同様に恣意的なものであるという解釈の可能性を

残しつつ、一方で、その関係を必然的な関係であるとする解釈の可能性についても述べた。具体的には、対人関係によってもたらされる生理的要因と意図的要因が音声的特徴に直接影響を与えているという解釈であった。

これら2つの要因について少し詳しく述べると、まず、「生理的要因」とは、話し手におけるストレスがかかった緊張状態のことである。この緊張状態は、対人関係で、相手に失礼になることや、コミュニケーションの失敗を避けなければならない、ことば遣いや態度などにより多く注意を向けなければならない場合に生じる。したがって、この緊張は「相手が上」の場合に典型的に生じ、発音器官に影響を与え、結果的に音声的特徴にも影響を与える差を生じさせるというものである。

そして、「意図的要因」であるが、話し手は対人関係を維持する目的で、相手のネガティブ・フェイス、ポジティブ・フェイスに配慮しなければならない。そのため話し手は、「あ」によって表示される話し手の「私的な」情報を常にコントロールしなければならない。例えば、相手と親しい関係であれば、ポジティブ・フェイスに配慮し、話し手の「私的な」情報を多く表示しなければならないし、相手が上であれば、ネガティブ・フェイスに配慮し、話し手の「私的な」情報は極力表示しないようにしなければならない。「意図的要因」は、このような「私的な」情報の表示のコントロールに「あ」の音声的特徴が関わるというものである。

## 6. 2 規定された結果としての感動詞の音声的特徴

次に、言語的な意味・機能や対人関係によって規定された感動詞の音声的特徴がいったいどのようなものであったか、ということについてまとめる。

### 6. 2. 1 アクセント・イントネーションの枠組みに位置づけられた感動詞の音調

3章では、感動詞の音調をアクセント・イントネーションの枠組みに位置づける試みを行ったが、3章で扱った感動詞の音調は、アクセント型と、一般的に文末に現れる音調に準じた語末音調との組み合わせですべて説明可能であった。そして、この枠組みに位置づけた音調の記述により、話し手の入力情報の処理過程との対応関係を体系的に示すことが可能となった。これらについて、以下で具体的に述べる。

まず、アクセント型については、有核と無核の型が見られた。有核で2音節感動詞の場合はすべて語頭の音節に核が伴っていた。入力情報の処理に関わらない「非処理」の感動

詞はすべて有核のアクセント型であった。一方、入力情報の処理過程を表示する感動詞については、「ええと」「うんと」のような「入力情報の処理前表示」や、「さ」「いや」「おっと」などの一部を除き、有核と無核の2つのアクセント型を有していた。この場合、語末音調が平調の場合は、有核と無核は入力情報の処理過程の違いに還元され、有核は「入力情報の処理結果」を表示し、無核は「入力情報の処理開始」を表示した。反対に、平調以外の語末音調が伴う場合は有核であっても無核であっても、「入力情報の処理結果表示」としての様々な話し手の態度を表示していた。

そして、語末音調については、「わ」「ま」を除く、入力情報の処理過程を表示する感動詞すべてに（平調を含む）複数の語末音調が見られた。語末音調には、平調以外に、疑問型上昇調、強調型上昇調、顕著な下降調、上昇下降調があり、それらは「入力情報の処理結果表示」としての様々な話し手の態度によって決定された。なお、入力情報の処理過程を表示しない「非処理」の感動詞には、平調以外の語末音調は見られなかった。

## 6. 2. 2 肯定と否定の音声的特徴

4章における肯定的な結果表示の「受け入れ」と否定的な結果表示について行った分析では、会話文読み上げ実験により得られた発話の音響分析を行い、 $F_0$ の変動幅や持続時間といった音声的特徴を分析の対象とした。

まず、肯定的な結果表示の「受け入れ」の「うん」については、相手の発話内容に対する同意・非同意という受け入れの度合いの違いにより、 $F_0$ 下降幅と持続時間に差が生じた。同意のように受け入れの度合いが大きいものについては、 $F_0$ 下降幅が大きく、持続時間が短い。それに対し、非同意のような受け入れの度合いが小さいものは、 $F_0$ 下降幅が小さく、持続時間が長くなる。この結果から、同じ「受け入れ」という意味・機能であっても、その程度に応じて、 $F_0$ 下降幅や持続時間といった音声的特徴が影響を受けるということがわかった。

また、応答要求発話に対する否定的な応答で用いられる「うん（ううん）」「いや」の音調についても音響分析を行い、それぞれの $F_0$ 曲線を観察した。その結果得られた音調のタイプは、3章の音調記述に沿うものであった。「うん」については、有核のアクセント型に強調型上昇調または疑問型上昇調が語末音調として伴う音調、「いや」については無核のアクセント型に語末音調として疑問型上昇調が伴うか、特に音調変動を伴わない平調であった。この結果から、形式の異なる感動詞が同じ意味・機能、そして用法を持っていても、

アクセント型が異なることから、同じ音調が現れるわけではないことがわかった。このことは、「はい」「ええ」「うん」が肯定的な応答の際に形式が異なるにもかかわらず、同様に下降の音調をとるという現象とは異なっていた。また、どちらも語末に問いかけの用法とは関係のない疑問型上昇調が現れていた。3章では、無核のアクセント型に語末音調として疑問型上昇調が現れた場合に、入力情報の処理結果としての「理解不能」という意味・機能に対応していたが、否定の場合にはこのような解釈はできなかった。この音調の解釈については、ひとまず強調としたものの、今後の課題として保留とした。

### 6. 2. 3 対人関係と音声的特徴

5章で取り上げた、応答発話に現れる「あ」の音声的特徴に影響を与えたのは、親疎関係については「親しい」と「初対面」、そして、上下関係については「相手が上」と「相手と同等」という対人関係であった。それぞれについて音声的特徴を見ていくと、まず「親しい」は、持続時間を問わず  $F_0$  が下降するもの、そして、 $F_0$  が平板で持続時間が 250ms のやや長めであるもの、「初対面」は  $F_0$  が平板で、持続時間が 100~150ms と比較的短いもの、「相手が上」は持続時間が 50~150ms 程度の比較的短いもの、「相手と同等」は持続時間が 250ms 以上の比較的長いもので、「相手が上」「相手と同等」とも  $F_0$  が平板になる傾向が強かった。

また、既に述べたように、対人関係と音声的特徴との関係を必然的と見た場合、話し手一聞き手間の対人関係の維持のための「生理的要因」と「意図的要因」が音声的特徴に直接影響を与える要因であると考えた。ここでは、それぞれにおける音声的特徴について以下で詳しく述べる。

まず、生理的要因である話し手の緊張は、声帯が緊張し周波数が高くなり、また、緊張により声帯周辺の筋肉がこわばることから、平板の音調になりやすい。さらに、緊張によりピッチが速くなり分節音が短くなることから、持続時間も短くなる、といった特徴が見られた。このような緊張は「相手が上」の場合に典型的に生じることから、「相手が上」の場合の音声的特徴と共通している。

そして、意図的要因、つまり、フェイスに配慮するための話し手の「私的な」情報の表示のコントロールについては、話し手の感情表現といった「私的な」情報を強く示そうと思うと、 $F_0$  変動幅も大きくなる。「私的な」情報を強く示すべき関係である「親しい」の場合にはこのような音声的特徴が現れた。逆に「私的な」情報を示さないようにしようと

すると、 $F_0$  変動幅も小さくなり、さらに、「あ」自体が目立たなくなるよう持続時間も短くなる。「私的な」情報を示さないようにすべき関係である「初対面」の関係でこのような音声的特徴が現れた。

### 6. 3 音声的特徴を規定する要因の再検討—語彙的な要因・意図的な要因・生理的な要因

6.1 節と 6.2 節では、本研究で行った議論について、音声的特徴を規定する要因と、その要因により規定された音声的特徴とに分けてまとめた。これを踏まえ、以下では、冒頭に示した感動詞の機能をめぐる 2 つの問題について方向性を示したい。

第一の問題は、音声的特徴を規定する要因についてである。既に述べたように、感動詞の音声的特徴を左右する要因としては、本研究で扱ったものの中では「言語的な意味・機能」と「対人関係」がある。言語的な意味・機能については、「入力情報の処理過程」「入力情報の様々な処理結果」という情報処理を表示するレベルと、「肯定的な結果表示における受け入れの度合い」という結果表示を度合いに応じて調整するレベルが、音声的特徴を直接左右する要因であると述べた。また、対人関係については、「親疎」「上下」という要因を扱ったが、直接音声的特徴を規定する要因としては、緊張という「生理的要因」と、相手のフェイス維持のために行う「私的な」情報の表示のコントロールという「意図的要因」を挙げた。

言語的な意味・機能と対人関係が音声的特徴を規定する要因であれば、対話で感動詞を発する話し手にとって両者は常に意識されるべきであり、それぞれが音声的特徴に影響を与えるべきである。にもかかわらず、本章の冒頭で述べたとおり、言語的な意味・機能が音声的特徴に反映されないというように、両者が協調的ではないことがある。そこで、改めて、要因同士の影響も考え、音声的特徴を規定する要因を再検討したい。

まず、感動詞の音声的特徴を規定する上で優先される要因が語彙的な要因である。これは 4 章で扱った否定の応答に用いられる「うん (ううん)」「いや」の音調からわかるように、同様の用法、意味・機能であっても、アクセント型が異なり、同じ音調とはならないことがある。これは、いくら意味が似ていても、語が異なればアクセント型も異なる可能性があるという日本語の一般的な語の性質と同じである。また逆に、「非処理」の感動詞については促しや決意などといった異なる意味・機能を持っているものの、それとは無関係に有核 (頭高型) にアクセント型が一定となっていることも、日本語の一般的な語につい

と言えることである。一般的な語とアクセント型の関係と同様、感動詞とアクセント型・語末音調のパターンについても恣意的な側面があることを考慮に入れておくべきである。

しかしながら、本研究で分析の対象とした感動詞については、3章でまとめたとおり、入力情報の処理過程と音調との間に対応関係がある感動詞、つまり、音調を駆使して話し手の心的な情報の処理過程を表示するタイプの感動詞が見られた。このようなタイプの感動詞の場合、意味・機能と入力情報の処理過程については、おおむね次のような関係があると言えよう。話し手は、具体的な意味・機能を意図した上で、感動詞の音調を駆使し、適当な情報の処理過程を表示する。一方で、聞き手はその音調から想定される話し手の情報の処理過程から、文脈に応じ、具体的な意味・機能に解釈するのである。したがって、このような情報の処理過程という要因も、音声的特徴、特に音調を規定する要因となる。

しかし、語にもともとあるアクセント型や情報の処理過程を表示するための音調のみで、話し手が意図したどおりの解釈が相手に期待できるかと言うと、必ずしもそうとは言えない。例えば、4章で扱った受け入れの度合いの異なる「うん」の音声的特徴のように、情報の処理過程としては「入力情報の処理結果表示」であっても、肯定的な要素の多寡、あるいは、聞き手に対する配慮があるかどうかにより、 $F_0$ の下降幅や持続時間は異なる。このように、相手に適切な解釈を期待するためには、情報の処理過程の表示を調節する役割も必要であろう。これには、5章で述べた、応答発話に現れる「あ」の音声的特徴の規定要因のうち、聞き手のフェイスに配慮するため、話し手の「私的な」情報の表示をコントロールするという「意図的要因」も含まれる。

したがって、話し手は聞き手に意図通りに解釈を期待するために、情報の処理過程の表示とその表示の調節を考慮に入れ、主体的に音声的特徴をコントロールしていると考えられる。これを「意図的な要因」と括ることができる。

そして、さらに音声的特徴を規定する要因としては、5章で扱った、「あ」の音声的特徴の規定要因の一つである緊張など、意図では制御不可能な要因がある。これを「生理的な要因」とする。

以上の3つの要因を図にまとめると図6-1のようになる。自然談話に現れる感動詞については、このように、3つの要因が互いに協調して音声的特徴

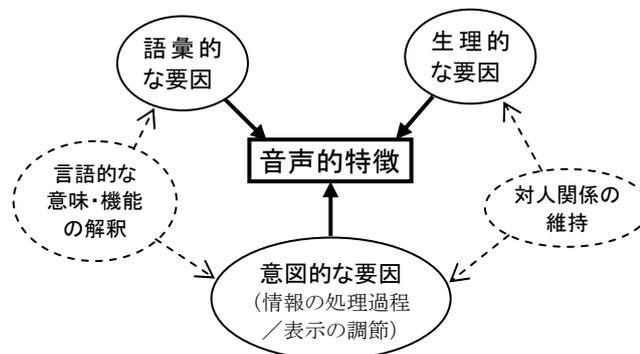


図 6-1 感動詞の音声的特徴を規定する要因

を規定していると考える。その上で、本論で議論の中心に置いた「言語的な意味・機能」と「対人関係」が音声的特徴にどのように影響を与えるかについても図に示した。談話上で解釈される感動詞の言語的な意味・機能というのは直接音声的特徴を規定する要因とはならず、語彙的な要因と意図的な要因が直接音声的特徴を規定すると考える。また、対人関係については、5章でも述べたとおり、意図的な要因と生理的な要因が直接の規定要因となる。

それでは、冒頭に示した「あ」の音声的特徴が言語的な意味・機能と対人関係を反映していないという現象をこの図に則って考えていくことにする。

既に述べたとおり、「相手が上」という対人関係と判断された下降のない平板のアは無核であることから、情報の処理過程としての「入力情報の処理開始」が意図的な要因として関わっていると考えられる。つまり、話し手の認識の瞬間的な変化が、無核のアという音声的特徴を規定しているということである。しかし、この「あ」を伴う発話は肯定的な応答であるのに、なぜ目上の相手に「入力情報の処理開始」を表示しようとするのだろうか。一般的に日本語では店頭などで「迅速に対応します」といったフレーズが客に対するサービス文句になっているように、瞬時に対応するということが相手に対する配慮となることが多い。したがって、「相手が上」のように、配慮が求められる場合には、応答発話として相手に肯定的な意志を表示するだけでなく、瞬時に対応することも表示する必要がある。そこで話し手は「瞬時に対応する」という態度、つまり自分の認識が瞬間的に相手の応答要求発話に切り換わったことを、無核のアの「入力情報の処理開始」により表示しようとするのである。一方で、そもそも、肯定的な意思は後続発話によって表示できることを考えると、発話の初めの感動詞については、必ずしも肯定的な応答という言語的な意味・機能を持つ必要もないであろう<sup>1</sup>。

この「あ」の場合は、話し手の情報の処理過程の表示が対人関係の維持に利用されたとと言える。このように、3章で考えた情報の処理過程の表示は、言語的な意味・機能として利用される場合だけではなく、対人関係の維持を目的とした相手に対する配慮として利用

---

<sup>1</sup> 森山(1989a)の談話管理のパフォーマンスにおける「演技性」という概念に近い。森山は、実際に驚くほどのことではなくとも、驚いてみせることが、談話進行の表示として重要だと述べている。ここでの、目上の相手に対する「あ」についても、本当に気がついたかどうかは別として、気がついたことを見せることが、瞬時に相手に対応しているという態度表示につながり、対人関係の維持として重要だと考えることができる。しかし、わざと驚いたり、気づいたりするという演技が通常の会話で頻繁に起こるとは考えられないことから、本研究では、こういった意味・機能に還元するのではなく、話し手の情報の処理過程に還元する説明を試みている。

される場合もあると考えられる。話し手は使用する感動詞の語彙的な要因と話し手の生理的な要因に影響を受けつつ、どちらの解釈を聞き手に期待するかによって、音声的特徴を意図的に使い分けると考えられる。

以上、感動詞の音声的特徴を規定する要因を、「語彙的な要因」「意図的な要因」「生理的な要因」という3つの要因に整理した。しかし、このモデルは今後、これらの要因に関わる様々な言語的な意味・機能や対人関係を変数とした実験を通じて検証・検討していかねばならない。

#### 6. 4 感動詞は日本語の語彙の中でどのように位置づけられるか

そして、もう1つの問題は、感動詞は日本語の一般的な語と比べ、どの程度異質であるかということである。統語論的には、1章の冒頭で述べたとおり、文の独立した成分として、1語で1文が形成できる、あるいは、主体と客体が未分化であり、文脈の支えがないと適切な解釈ができない、といった感動詞の特殊性を挙げることができる。それでは、音韻的にはどのような特殊性が挙げられるか、ここでまとめることとする。

まず、感動詞を一般的な語と同様にアクセントの枠組みで記述できるかどうかであるが、3章における考察の結果、すべての感動詞において記述が可能であった。次に、アクセント型について、一般的な語は、通常1語につき1つのアクセント型である（例外として、「流し」ナ'ガシ [タクシー、唄、風呂等] とナガシ' [台所、流すこと] のような同一語における意味の使い分けに2つのアクセント型が見られる）。感動詞についても、入力情報の処理過程に関わらない「非処理」の感動詞はアクセント型が1つであるものの、情報の処理過程を表示する感動詞は「いいや」「ええと」「うんと」「おっと」を除き、1つの語につき、有核と無核の2つの型が見られた。

そして、アクセント以外の特徴では、情報の処理過程を表示する感動詞（「わ」「ま」以外）の語末には、文末音調に準じた音調の型（本研究では「語末音調」と述べてきたもの）が複数見られた。語末音調は、入力情報の処理結果の表示、つまり、その語の意味・機能と結びつきがあると言え、したがって、語の特徴であるといえる。当然ながら一般的な語には語の特徴としての語末音調が見られることはない。

このような、日本語の一般的な語と感動詞（非処理のもの・情報の処理過程を表示するもの）のアクセント・語末音調の特徴について比較したものが表 6-1 である。これを見てまず言えることは、感動詞の音調はすべてアクセントの枠組みで記述が可能であるという

表 6-1 日本語の一般の語と感動詞との音韻的な特徴の比較

	一般の語	感動詞	
		非処理	情報の処理過程
アクセントの枠組みで記述可能か？	可能	可能	可能
アクセント型の数	通常 1つ	1つ	通常 2つ
(語に帰属する)語末音調のバリエーション	なし	なし	通常あり

ことである。その上で、感動詞は音韻的な特徴のパターンで、一般的な語とほぼ同様な特徴を持つ「非処理」の感動詞と、「情報の処理過程」の表示を担う感動詞とに少なくとも二分できることがわかる。

この結果から、音韻的に感動詞を日本語の語彙の体系の中にどのように位置づけるか考えることとする。

まず、これらの感動詞が語としての資格を持っているかについてであるが、アクセントの枠組みで記述が可能であるということは、音韻的な側面から見ると、原則として語としての扱いを受けるべきであるということになる。その上で、感動詞の特殊性を見ていくことにする。

感動詞のうち、「さ」「や」「よ」「な」「ね」「おい」「やい」「ほら」「こら」といった、入力情報の処理過程を表示するものではない「非処理」の感動詞の具体的な意味・機能には、促し、決意、呼びかけ、注意を引く、などといったものがある<sup>2</sup>。意味・機能でこのような特徴を持つものは、アクセント型の数が1つで、語末音調が伴うこともないことから、一般的な日本語の語に近い性質を持っている語であると言える。その上で特徴的なのは、これらの感動詞のアクセント型がすべて有核で、2音節感動詞では1音節目に核が伴っているという点である。

そして、上で述べた「非処理」以外の感動詞はすべて、入力情報について様々な処理過程を表示するものであった。これらはアクセント型が有核・無核の2つ、あるいは、語末音調に平調以外の音調をとるものであった。このように、末尾に特定の音調の型が伴うという音韻的な特徴は一般的な語には見られず、語でありながら文音調の性質も兼ね備えているとも言える。

このように音韻的な観点から見ると、感動詞は語としての資格はひとまず持つとは言え

<sup>2</sup> ただし「さ」については、突然道を聞かれ「サー、わかりません」のような応答不能であることを表示する「入力情報の処理結果表示」だけではなく、独り言で「サー、寝るか」と言うときの決意、客に「サー、買った買った」と言うときの促し、あるいは、電車が近づいてくるときに「サー、来るぞ」といった発話でも見られる。これらはいずれも、これから話し手または聞き手が何かを行うべきタイミング、あるいは、これから何かが起こるタイミングを提示するものではないかと考えるが、今後の課題としたい。

るが、すべてが等質で一つに括られるわけではない。音韻的に日本語の一般的な語として位置づけても遜色ない感動詞がある一方、一つの形式に複数のアクセント型、複数の語末音調が伴う、言わば、語と文の中間的な音韻的特徴を持つような、一般的な語から見るとかなり異質である感動詞も見られた。このような感動詞内における音韻的な性質の差には、話し手が情報入力に対し、何らかの処理過程を表示するかどうかと関連があることもわかった。

## 第7章 おわりに

ここまで、日本語の感動詞と言われるもののうち、他の語からの転化などではない、いわゆる「生粋の感動詞」について、先行研究では欠けていた音声的特徴の観点から感動詞の機能を考えてきた。本研究で扱った感動詞の音声的特徴については、3章では音韻的な側面から感動詞の音調の記述を試み、その上で、その音調がどういった言語的な意味・機能（入力情報の処理過程の有無と様々な処理過程）と対応しているかという大まかな全体像を示した。4章と5章では、主に音声的な側面から、様々な要因が、感動詞の主に  $F_0$  変動幅や持続時間にどう影響するのかを音響分析の観点から考えた。「様々な要因」のうち、本研究で議論の中心に置いたものは、談話における言語的な意味・機能と、話し手と聞き手の対人関係であった。

そして、6章ではそれらの結果をまとめ、それをもとに、音声的な側面から「感動詞の機能」に関する知見をいくつか指摘することができた。本研究で指摘できたことを以下に示す。

第一は、感動詞の音調記述についてである。感動詞の音調は他の一般的な日本語の語と同様に日本語のアクセント・イントネーションの枠組みで記述可能であるということである。その上で、感動詞の音調に特有な現象を見てみると、語によって同一語に有核・無核の2つのアクセント型が現れること、そして、様々な種類の語末音調（語に帰属する文末音調に準じた音調）が伴うことが見られた。

第二は、音調による感動詞の類型化と話し手の情報処理過程の表示についてである。音調の側面から感動詞を類型化すると、アクセント型が一つで、語末音調として平調以外が伴うことがない一般的な語に近い感動詞のタイプと、アクセント型が有核・無核の二つで、様々な語末音調が伴うタイプとに大きく分けられた。そして、前者のタイプは話し手の情報処理過程の表示にかかわらない感動詞、後者は情報処理過程の表示にかかわる感動詞、というように、これらの区分は話し手の情報処理過程を表示する役割を担うかどうかと対応関係を持っていることがわかった。

そして、第三は、感動詞の音声的特徴を規定する要因についてである。3章から5章にかけて行われた感動詞の音調の記述、そして、実験的手法により得られた発話データの音響分析では、音声的特徴を規定する要因として「言語的な意味・機能」と「会話参加者間

の対人関係」が議論の対象になった。そして、6章では、それらの要因を再検討し、音声的特徴に密接にかかわる要因に再構成した。その結果、感動詞の音声的特徴を規定する要因として、語彙的な要因、意図的な要因、生理的な要因があることを指摘した。語彙的な要因とは、感動詞とアクセント型・語末音調のパターンとの関係における恣意的な側面であり、一般的な語とアクセント型との間の関係にも同様に認められる。意図的な要因は、話し手における情報の処理過程の表示や、その表示の調節であり、これらを適切に選択することにより、話し手の意図通りの解釈を聞き手に期待しようとするものである。そして、生理的な要因は、緊張など話し手の意図では制御不可能な要因である。

しかしながら、本研究での分析には様々な問題点もあった。今後の課題として以下に述べることとする。

まず、3章で試みた音調の記述、そして、上で述べた要因間の対応については、より精度の高い見取り図を目指さなければならない。本研究では、音声的特徴との対応を考慮に入れ、話し手の入力情報の処理過程という抽象的な概念を用いたが、具体的な文脈における意味・機能、対人関係における相手への配慮などがこの概念によって説明可能であるかどうかについて検証を重ねていかねばならない。そして、音調の記述についても、自然発話データの分析や実験的手法により得られた発話データの分析などを通し、検証を重ねなければならない。また、本研究では触れることができなかったが、感動詞の長さを音韻的にどう扱うかも重要な課題である。特に、1音節感動詞の長さがモーラ単位でどのように区切られているのかなど、感動詞の音韻的な特徴の記述にはまだ課題が多いといえる。

それから、このような音韻的な特徴以外にも、例えば、 $F_0$ の変動幅・変動域、持続時間、分節音の特徴などについての考察が本研究ではわずかであった。本研究では、受け入れにかかわる「うん」、否定の応答の「うん」「いや」の $F_0$ 変動幅・持続時間について、そして、対人関係に関する「あ」の $F_0$ 変動と持続時間について触れたのみで、 $F_0$ の変動域、あるいは、分節音の特徴については考察が及ばなかった。今後は、意味・機能や対人関係などにより、 $F_0$ や持続時間、分節音の特徴がどのように変化するかということも考え、より実態に即した音声的特徴を記述したい。

以上のような課題を解決するための出発点として、4章で扱った「うん系」感動詞の分析の範囲をさらに広げ、「うん」の多様な音調・音声的特徴とそれを規定する要因について考えていく必要があるだろう。4章でも指摘したとおり、「うん」の多様な音調・音声的特徴の見取り図ができれば、その見取り図が基礎となり、「うん」と同様の音調を持つ、他の感動

詞へ分析を広げることが容易となるからである。

さらに、将来的には、日本語感動詞の音声的特徴と他の外国語における間投詞の音声的特徴との対照も視野に入れるべきであろう。感動詞の音調が談話上の意味・機能や対人関係にかかわる機能と関係があることから、このような対照研究は日本語教育においても有益なものとなるであろう。

このように、本研究では、感動詞の音声的特徴、特に音調を記述するための枠組みを提示し、感動詞の音声的特徴を規定する要因として、語彙的な要因、生理的な要因、話し手の情報の処理過程表示といった意図的な要因があることを、特定の言語的な意味・機能や、特定の対人関係の下において用いられる感動詞の音声的特徴の観察・分析、そして内省を通して示した。本研究で示したこれらの結論は、今後の研究によって、さらに精密な検証により修正が加えられ、より洗練されていかなければならない。しかしながら、言語的な意味・機能、あるいは、対人関係の標識といった感動詞の機能が音声的特徴によって観察可能であるということが、本研究を通していくつかの視点から明示できたと言える。この点において、本研究は「音声的特徴から見た日本語感動詞の機能」という題目に相応する内容であると言える。今後は本研究をさらに深めるとともに、談話研究や日本語教育といった音声コミュニケーションを扱う分野へのアプローチも積極的に試みたい。

## 謝辞

本論文の執筆には多くの方々のご指導・ご支援をいただきました。まず、指導教官の郡史郎先生には、博士前期課程で「音声研究」の授業を履修して以来、多大なるご指導をいただきました。特に、筆者の海外滞在中、そして、退学後も、電子メール等を通じ懇切丁寧なコメントをくださいました。郡先生のコメントで何度となく励まされたことが思い出されます。それから、副指導教官の上田功先生、田野村忠温先生には、中間発表会や最終発表会でいつも鋭いご指摘や助言をいただきました。そして、学部・博士前期課程でご指導くださった筒井佐代先生は、感動詞研究を評価してくださり、このことが研究者の道へ進むきっかけとなりました。また、近畿音声言語研究会では、アットホームな雰囲気の中で、研究会参加の皆様から様々なコメントをいただき、論文執筆のためのヒントを数多く得ることができました。さらに、日本音声学会、社会言語科学会での学会発表においても、有益なコメントをいただくことができました。

次に、本研究はいくつかの実験から知見を得ていることから、調査にご参加いただいた多くの方々のご協力なしに完成を見ることはできませんでした。一人ひとりのお名前を挙げることはできませんが、録音調査と聴取実験を合わせて、約 30 名の方々にご協力いただきました。そして、多くの方にご協力いただけたのも、様々な方からご紹介をいただいたおかげです。

それから、以前言語社会研究科（現・言語文化研究科言語社会専攻）で音声学に携わっていた小川智美さんには、録音された音声データの整理をお願いしました。また、言語社会研究科の同期であった古川由理子さん、そして、文学研究科の大学院生であった岡本和恵さんには、原稿の添削、校正をお願いしました。

なお、本研究の一部（主に 4 章）は、2006 年 4 月より 1 年間、財団法人博報児童教育振興会「ことばと文化・教育」の研究助成を受けました（助成番号：05-A-0022，研究タイトル：「日本語感動詞の音声の意味するもの—談話上の機能を中心に—」，研究代表者：須藤潤）。また、5 章の論考のもととなった『社会言語科学』掲載の論文「会話参加者間の社会的関係による感動詞の音声的特徴—応答における「あ」のバリエーション—」（須藤 2005b）は 2007 年 3 月に社会言語科学会から「徳川宗賢賞萌芽賞」をいただきました。

ここに挙げた方々をはじめとする、数多くの方々のご指導・ご支援に深く感謝の意を表します。

【資料1】音調（音の高さの変動）を示す記号

- ´           アクセント核（核のあるモーラの直後に記す）
- ˘           文末（語末）音調の顕著な下降調に相当する下降，あるいは，アクセントによる下降に相当する下降の音声学的な表記（音調変化の開始点に記す）
- ˊ           文末（語末）音調の強調型上昇調に相当する上昇，あるいは，アクセントによる上昇に相当する上昇の音声学的な表記（音調変化の開始点に記す）
- ↓           文末（語末）音調の顕著な下降調の音韻的な表記（音調変化の開始点に記す）
- ↑           文末（語末）音調の強調型上昇調の音韻的な表記（音調変化の開始点に記す）
- ↗           文末（語末）音調の疑問型上昇調の音韻的な表記，および，それに相当する上昇の音声学的な表記（音調変化の開始点に記す）

【資料 2】 談話資料文字化の際に使われた記号

[	二人以上の発話や音声为重なり始めた時点.
]	発話や音声の重なりが終了した時点.
=	前後に感知可能な間隙がまったくない.
(数字)	その数字の秒数だけの間隙がある.
(.)	ごくわずかの感知可能な間隙 (0.2 秒程度) がある.
:	直前の音が引き伸ばされている. コロンの数は引き伸ばしの相対的長さ.
-	直前の語や発話に声門閉鎖音が聞こえる.
.	直前部分が下降調の抑揚.
?	直前部分が上昇調の抑揚.
文字	下線部分が前後の発声に比べ音量が大きく強調されて発話されている.
°文字°	この部分が前後の発声に比べ音量が小さく弱められて発話されている.
hh	呼気音 (笑いやため息) を示す. h の数は呼気音の相対的な長さ.
(h)	呼気音にことばが重ねられている場合に, 発話の途中に挿入する.
.h	吸気音 (笑いや息継ぎ) を示す. h の数は吸気音の相対的な長さ.
(発話者名)	発話者が誰であるかに疑問がある場合.
((文字))	転記者によるさまざまな種類の注釈・説明.

【資料3】 調査協力者の性別・年齢・出身地・職業

	性別	年齢	出身	職業
A	男性	20歳代前半	東京都足立区	学生
B	女性	30歳代前半	東京都杉並区	会社員
C	女性	20歳代後半	神奈川県横浜市	フリーター
D	女性	20歳代前半	東京都葛飾区	フリーター
E	女性	40歳代前半	東京都文京区	学生
F	男性	30歳代前半	神奈川県川崎市	学生
G	女性	20歳代後半	東京都八王子市	会社員
H	男性	40歳代前半	東京都北区	学生
I	男性	20歳代前半	東京都足立区	学生
J	男性	20歳代後半	東京都稲城市	研究者

【資料4】 調査協力者が読む会話文のシート (1) (会話文を一部省略)

●以下に挙げる会話例を、その状況に合わせて、その会話の話し手になったつもりで(できるだけ話しているように)読んでください。

○会話例の中の□の部分には、「ん」の音(一般的に「うん」「ん」「うん?」「ん?」「ううん」「うーん」「ふん」「ふーん」「んー」などと表記されるものです)を、長さや高さを自由に変えて、会話の流れに適切だと思う「ん」を入れてください。

[手順]

- ・まず、会話例の説明・せりふをよく読んでください。
- ・あなたは「Bさん」になってください。
- ・声に出して読んで練習しても構いません。何度でもけっこうです。
- ・説明・せりふを読んだら、一度せりふを読み合う練習をします。
- ・そのあと、本番で3回読み合います。

4. AとBは学校でよくおしゃべりする親しい友達です。AとBは学校の課題で「引きこもり」についての対策を考えることになっていて、そのことを話し合っています。BはAの意見を聞いて同意します。

A: なんか、だれとも付き合わないでひきこんでるよりは、  
出会い系で積極的に友達みつけたほうがマシかな、とは思うよ。  
B: □、かなりマシかも。

5. AとBは学校でよくおしゃべりする親しい友達です。AとBは学校の課題で「引きこもり」についての対策を考えることになっていて、そのことを話し合っています。BはAの意見を聞いていながらも、Aの意見には納得いかないところがあるという姿勢をとっています。

A: なんか、だれとも付き合わないでひきこんでるよりは、  
出会い系で積極的に友達みつけたほうがマシかな、とは思うよ。  
B: □、でもなんか出会い系ってさ、危なそうだし、  
もっというんな方法あるんじゃないかなって思うんだけど。

【資料 5】 調査協力者が読む会話文のシート (2)

●以下に挙げる会話例を、その状況に合わせて、その会話の話し手になったつもりで(できるだけ話しているように)読んでください。

○会話例の中の□の部分には、「ん」の音(一般的に「うん」「ん」「うん?」「ん?」「ううん」「うーん」「ふん」「ふーん」「んー」などと表記されるものです)を、長さや高さを自由に変えて、会話の流れに適切だと思う「ん」を入れてください。

[手順]

- ・まず、会話例の説明・せりふをよく読んでください。
- ・あなたは「B さん」になってください。
- ・声に出して読んで練習しても構いません。何度でもけっこうです。
- ・説明・せりふを読んだら、一度せりふを読み合う練習をします。
- ・そのあと、本番で3回読み合います。

1. A と B は学校でよくおしゃべりする親しい友達です。A が携帯電話でとった写真を見ながら B は送って欲しいと頼んでいます。A は携帯の会社はエーユーかと聞きますが、B は違うと答えます。

A: これけっこういいでしょ。

B: じゃ、ケータイに送ってよ。

A: ケータイって、エーユー?

B: □、ドコモ。

A: ドコモには送れないかも。

B: え、そうなの?

【資料 6】 調査協力者が読む会話文のシート (3)

●以下に挙げる会話例を、その状況に合わせて、その会話の話し手になったつもりで(できるだけ話しているように)読んでください。

○会話例の中の□の部分には、「いや」を長さや高さを自由に変えて、会話の流れに適切になるように入れてください。

[手順]

- ・まず、会話例の説明・せりふをよく読んでください。
- ・あなたは「B さん」になってください。
- ・声に出して読んで練習しても構いません。何度でもけっこうです。
- ・説明・せりふを読んだら、一度せりふを読み合う練習をします。
- ・そのあと、本番で 3 回読み合います。

1. A と B は学校でよくおしゃべりする親しい友達です。A が携帯電話でとった写真を見ながら B は送って欲しいと頼んでいます。A は携帯の会社はエーユーかと聞きますが、B は違うと答えます。

A: これけっこういいでしょ。

B: じゃ、ケータイに送ってよ。

A: ケータイって、エーユー？

B: □、ドコモ。

A: ドコモには送れないかも。

B: え、そうなの？

【資料7】「あ」を含む会話文と対人関係

会話文 番号	与えられた文脈と会話文 (ゴシックの発話が分析対象)	対人関係 (会話文での設定 Aが相手, Bが自分)
1-1	<p>クラブで使うノートパソコンを先生が持ってきたことをAがBに確認している。(Aは先生から、クラブにノートパソコンを持っていくということを聞いていた.)</p> <p>A: _____さん。(呼びかけ) B: ん? A: 先生、きょう、ノートパソコン持ってきてなかった? B: あ、持って来てたよ。</p>	<p>相手が自分と同等(同級生)・親しい</p> <p>(A(学生)とB(学生)は同じ学年で同じ年齢、同じクラブに所属していて友達同士.)</p>
1-2	<p>クラブで使うノートパソコンを先生が持ってきたことをAがBに確認している。(Aは先生から、クラブにノートパソコンを持っていくということを聞いていた.)</p> <p>A: _____さん。(呼びかけ) B: はい。 A: 先生、きょう、ノートパソコン持ってきてなかった? B: あ、持って来てましたよ。</p>	<p>相手が自分より上(先輩)・親しい</p> <p>(A(学生)はB(学生)の先輩(年上で学年も上)。同じクラブに所属していてお互い親しい.)</p>
1-3	<p>クラブで使うノートパソコンを先生が持ってきたことをAがBに確認している。(AがOBとして先生に、クラブのために使うノートパソコンを寄贈した.)</p> <p>A: あのう。 B: はい。 A: 先生、きょう、ノートパソコン持って来てませんでしたか? B: あ、持って来てましたけど。</p>	<p>相手が自分より上(OB)・初対面</p> <p>(A(会社員)はB(学生)の所属しているクラブのOB(年上)。今回、初めて会う.)</p>
1-4	<p>クラブで使うノートパソコンを先生が持ってきたことをAがBに確認している。(Aは先生から、クラブにノートパソコンを持っていくということを聞いていた.)</p> <p>A: あのう。 B: はい。 A: 先生、きょう、ノートパソコン持って来てませんでしたか? B: あ、持って来てましたよ。</p>	<p>相手が自分と同等(同級生)・初対面</p> <p>(A(学生)とB(学生)は新入生(同じ学年で同じ年齢)、同じクラブに入っただけで、お互い初めて話す.)</p>
2-1	<p>AはBに相談があって、別の日に会う約束をしている。</p> <p>A: それで、何曜日がいい? B: あ、いつでもいいよ。 A: ほんとう? じゃ、水曜日でもいい? B: うん。 A: じゃ、水曜日。</p>	<p>相手が自分と同等(同級生)・親しい</p> <p>(A(学生)とB(学生)は同じ学年で同じ年齢、同じクラブに所属していて友達同士.)</p>
2-2	<p>AはBに相談があって、別の日に会う約束をしている。</p> <p>A: それで、何曜日がいい? B: あ、いつでもいいですよ。 A: ほんとう? じゃ、水曜日でもいい? B: はい。 A: じゃ、水曜日。</p>	<p>相手が自分より上(先輩)・親しい</p> <p>(A(学生)はB(学生)の先輩(年上で学年も上)。同じクラブに所属していてお互い親しい.)</p>
2-3	<p>AはBと会って、就職について話す日程をつめている。</p> <p>A: それで、何曜日がよくないですか。 B: あ、いつでも結構ですが。 A: そうですね。じゃ、水曜日でも構いませんか? B: はい。 A: じゃ、水曜日ということで。</p>	<p>相手が自分より上(OB)・初対面</p> <p>(A(クラブのOB)とB(学生)。BはAの会社に就職を希望してOB訪問をするために、今回、Aに初めて会う.)</p>
2-4	<p>クラブの新歓コンパでやる、新入生の出し物について話し合うための日程をつめている。</p> <p>A: それで、何曜日がいいですか。 B: あ、いつでもいいですよ。 A: そうですね。じゃ、水曜日でもいいですか? B: はい。 A: じゃ、水曜日にしましょう。</p>	<p>相手が自分と同等(同級生)・初対面</p> <p>(A(学生)とB(学生)は新入生(同じ学年で同じ年齢)、同じクラブに入っただけで、お互い初めて話す.)</p>

【参考文献】

[日本語]

- 青柳にし紀 (2001) 「「はい」と「ええ」の意味・機能—音声、イントネーションの視点から」『信州大学留学生センター紀要』 2, 23-34.
- 浅田秀子 (2005) 「感動詞の音調表記法について—三線記譜法のすすめく「ああ」を例として>」佐藤喜代治博士追悼論集刊行会 (編) 『日本語学の蓄積と展望』 187-211, 明治書院.
- 石井佳世 (2005) 「えーと、あの—間投詞の臨床語用論」『現代のエスプリ 臨床の語用論 I』 51-59, 至文堂.
- 石原道博 (編訳) (1985) 『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』 岩波書店.
- 伊豆原英子 (1994) 「感動詞・間投助詞・終助詞「ね・ねえ」のイントネーション—談話進行との関わりから—」『日本語教育』 84, 96-107.
- 今西幸子 (1992) 「電話の会話のストラテジー」『日本語学』 11: 10, 65-72.
- 上村幸雄 (1989) 「日本語のイントネーション」言語学研究会 (編) 『ことばの科学』 3, 193-220, むぎ書房.
- 宇佐美まゆみ (2001a) 「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」『談話のポライトネス』 9-58, 凡人社.
- 宇佐美まゆみ (2001b) 「対人コミュニケーションの社会心理学—ディスコース・ポライトネスという観点から」『言語』 30: 7, 78-85.
- 宇野義方 (1984) 「あいさつ語について」鈴木一彦・林巨樹 (編) 『研究資料日本文法』 4, 203-219, 明治書院.
- 上野善道 (1975) 「アクセント素の弁別的特徴」服部四郎 (編) 『言語の科学』 6, 23-84.
- 上野善道 (1977) 「日本語のアクセント」『音韻』 (岩波講座日本語; 5) 281-321, 岩波書店.
- 上野善道 (1984) 「地方アクセントの研究のために」『国文学 解釈と鑑賞』 (昭和 59 年 5 月特別増刊号) 49: 7, 47-64.
- 上野善道 (2003) 「アクセントの体系と仕組み」北原保雄 (監修)・上野善道 (編) 『音声・音韻』 (朝倉日本語講座; 3) 61-84, 朝倉書店.
- 大槻文彦 (1897) 『廣日本文典・同別記』 (1980 年復刻) 勉誠社.
- 沖久雄 (1993) 「肯定応答詞と否定応答詞の体系」『日本語学』 12: 4, 58-67.
- 奥津敬一郎 (1989) 「応答詞「はい」と「いいえ」の機能」『日本語学』 8: 8, 4-14.

- 川上 蓁 (1956) 「昇降調の三種」『音声学会会報』92, 7-8, 25.
- 川上 蓁 (1963) 「文末などの上昇調について」国学院大学国語研究会 (編) 『国語研究』16, 25-46.
- 川上 蓁 (1992) 「うなづきと下降調」東京学芸大学国語国文学会 (編) 『学芸国語国文学』24, 23-26.
- 川上 蓁 (1995) 「文頭のイントネーション」『日本語アクセント論集』61-75, 汲古書院.
- 菊地 康人 (1997) 『敬語』(講談社学術文庫; 1268) 講談社.
- 北川 千里 (1977) 「「はい」と「えゝ」」『日本語教育』33, 65-72.
- 串田 秀也 (2002) 「会話中の「うん」と「そう」—話者性の交渉との関わりで—」定延利之 (編) 『「うん」と「そう」の言語学』5-46, ひつじ書房.
- 串田 秀也 (2005) 「「いや」のコミュニケーション学—会話分析の立場から」『言語』34: 11, 44-51.
- 串田 秀也・定延利之・伝康晴 (編) (2005) 『活動としての文と発話』(シリーズ文と発話; 1) ひつじ書房.
- 窪 菌晴夫 (1997) 「アクセント・イントネーション構造と文法」杉藤美代子 (監修)・国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫 (編) 『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』(日本語音声; 2) 203-229, 三省堂.
- 窪 菌晴夫 (1999) 「歌謡におけるモーラと音節」音声文法研究会 (編) 『文法と音声』2, 241-260, くろしお出版.
- 熊谷 智子 (2003) 「シナリオのある会話—ドラマの日本語の特徴—」『日本語学』22: 2, 6-14.
- 熊取谷 哲夫 (1992) 「電話会話の開始と終結における「はい」と「もしもし」と「じゃ」の談話分析」『日本語学』11: 10, 14-25.
- 郡 史郎 (1997) 「日本語のイントネーション—型と機能—」杉藤美代子 (監修)・国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫 (編) 『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』(日本語音声; 2) 169-202, 三省堂.
- 郡 史郎 (2003) 「イントネーション」北原保雄 (監修)・上野善道 (編) 『音声・音韻』(朝倉日本語講座; 3) 109-131, 朝倉書店.
- 郡 史郎 (2006a) 「対人関係・対人態度を反映する韻律的特徴—特に目上に対する話し方について—」土岐哲先生還暦記念論文集編集委員会 (編) 『日本語の教育から研究へ』167-176, くろしお出版.

- 郡史郎 (2006b) 「日本語の「口調」にはどんな種類があるか」『音声研究』10: 3, 52-68.
- 斎藤純男 (2006) 『日本語音声学入門』(改訂版) 三省堂.
- 佐久間鼎 (1952) 『現代日本語法の研究』(改訂版: 1983年復刊) くろしお出版.
- 定延利之 (2002) 「「うん」と「そう」に意味はあるか」定延利之 (編) 『「うん」と「そう」の言語学』75-112, ひつじ書房.
- 定延利之 (2005a) 「「表す」感動詞から「する」感動詞へ」『言語』34: 11, 33-39.
- 定延利之 (2005b) 「日本語のイントネーションとアクセントの関係の多様性」『日本語科学』17, 5-25.
- 定延利之・田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええ」と「あの(一)」」『言語研究』108, 74-93.
- 佐藤和之 (2001) 「日本語音声の生成と音響特徴」城生佰太郎 (編) 『コンピュータ音声学』(日本語教育学シリーズ; 3) 47-106, おうふう.
- ザトラウスキー, ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版.
- 澤登春仁 (1984) 「外国語の挨拶語」鈴木一彦・林巨樹 (編) 『研究資料日本文法』(第4巻; 修飾句・独立句編) 221-238, 明治書院.
- 塩沢孝子 (1979) 「日本語の Hesitation に関する一考察」F.C.パン (編) 『ことばの諸相』(社会言語学シリーズ; 2) 151-166, 文化評論出版.
- 杉藤美代子 (1983) 「日本語のアクセントとイントネーション—東京方言の「花」と「鼻」の相違—」文化庁 (編) 『言葉と音声』(「ことば」シリーズ; 18) 55-70.
- 杉藤美代子 (1989) 「談話におけるポーズとイントネーション」杉藤美代子 (編) 『日本語の音声・音韻 (上)』(講座日本語と日本語教育; 2) 343-364.
- 杉藤美代子 (1993) 「効果的な談話とあいづちの特徴及びそのタイミング」『日本語学』12: 4, 11-20.
- 杉藤美代子 (1997) 「おそさがり」『音声波形は語る』(日本語音声の研究; 4) 155-241, 和泉書院.
- 杉藤美代子 (2003) 「ドラマの音声」『日本語学』22: 2, 16-23.
- 杉戸清樹 (1987) 「発話のうけつぎ」『談話行動の諸相—座談資料の分析』68-106, 三省堂.
- 杉戸清樹・尾崎喜光 (2006) 「「敬意表現」から「言語行動における配慮」へ」『言語行動における「配慮」の諸相』1-10, くろしお出版.

- 鈴木一彦 (1973) 「感動詞とは何か」 鈴木一彦・林巨樹 (編) 『接続詞・感動詞』 (品詞別日本文法講座; 6) 137-175, 明治書院.
- 須藤潤 (2001) 「感動詞「あ」の音声的特徴と会話参加者間の社会的関係」 大阪外国語大学日本語講座 (編) 『日本語・日本文化研究』 11, 117-128.
- 須藤潤 (2002) 「感動詞の音声的特徴が意味するもの—感動詞「あ」と会話参加者間の社会的関係—」 大阪外国語大学言語社会研究科修士論文.
- 須藤潤 (2005a) 「感動詞の使用が及ぼす「丁寧さ」—「あ」の分析を中心に—」 『社会言語科学会第 15 回大会発表論文集』 186-189.
- 須藤潤 (2005b) 「会話参加者間の社会的関係による感動詞の音声的特徴—応答における「あ」のバリエーション—」 『社会言語科学』 8: 1, 181-193.
- 須藤潤 (2006) 「「受け入れ」にかかわる「うん」系感動詞の韻律的特徴」 『日本音声学会第 20 回全国大会予稿集』 123-128.
- 須藤潤 (2007a) 「感動詞のモーラ性と意味・機能—「あ」を用いた聴取実験による予備的考察」 近畿音声言語研究会 2 月月例会口頭発表資料.
- 須藤潤 (2007b) 「否定の感動詞「ううん」「いや」の音声的特徴に関する一考察」 『社会言語科学会第 19 回大会発表論文集』 14-17.
- 須藤潤 (2007c) 「日本語感動詞「うん」の意味・機能の分類から音声的特徴の分析へ」 『音声研究』 11: 3, 94-106.
- 高野照司 (2001) 「日本人の言語交渉における対立意見表明の韻律モダリティー—レジスター研究の視点から—」 北星大学文学部 (編) 『北星論集』 38, 13-31.
- 高橋太郎・金子尚一・金田章宏・齋美智子・鈴木泰・須田淳一・松本泰丈 (2005) 『日本語の文法』 ひつじ書房.
- 田川恭識 (2006) 「「平静の答え」と「不満の答え」の弁別に対するイントネーションパターンの影響」 四天王寺国際仏教大学紀要編集委員会 (編) 『四天王寺国際仏教大学紀要』 42, 223-236.
- 田窪行則 (1992) 「談話管理の標識について」 『文化言語学—その提言と建設』 1097-1110, 三省堂.
- 田窪行則 (1994) 「音声対話の言語学的モデル: 談話管理標識としての感動詞の分析」 『情報処理学会研究報告. SLP, 音声言語情報処理』 15-22.
- 田窪行則 (2005) 「感動詞の言語学的位置づけ」 『言語』 34: 11, 14-21.

- 田窪行則・金水敏（1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会（編）『文法と音声』257-279, くろしお出版.
- 田中敏（1981）「日本語発話における言いよどみ現象の分類と特徴づけ」『心理学研究』52: 4, 213-218.
- 田中敏（1982）「日本語発話における有声休止の2重機能」『心理学研究』53: 1, 46-49.
- 田中敏（1993）「休止の意味論」『言語』22: 8, 20-27.
- 田中敏（1995）『スピーチの言語心理学モデル—音声の生産と意味処理の関係の実証的検討—』風間書房.
- 土屋菜穂子（1997）「感動詞の分類—対話コーパスを資料として—」『平成9年国語学会春季大会発表要旨集』70-77.
- 土屋菜穂子（1999）「感動詞の分類—対話コーパスを資料として—」青山学院大学文学部（編）『紀要』41, 239-255.
- 富樫純一（2002a）「談話標識「ふーん」の機能」『日本語文法』2: 2, 95-111.
- 富樫純一（2002b）「「はい」と「うん」の関係をめぐって」定延利之（編）『「うん」と「そう」の言語学』127-157, ひつじ書房.
- 富樫純一（2005a）「驚きを伝えるということ—感動詞的「あっ」と「わっ」の分析を通して」串田秀也・定延利之・伝康晴（編）『活動としての文と発話』（シリーズ文と発話; 1) 229-251, ひつじ書房.
- 富樫純一（2005b）「肯定・検索・問い返し—感動詞「ええ」の統一的記述を求めて」筑波大学大学院人文社会科学部研究科文芸・言語専攻（編）『文藝言語研究言語篇』48, 77-93.
- 富樫純一（2005c）「「へえ」「ほう」「ふーん」の意味論」『言語』34: 11, 22-29.
- 富樫純一（2006）「否定応答表現「いえ」「いいえ」「いや」」矢沢真人・橋本修（編）『現代日本語文法 現象と理論のインタラクション』23-46, ひつじ書房.
- 時枝誠記（1950）『日本文法口語篇』岩波書店.
- 中島悦子（2000）「あいづちに使用される「はい」と「うん」—あらたまり度・待遇度から見た出現実態—」現代日本語研究会（編）『ことば』21, 104-113.
- 中島悦子（2001）「自然談話における応答詞の使い分け「はい」と「うん」, 「いいえ」と「うん」—」国士舘短期大学人文学会（編）『国士舘短期大学紀要』26, 75-99.
- ナガノ・マドセン, ヤスコ・杉藤美代子（1999）「東京と大阪の談話におけるあいづちの種類とその運用」『日本語科学』5, 26-45.

- 那須昭夫 (2005) 「複合外来語の短縮に見る特殊モーラの非対称性」大阪外国語大学日本語講座 (編) 『日本語・日本文化研究』 15, 9-21.
- 西川眞由美 (2002) 「談話標識 oh」『英語語法文法研究』 9, 110-125.
- 西川眞由美 (2003) 「Phatic Aspects of English Interjections」奈良女子大学大学院人間文化研究科 (編) 『人間文化研究科年報』 18, 79-92.
- 橋内武 (1999) 『ディスコース—談話の織りなす世界—』くろしお出版.
- 橋本進吉 (1948) 「国語法要説」『国語法研究』(橋本進吉博士著作集第二冊) 岩波書店.
- 橋本進吉 (1959) 『国文法体系論』岩波書店.
- 橋彌和秀・小林洋美 (1998) 「社会的出会い場面における間投詞の“使い分け”」『日本音声学会第 12 回全国大会予稿集』 11-16.
- 服部四郎 (1951) 『音声学』岩波書店.
- 服部四郎 (1973) 「アクセント素とは何か? そしてその弁別的特徴とは?」服部四郎 (編) 『言語の科学』 4, 1-61.
- 林康子 (1998) 「感動詞「ええ」におけるピッチ曲線と感情認知」『電子情報通信学会技術研究報告』 98: 177, 65-72.
- 坊農真弓 (2001) 「音声対話における感動詞・応答詞の感情的意味機能—「ああ」を手がかりに」『第 7 回社会言語科学学会研究発表会予稿集』 113-118.
- 坊農真弓 (2002) 「プロソディからみた「うん」と「そう」 定延利之 (編) 『「うん」と「そう」の言語学』 113-126, ひつじ書房.
- 堀口純子 (1988) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』 64, 13-26.
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版.
- 前川喜久雄 (1997) 「音声による情報伝達のメカニズム」(音声言語としての話しことば; 1) 『日本語学』 16: 11, 95-105.
- 前川喜久雄・吉岡泰夫 (1997) 「発話の丁寧さに対する語彙的要因と韻律的要因の寄与」『国語学』 190, 131-120.
- 水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』 7: 13, 4-11.
- 皆川泰代・前川喜久雄・桐谷滋 (2002) 「日本語学習者の長／短母音の同定におけるピッチ型と音節位置の効果」『音声研究』 6: 2, 88-97.
- 南不二男 (1979) 「階層差と待遇表現」『言語生活』 328, 18-28.
- 宮地裕 (1963) 「イントネーション」『話しことばの文型 (2) —独話資料による研究』 178-208,

秀英出版.

宮地裕 (1979) 『文論』 明治書院.

ミルズ, サラ (2006) 『言語学とジェンダー論への問い—丁寧さとは何か』 明石書房.

メイナード, 泉子・K (1993) 『会話分析』 くろしお出版.

森岡健二 (1973) 「文章展開と接続詞・感動詞」 鈴木一彦・林巨樹 (編) 『接続詞・感動詞』  
(品詞別日本文法講座; 6) 7-44, 明治書院.

森田良行 (1973) 「感動詞の変遷」 鈴木一彦・林巨樹 (編) 『接続詞・感動詞』 (品詞別日本  
文法講座; 6) 177-208, 明治書院.

森山卓郎 (1989a) 「応答と談話管理システム」 大阪大学文学部日本学科 (言語系) (編) 『阪  
大日本語研究』 1, 63-88.

森山卓郎 (1989b) 「コミュニケーションにおける聞き手情報—聞き手情報配慮非配慮の理  
論—」 仁田義雄・益岡隆志 (編) 『日本語のモダリティ』 95-120, くろしお出版.

森山卓郎 (1996) 「情動的感動詞考」 大阪大学国語国文学会 (編) 『語文』 65, 51-62.

森山卓郎 (1997) 「一語文とそのイントネーション」 音声文法研究会 (編) 『文法と音声』  
75-96, くろしお出版.

森山卓郎・張敬茹 (2002) 「動作発動の感動詞「さあ」「それ」をめぐって—一日中対照的観  
点も含めて—」 『日本語文法』 2: 2, 128-143.

安田喜代門 (1928) 『国語法概説』 中興館.

山口堯二 (1984) 「感動詞・間投詞・応答詞」 鈴木一彦・林巨樹 (編) 『研究資料日本文法』  
(第4巻; 修飾句・独立句編) 125-157, 明治書院.

山田孝雄 (1908) 『日本文法論』 (1970年復刻) 宝文館出版.

山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』 くろしお出版.

山根智恵 (2003) 「談話における「いや」の用法」 岡山大学法文学部言語・国語・国文学研  
究室 (編) 『岡大國文論稿』 31, 136-145.

吉沢典男 (1960) 「イントネーション」 『話しことばの文型 (1) —対話資料による研究』 249-288,  
秀英出版.

リッチモンド, V. P. ・マクロスキー, J. C. (2006) 『非言語行動の心理学—対人関係とコミ  
ュニケーション理解のために—』 北大路書房.

[英語]

- Abe, I. (1998) "Intonation in Japanese." In D. Hirst and A. Di Cristo(eds.) *Intonation Systems*. (pp. 360-375). Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, P. and Levinson, S. D. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Campbell, N. and Erickson, D. (2004) "What do People Hear? A Study of the Perception of Non-verbal Affective Information in Conversational Speech," *Onsei Kenkyuu* (『音声研究』) 8: 1, 9-28.
- Catford, J. C. (2001) *A Practical Introduction to Phonetics*. (second ed.) Oxford: Oxford University Press. [竹林滋・設楽優子・内田洋子 (訳) (2006) 『実践音声学入門』大修館書店.]
- Couper-Kuhlen, E. and Selting, M. (1996) *Prosody in Conversation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crystal, D. (1969) *Prosodic Systems and Intonation in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fujimura, O. (1962) "Analysis of nasal consonants," *Journal of the Acoustical Society of America*, 34, 1865-1875.
- Fujisaki, H. (1997) "Prosody, models, and spontaneous speech." In Y. Sagisaka, N. Campbell and N. Higuchi (eds.) *Computing Prosody: Computational Models for Processing Spontaneous Speech*. (pp. 27-42). New York: Springer.
- Howell, R. W. and Yamaguchi, M. (1979) "Hesitation Phenomena in English and Japanese." In F. C. Peng (ed.) *Kotoba no Shosoo* (『ことばの諸相』) . (pp. 125-149). Hiroshima: Bunka Hyooron Shuppan (文化評論出版) .
- Ito, M. (2002) "Japanese politeness and suprasegmentals - a study based on natural speech materials." In *Speech Prosody 2002*. (pp. 415-418). ISCA Archive, <http://www.isca-speech.org/archive/sp2002>
- Kent, R. D and Read, C. (1992) *The acoustic analysis of speech*. San Diego: Singular Pub. Group. [荒井隆行・菅原勉 (監訳) 『音声の音響分析』海文堂出版.]
- Kubozono, H. and Giriko, M. (2005) "Vowel Quality and Emotion in Japanese," *On-in Kenkyuu* (『音韻研究』) 8, 33-40.
- Lallge, M. G. and Cook, M. (1969) "An experimental investigation of the function of filled pauses

- in speech," *Language and Science* 12, 24-28.
- Laver, J. and Trudgill, P. (1979) "Phonetic and linguistic markers in speech." In K. R. Scherer and H. Giles (eds.) *Social markers in speech*. (pp. 1-32). Cambridge: Cambridge University Press.
- Loveday, L. (1981) "Pitch, politeness and sexual role: an exploratory investigation into the pitch correlates of English and Japanese politeness formulae," *Language and Speech* 24: 1, 71-89.
- Matsumoto, Y. (1988) "Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese," *Journal of Pragmatics* 12, 403-426.
- Maynard, S. K. (1989) *Japanese Conversation: Self-contextualization through Structure and Interactional Management*. Norwood: Ablex Pub..
- O'Connell, D. C., Kowal, S. and Ageneau, C. (2005) "Interjections in Interviews," *Journal of Psycholinguistic Research* 34: 2, 153-171.
- Ohala, J. J. (1984) "An Ethnological Perspective on Common Cross-Language Utilization of F0 of Voice," *Phonetica* 41: 1, 1-16.
- Pomerantz, A. (1984) "Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred turn shapes." In J. M. Atkinson and J. Heritage (eds.) *Structures of Social Action*. (pp. 57-101). Cambridge: Cambridge University Press.
- Potter, R. K., Kopp, G. A. and Kopp, G. K. (1966) *Visible Speech*. New York: Dover Publications.
- Schiffrin, D. (1988) *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schourup, L. (2002) "Why as a Prefatory Interjection," *Gengo Kenkyuu* (『言語研究』) 122, 1-43.
- Trager, G. L. (1958) "Paralanguage: A first approximation," *Studies in Linguistics* 13, 1-12.
- Uldall, E. (1964) "Dimensions of meaning in intonation." In D. Abercrombie, D. B. Fry, P. A. D. MacCarthy, N. C. Scott and J. L. M. Trim (eds.) *In Honor of Daniel Jones*. (pp.271-279). London: Longmans, Green and Co., Ltd.
- Yuasa, I. (1999) "The effect of an interlocutor's gender on pitch-ranges employed by Japanese men." *Proceedings of the XIVth international Congress of Phonetic Sciences* 2, 1605-1608.
- Žegarac, V. and Clark, B. (1999) "Phatic interpretations and phatic communication," *Journal of Linguistics* 35, 321-346.

[辞典類]

大槻文彦（1889）『言海』（ちくま学芸文庫：2004年覆製）筑摩書房.

亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）（1995）『言語学大辞典』（第6巻；術語編）三省堂.

日本放送協会放送文化研究所（編）（1998）『NHK 日本語発音アクセント辞典』日本放送出版協会.

小学館国語辞典編集部（編）（2001）『日本国語大辞典』（第二版）小学館.

金田一春彦（監修）・秋永一枝（編）（2001）『新明解日本語アクセント辞典』三省堂.